
魔法少女リリカルなのはStrikerS ～凡人と呼ばれた男の日常～

桜川リマ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikers〜凡人と呼ばれた男の日常〜

【Nコード】

N5076N

【作者名】

桜川リマ

【あらすじ】

機動六課に1週間遅れてきた青年
柊あずさ FW陣としてみんなと日々頑張るが
その裏には暗い過去があった…

暗い過去と明るい今
あずさが六課内で育っていく物語です

題名少し変えました

始まり（前書き）

初投稿です。

いろいろ誤字脱字があると思いますので…

温かい目で見てください！！

始まり

八神はやてを部隊長とする機動六課が始動してから約1週間がたっていた。

六課前

「俺が今日から働く場所かあ…まずは部隊長に会わなきゃな」

青年が呟いていた。

すると青年の胸元から声が聞こえてきた。

「ねえ、あずさん部隊長室までは私に案内させてください」

「別にいいけど…お前わかんのか」

「大丈夫です。ボスがいる所は最上階か最下層ですから」

「バカか！！部隊長は悪者じゃねえゲームとっしょにするなもう自分で行く」

あずさと呼ばれた青年はおこりながら歩いていく

彼の名前は柊あずさ

身長は平均 髪の色は黒に少し茶が混ざった感じ
整った顔立ちと名前のせいがよく女に間違えられることもしばしば…

3時間後

部隊長室

「はやてちゃん、この書類は何ですか？」

と銀髪の少女・・・リインが5枚ほどの紙を見せながらはやてに問う
リインはこのミッドチルダでいうユニゾンデバイスだ。

「それわな、今日からうちにくる人の資料なんよ。」

「へえ、この人16歳でいろいろな資格もってますね・・・あれでもこの人いろいろなところに行ってますね？」
これだけで2枚あとは資格つてすごすぎません!！」

「まあ、そやな」

はやては少し怒り気味に言った。

「どうしたですか？はやてちゃん」

「遅いねん、予定よりもう2時間も遅れてるんや」

はやての怒りは最高潮だった・・・

六課内のどこか

「どうしよう、完全に迷った」

「すすすみません。遅れてしまいました」

「遅すぎるわああってあれ？泣いとる？」

「すみませすみません」

「ああゝはやてってば泣かしたゝ」

隊長陣の中の一人フェイト、T、ハラウン執務官が子供の用に非難の声を上げた

「いっいやこれはえつと」

はやてが慌てていると

さつきまで泣いていたはずのあずさが

「えつと今日から配属されることになりました、柊あずさ一等陸士です」

自己紹介をすると

隊長陣から

「私は高町なのは、戦技教導官です。よろしくね」

と次々と隊長陣が自己紹介をしていったなか
フェイトが

「ごめん、えつと柊く…あずさくんでいいかな？」

間違ってたら謝るけど私たちどこかで会ったことない？」

始まり（後書き）

駄文ですみません

もつとデバイスのこととかいろいろかければいいんですけど…

次はキャラ設定になります

更新は不定期になりますので気が向いたら読んでいただけるとありがたいです

感想やアドバイスいろいろ送っていただけるとありがたいです

主人公設定

主人公設定

名前 柊あずさ^{ひろあき}

身長 168cm 体重 45?

年齢 16歳

髪型 サラサラな髪 長くもなく短くもなく 黒に少し茶が混じった色

瞳の色 黒

性格 皆にやさしいが一定の距離を置いている たまにドS めんどくさがり屋 集中するとすごい

1人称 俺（おこると僕になる）

魔法体系 近代ベルカ式 ミッド式 （扱う武器による）

魔力色 青

魔力変換資質 水

魔力ランク A +（ほんとうはS -だが自分でリミッターをかけている）

備考 昔なのは達に会っているが隠している。常にみなと仲良くしているが一定の距離を置いている

暗い過去がある 同じフルバックのキャラと仲がいい

あずさ専用デバイス

フルーテ

待機中は指輪の形をしているがあずさは指にはつけずひもを通してネックレスにしている

稼働時は横笛の形になり仲間の補助として役立つ。また横笛時は腰に魔法刃が出現する

カートリッジシステムは魔法刃の柄につけられている

一人称は私 マスターであるあずさには「あずささん」とよぶ

ブレードシステム

フルーテの二つ目の武装。二対の細身の剣となる。この時のあずさはとても強く

「鬼神」と異名をとっていた

そのほかに2つのモードがある

バリアジャケットはフェイトに似ているがズボンが青い

右胸の部分にポケットがついている

左胸には雷の刺繍があり特徴的

主人公設定（後書き）

次の回はF W陣との顔合わせと模擬戦にしたいと思います
キャラの性格しゃべり方があっているかが不安です…

第二話 模擬戦

部隊長室

「ごめん、えつと柊く…あずさくんでもいいかな？
間違ってたら謝るけど私たちどこかで会ったことない？」

あずさはフェイトにそう聞かれ少しびっくりした顔をしてから
今までの顔の中で一番の笑顔をつくった。

「名前の件はべつにどう読んでもいいですが、あったことはないで
す（覚えていたんだフェイト姉）」

「そう、ごめんなさい。なんかわたしやなのは知っている人に似
ていたから」

（いまはまだ守れない。なのはお姉ちゃんもフェイト姉もはやて姉
ちゃんも…）

あずさはそう小さく呟いてからはやてに聞いた

「あの…それで俺は六課内で何をすればいいですか？」

「そやなあ、あずさ君は料理にデバイスマイスターの資格とかいろ
いろ持つてるけど」

ここではFW陣の一人となってもらいたいねん」

「FWですか？わかりました」

「わかってもらえたらさっそく移動」

「あの…なのはさん、どこへですか？」

「そんなの決まっているじゃない。あずさ君が入るFW陣のところだよ」

なのははあずさの手を取り部隊長室から出て行ってしまった

「ほなこれで解散としよか〜」

はやての掛け声で隊長陣も出て行った

一人になった部隊長室ではやてはあずさの資料を見て

（柊あずさかあなんか引ッ掻かうんよねえ

まあいいか。とりあえずFW陣とあずさ君がどうなるかが楽しみやな）

「あかん！あずさ君の歓迎会のじゅんびせな」

はやても部隊長室から飛び出て行った

六課内の通路

あずさ以外のFW陣が訓練場にいるとのことなので3人（あずさフエイトとなのは）は向かっていた

「そういえばあずさ君はFW陣の中で知っている子はある？」

「えっと…スバルとティアナは訓練校の同期でした」

「そう…だったらすぐになかに入れるんじゃないかなあ」

「ははっそうだいいんですけど」

「あつあとあずさの部屋はそのFW陣の中のエリオと同室だけどいいよね」

なのははあずさをあずさ君、フェイトはあずさと呼んでいた

「別にいいですよ。」

エリオとキャロってフェイトさんが親代わりなんでしたっけ？」

「そうだよ。だからエリオをいじめるとお話するからね」

「し、しませんよそんなこと」

あずさが冷や汗をかいているとなのはが

「あつそろそろ着くよ」

あずさ君は一応A+だからみんなをひっぱってあげてね」

「めんどいです」

「そんなこと言わないで。じゃないとお話するよ」

「ひいつひ、引つ張つていけるよう頑張ります」

「あつシャーリーがいる。おいシャーリー」

なのはが呼ぶと訓練所の前にいた人がこつちにやってきた

「君が柊あずさ君かな？わたしはシャリオ・フィニーノよろしくね。シャーリーってよんで」

「柊あずさ一等陸士です。よろしくお願いしますシャーリーさん」

二人のあいさつが終わるころになのはがFW陣を集めた

「今日からFW陣に入る柊あずさ君です」

なのはがあずさを紹介したのであずさも

「柊あずさ一等陸士です。よく間違われるけど男です。野郎です。間違えないください。

これからよろしくお願いします」

「「あずさ!？」」

青い髪の元気いっぱいの少女…スバル・ナカジマ二等陸士と
オレンジの髪で勝気な顔をした少女…ティアナ・ランスター二等陸
士が驚きの声を上げる

「スバルにティアア久しぶりだグボオ!!」

いきなりティアに殴られた。

「あんだどこ行ってたのよ。いきなり訓練校やめて」

「いろいろとありまして…」

「まああとでしっかり聞くわ」

「え、えっとエリオ・モンディアル三等陸士です」

「キ、キャロ・ル・ルシエ三等陸士と「キュク」フリードです」

自己紹介が終わったところであずさは質問攻めにあった

「ねえねえなんであずさは一等陸士なの？」

「そんなのスバルよりもおれのほうが力が上だから」

「何気にひどくない？あずさ」

「あんだ魔力ランクは？」

「それが人に聞く態度かよ。A+だよ。」

「すごいですね、あずさん」

「すごいです」

エリオとキャロが驚いていた。ここにはSランクオーバーがたくさんいるのに

なぜ驚くのか不思議だった。

「訓練校にいたときは同じだったのに…」

「ティアは俺に負けてんだへーウボア!!」

あずさがからかうと

「うっさい」

とまた殴られた

「ポジションはどこですか？」

「フルバックだよ。俺は」

「じゃあ私と同じですね」

「そうなんだ。じゃあ後で少し教えてやるよ」

「ありがとうございます!!」

キャロと小さな約束をすると

「魔法体系は何です「ストゥップ」え？」

なのはがいきなりエリオを止める

「今からあずさ君を入れたFW陣で模擬戦をします。
相手は私ね」

「「「「ええ〜!!!」」」」

「15分後にスタートするよ。それまでに作戦組み立てて」

なのはは訓練場に行った。

「勝てるのかよ。相手はエース・オブ・エースだぜ」

「勝てますよ。とにかくなのは隊長に一撃当てれば勝ちなので」

「なるほどね。で、ここの中で指揮を出すのはティアか？」

「そうよ。作戦は…」

15分後

訓練場

「じゃあ、始めるよ」

なのはの合図でスタートする

「フルーテいくよ。」

「OKです。あずさん」

掛け声とともにデバイスが機動されるフルーテはリングから横笛となった。腰には柄がささって魔法刃がついている

「序曲 ハヤブサ」

あずさが笛を吹くとFW陣のスピードが上がった。

「なにこの音？体が軽い」

「いい音。術式が展開しやすい！」

エリオとキャラロが驚いていると

（これがおれの能力だ）

（ハヤブサはスピードが上がるんだっけ？）

（そうだ）

スバルの問いに素早く答えまた演奏していく

エリオがキャラロに強化魔法をかけてもらい下からなのはに突っ込んでいく

「即興曲第二番 下剋上」

あずさが曲を変える

（下から上への攻撃が強くなるからそのままつつこめ）

エリオに指示するとスバルが焦って

（待つて待つて確か下剋上つて上からだめちやくちや弱くなるんじゃない…）

（そうだけど）

スバルは上からエリオと挟み撃ちするようになのはに迫っていた。

「二人ともいい動きだね。あずさ君のデバイスは横笛かあ
もしかしてその動きもあずさ君の能力かな？」

あずさの笛の音は味方にしか聞こえないものとその場にいる全員に効果あるもの、敵に効果あるものがある
ちなみにハヤブサは味方だけ、下剋上は全員だ

なのはは、あずさの能力を知らないので
笛の音を聞いても何の能力があるかわからなかった。
えりおがなのはに迫りストラードで刺す。

なのはは、防壁を張るがあずさの下剋上によって
強化されているため防壁で抑えきれなくなってきた

「なかなかやるね。防壁で抑えきれないなんて」

後ろに下がりながらなのはが言う

「はあああああ！！」

スバルがなのはの後ろから殴りかかるがなのはの防壁によって逆に
吹っ飛ばされる

ティアナが射撃をするがなのはのアクセルシューターによって撃ち
落される

「あのバカが！！フルーテ！モードブレード」

「OKです。モードブレード」

あずさが演奏をやめ魔法刃の柄についたカートリッジシステムを作動させる

横笛が二対の剣になる

「いくよフルーテ。ウォーターブレード！！」

なのはに水をまとった剣で切りかかる
なのははとっさに防壁をはるがすぐに碎かれBJにあたる

「終了。みんなお疲れ様あずさ君もね。」

「キュク〜キュクル〜」

フリードがいきなり鳴き出した

「なんか焦げ臭いってさ」

あずさが言つと

「スバル！あんたのローラー」

「あっうわ！あっちゃ〜」

スバルのローラーが煙をふいていた

「フリードの言うことよくわかりましたね」

「わからないよ。自分が思ったことを言っただけ」

「……そうですか」

「そろそろ新型デバイスに切り替えかなあ」

なのはが少し考えて言った

「とりあえずシャワー浴びてロビーに集合」

「「「「はい!」」」」

第二話 模擬戦（後書き）

変に終わってすみません

次はファーストアライトの前までいければいいなと思ってます

第三話 悪魔とエリオとお兄ちゃん（前書き）

投稿遅れてすみません

第三話 悪魔とエリオとお兄ちゃん

六課前

「ねえねえデバイスどんなのかなあ」

「知らないわよ。でもオリジナルじゃなくてしつかりとしたデバイスマスターの
シャーリーさんたちが作ってくれたものだから性能はいいでしょう
ね」

「そうですね。とても楽しみです。ねっエリオ君」

「そうだね、キャロ」

（みんな新デバイスもらえるってことでうかれてるなあ）

あずさはほかのFW陣と話しながらシャワールームへと向かっていた。

（あずささんは変わらず私をつかうのですよね）

（ああそれはシャーリーさんに俺はデバイスマスターの資格があると話したら

少し見せるだけでいいといわれたからだよ）

（それはとてもうれしいです）

（俺はお前以外は使う気ないからな…前みたいに危ないこととして壊れんなよ）

（…OKです）

（やくそくだ）

フルーテとの会話を終えるとあずさにキャラが

「あずさんの能力ってすごいですね…！」

「…！いきなりどうした？キャラ」

「いえ笛のデバイスを見たことがなかったので」

「笛は訓練校の時から変わってないけど
ブリーダーシステムだっけ？いつ覚えたの？」

「それぞれ、私も気になった」

「僕もです。」

「どうやってあのなのはさんのシールドを破ったんですか？」

「ねえエリオ」

「どうしてあのなのはさんなのか少しお話しようか」

「なっなのはさん…！」

「…！いえ特に深い意味はなくてですね…」

（助けてください…！あずさん。なのはさんは実は白い悪魔って

言われてるんですよ!!」)

(無理を言うな!!今すぐにも逃げ出したいのに
白い悪魔って言ったら言ったら…)

「ねえあずさくんもお話する?」

「念話かのぞかれた!?!え、遠慮します。」

エリオと二人で恐怖におびえていると黒い超高級車が走ってきた。

「どうしたのみんな?そんなに震えて」

中からフェイトとはやてが顔をのぞかせた。

「いえ、ただエリオとあずさが…」

「もしかしてあずさ君…エリオに何かした?」

「してませんしてません!!」

「ごめんフェイトちゃん、今二人にお話し中なんだけど」

「なのは!?!そっそれって」

「うん!!普通のお・は・な・し」

なのはがすごく満面の笑顔で答える。

(その笑顔は普通じゃない…でもエリオだけは助けなきゃ)

フェイトがそう思っていると

「待ってください」

いきなりなのは後ろから声が上がった。

「エリオはともかく俺は関係ないでしょう俺は」

「何言い逃れようとしてるのかなああずさ君？」

「エリオよりも年上だよねえあずさ？」

「だから何か問題でもアルノデス力？」

なのはとフェイトからの視線から逃げるあずさ

「ありまくりでしょあんだ」

「言い逃れるなんて最低だよあずさ」

「最低です」

「キョクル」

「んな！さっきまでおびえていたような奴らに言われたくねえ！！」

ずっと後ろでおびえていたFW陣に対して言い放つ

「しょうがないなあ。じゃあ今回はあずさ君だけお仕置きでいいや」

「やった〜じゃあ俺たちは行くんで…は？俺？なんで」

「それはあんたが一人逃げようとしたからでしょう」

「じゃあエリオ気を付けていくんだよ。

私もなるべく早くに帰るから」

「よし、みんないくよ」

「「「はい」」」

「エリオまで！！ひどくないか」

「あずささんガンバってください」

「私たちも行ってきますね」

「ほな、いつてくるわ」

「「「「「いつてらっしゃい」」」」」

「せめて助けてください」

フェイトとはやてが行った後FW陣も中に行ってしまった。

「じゃあいくよ」

「やめっやっめぎゃああああああ」

六課前にすごい悲鳴が響いた

「もうだめ。確かにあれは悪魔だ」

あずさがなのはから解放されシャワールームに向かっていると

「お疲れ様です。今からシャワー室ですか？」

「あれ？エリオどうした？さっき一緒に怒られなかったことは気にしていないぞ」

エリオが待っていた。

「いえ、まだでしたら一緒に入ろうと思って」

「別にいいが…」

「じゃあ急ぎましょう。女性陣はもう入ってますよ。」

エリオに引きずられてシャワールームへと急いだ

男子用シャワールーム

「どうしたエリオ？さっきからこっち見て」

「あのっその…その大きな傷は何ですか？」

「ああこれか。このことについてはあまり触れられたくないんだ」

「すつすみません」

あずさの背中には肩から腰までの大きな傷跡があった

「べつにいいさ。こつちも気になることがあるんだけど」

「なんですか？」

「…さつきから何やってんの」

「えっとそのシャワーのスイッチに手が届かなくて…」

エリオは先ほどから必死になって背伸びしていた。

「今まではどうしてたんだ」

「たまたま入ってる人につけてもらってたんですが…
つけてもらえませんか？」

「わかった。じゃあめんどいからこつちで一緒に洗おうぜ」

「了解です」

「…あのさあそのしゃべり方どうにかなんない？
型っ苦しくて仕方ないんだけど」

「で、でも」

「直さなきゃ水出さない」

「わかりま…なるべく心がけます」

「よしわかった。」

二人でシャワーを浴び終わり近くの階段に座りながら女性陣を待っている

エリオが

「遅いですね」

「…」

「どうしたんですか？あずさん」

「…約束」

「すみま…ごめんなさい」

「あまり直ってないけど」

「でも…だったらあの…！」

「！なに」

いきなりエリオが顔を近づけてきた

「あずさんのこと『お兄ちゃん』って呼んでいいですか？」

「なぜそうなる」

「ただ今日の模擬戦やシャワーでもすごい頼りになったので…だめですか？」

泣きそうな顔でこっちに顔を向けてくる

「そんな顔されたらOKするしかないだろ」

「本当ですか」

「ああ」

「やったーこれからよろしく願いしますねお兄ちゃん!」

第三話 悪魔とエリオとお兄ちゃん（後書き）

あまりに進まな過ぎる

時間が取れない

「どうでしょう

早くもいきずまりです

第四話 俺は決してロリコンではない！！（前書き）

原作と違うところがあるかもしれません…

第四話 俺は決してロリコンではない！！

シャワールーム前

いきなりエリオに『お兄ちゃん』宣言されたあずさは少し顔を歪めていた。

（また、昔みたいに守らなけりゃいけない人ができたな）

エリオは兄ができたのがうれしいのか鼻歌をうたっている。

「どうしたのエリオ君？」

「なんか嬉しいことでもあったの？」

「教えて教えて〜エリオ〜」

シャワーから出てきたティアナたちがエリオの姿に驚き尋ねた。

「べっべつに何でもないですよ」

「え〜教えてよエリオ〜」

女性陣がエリオに聞こうとワイワイしていると

「ほらデバイス取りに行くんだろ」

あずさが急に横から声をだした。

「何のこと？」

スバルが頭に？を浮かべながら聞いてきた。

（…本当に忘れてやがるなこいつ）

「さっきなのはさんに言われただろ」

「ああ、そうだった」

「あんたねえ」

「はははっ」

「そこ笑うなあ」

「ほら、行くぞ」

「うう」

スバルとティアに今までの作戦を聞きながら歩いてると（ほとんどティア）

後ろでエリオと話していたはずのキャラコがこっちにトテトテと歩いてきた。

（すみません。あの…さっきエリオ君から聞きました。）

キャラコがあずさにしか聞こえない声で話してきた。

あずさは何で声を小さくするのだろうと思いつながら言った

（何を？）

（その…なんでエリオ君がどうしてあんなにうれしそうだったのかをです）

背中に冷や汗が流れる。

そしてあずさはエリオに口止めをしていないことを思い出した。

（…そのことね）

（はい！！それでその、私もあずささんのことを『お兄ちゃん』って呼んでいいですか？）

（…やっぱりそうきたか）

あずさは自分にしか聞こえない声でそう呟いた。
そのあとまた笑顔を作り

（わかった。でもその代り敬語は禁止だぞ）

「やった〜！！」

いきなり大きな声になり喜ぶキャラに
スバルとティアが驚く

「なっどうしたのキャラ？」

「それはですねあずささんにもユウモユウ？？」

あわててキャロの口を抑えるあずさ

「なっ何でもないよ。ただ今日の夜に少し魔法を教えるだけだよ」

「怪しいわね」

「うん。なんであずさが言っの」

（ねえ何で言っちゃいけないの？お兄ちゃん）

さっそく使うのかと思いつながらもキャロを説得しようとする

（あいつらが知ったら…）

「どうしたのお兄ちゃん」

エリオが突然聞いてきた。

…終わった。そう思った…
地面に座り込むあずさ

「…アノデスネ、コレニハフカイイミハナクデスネ」

「わかってるわよ。」

「ソレデスネってえっ！！わかったのか？」

「ええっあなたがロリコンということがね」

「そうそうって違うわ」

「違うの〜?」

「冗談じゃないと弁解するあずさに助け舟が入った

「違いますよ。お兄ちゃんに僕たちがお願いしたんです」

「そうです。」

「お前ら…ありがとな」

二人の弁解に泣きそうになるあずさ

そんなこんなをしているうちにロビーにつき

デバイスのあるところに来た

新デバイスの説明を終えたときにアラートが鳴った

すぐにはやてから連絡が入り出動要請が入った。

「しよっぱなからかよ」

あずさがため息をつく

『ほんなら…機動六課出動や!』

「……はい」「」「」

FW陣となのはが答える

「OK」

あくびをしながら答えるあずさ

… 作戦内容は移動中のリニアから『レリック』の回収および
ガジエットの破壊か

第四話 俺は決してロリコンではない！！（後書き）

感想や意見教えていただけたら嬉しいです

第五話 兄弟ってやっぱりいいなあ b y あずさ（前書き）

ごめんなさい！！

遅れてしまって

時間がなかなか取れなくて…学校も休みたいぐらいです。

あまり話が進んでませんがどうぞ

第五話 兄弟ってやっぱりいいなあ by あずさ

ストームレイダー内

あずさが中でどのように戦うか考えていると、
キヤロの姿が目映った。

（何考えてるんだ？）

（初めての实战なのかもしれませんよ）

（っ！フルーテー！！いたのか）

（何言ってるんですかあずさん。私はデバイスですよ。
マスターと一緒にいて当たり前です。）

（・・・そうだったな）

（そうです。っで何かしてあげないのですか？）

（なにかって？）

（緊張をほぐすとか…とにかくいろいろです！！）

（…それ以外思いつかなかったただけだろ）

（…とにかくこのままでは可哀想ですよ。）

（俺が？）

（キャラさんです！！あずさんの過去なんて今はどうでもいいんです）

（それは酷くねえか）

あずさは文句をフルーテに言いながらキャラのもとへと行く

「どうした？キャラ」

「あっお兄ちゃん。別にとくには」

「心配事があるなら俺に言えよ」

「うん。ただ故郷のことを思い出していただけだから」

キャラは昔、故郷の村に追い出された身であった。

あずさはその暗い過去を知っていたためとてもいたたまれなくなった

「ふえ！？どうしたのお兄ちゃん。いきなり抱きついたりしてきて」

「.....」

「ねえおにいちゃんてば！！苦しいよ〜」

「.....」

「何やってるの兄さん」

「ああエリオか」

あずさはキャラ以外の声を聞き抱きつくのをやめた。
エリオはなぜか知らないが兄さんと呼び方を変えていた。

「ふう… 苦しかった」

「大丈夫？キャラ」

「うん。少し気持ちよかったし…」

（よかったですね。緊張もなくなったポイですよ）

（よかったよかった）

（でも意外ですねえ）

（何が？）

（いえあずさんがロリコンだったということが）

（違うといっている！！）

これを機にあずさのロリコン疑惑をフルーテが追求し始めたのはまた今度のお話

「じゃあ行ってくるね」

フルーテと言い合いをしているとなのはが外に出ようとしていた。

「えっちょつどこに？」

「聞いてなかったのあずさ」

「私でも聞いていたのに」

「んな！？スバルまでもが聞いていたとは」

「何その意外そうな顔は！！失礼じゃない？」

「にやはははゝそろそろ危ないから行くねえゝ
あずさ君はあとでお話ねゝ」

「えええええええええええゝゝ」

そう一言残してなのはは飛び降りた

「自殺？」

「違うわよバカ空中でセットアップしているに決まってるじゃない
作戦はライトニングとスターズに分かれてガジェットの破壊&レリ
ックの回収」

「なのはさんは？」

「あの人は空から来たガジェットの破壊」

「ありがとう」

空中でのセットアップと聞いてすごいなあと思った

… 一步間違えたら死ぬんじゃない？

（あずさんは任務でやっていたでしょ）

（まあでもほかの奴らは怖いだろうし）

（それでもなさそうですよ）

出発点についたのかスバルとティアナが今にも飛び降りようとしていた

「お前らも空中でやるのかよー!!」

「当たり前でしょ」

ティアナがそう言って二人とも飛び降りてしまった

「… まあいつか」

「よし、いくか」

（あずさん、キャラさんが）

フルーテの声を聴き目を向けると
キャラがエリオの手を握っていた

（仕方ないな）

ため息をつきながらキャラたちに近ずき二人を後ろから抱え込むよ

うにする

「一緒に飛ばうエリオ、キャロ」

「うんいいよ兄さん」

「うん！」

3人で飛び降りる。

第五話 兄弟ってやっぱりいいなあ by あずさ（後書き）

次も遅れそうです

気ままに開いていただければ嬉しいです

いまになって急ですが誰とくつついてほしいか
アンケートをとらせていただきたいと思います

だれでもOK

ナンバーズでもこのまま誰ともくつつかないでもOKです
ぜひぜひ感想と合わせて送ってください

第六話 ファーストアラート（前書き）

すみません!!

遅くなってしまい1か月ぶり?になってしまいました
やっぱり学校が始まると時間がなくて・・・

…ではどうぞ

第六話 ファーストアラート

sideあずさ

「…かたいな」

「私の術はフィールドの効果で出きないし」

「俺もできないな」

「ブレードシステムはどう？兄さん」

「無理だカートリッジ忘れちった」

「「何やってんですか！！」」

いま俺たちは新型ガジェットと戦っていた

「うわっ」

「エリオー！」

エリオが外に投げ出されてしまった。
必死になって外へと行くキャロと俺

「キャロ、フリードを召喚するんだ」

「えっでも…」

「早くしないとエリオが」

俺の訴えが通じたのかキャラ口が詠唱し始めた

（何とか間に合いそうだな）

「…竜魂召喚」

フリードが真の姿になった

キャラ口が落ちそうになる

……え？なんで

「きゃあああああああ」

ウソだろ召喚した本人が落ちるなんて
俺はキャラ口のところまで一緒に落ちる

「イツセーの」

上に向かってキャラ口を投げ俺は落ちていく…

「お兄ちゃ～～～ん」

「今は倒すことを考えろ」

一言叫んで俺は落ちて行つた。

sideキャラ

「お兄ちゃん……ん」

「今は倒すことを考えろ」

お、お兄ちゃんが…でも今は

「フリードごめんね落ちちゃったりして。エリオ君も」

「それよりも兄さんは！」

「今は倒すことを考えろだつて。」

お兄ちゃんはきつと大丈夫だよだから…」

本当はすごく怖いお兄ちゃんにもしものことがあつたら

まだ出会ってから全然時間がたつてないけど家族ができたと思つたから

…だから

「エリオ君いくよ」

「うん…わかつた」

「フリード…！」

フリードに攻撃をさせるが効かない

…どうしよう私の技は補助しかできないし

「僕に任して！！キャロは僕に補助を！！」

「わかった！！」

私は急いで呪文詠唱してストラダに威力アップの魔法をかけた

「いくよ！！」

エリオ君がフリードからとびガジェットへと突っ込んでいった
土煙が上がる

勝てた、とほつと一息をついてると徐々に土煙が晴れてきた

「エリオ君！！」

そこにはまだ壊れてないガゼットとエリオがいた

…どうしよう

悩んでいるとどこからか笛の音が聞こえてきた

お兄ちゃん！！

「二人ともあきらめるな」

とっさにあたりを見渡すがお兄ちゃんは見当たらない

「幻想交響曲14番 霧隠れ」

『えりおー！どけ』

念話でエリオ君に話しかける

「即興曲イの一 ビッグバンー！」

ガジェットの周りにものすごい量の魔力が集まっていく

『エリオ飛び降りる』

お兄ちゃんがまだリニアの上に残っているエリオに声をかける

エリオ君が飛び降りる。その瞬間リニアが爆発した

す、すごい威力

私とエリオ君が呆然としているといつの間にかお兄ちゃんが後ろに立っていた

「二人とも巻き込まれなかったか？」

「大丈夫だよお兄ちゃん」

「僕も大丈夫・・・だけどスターズの二人は…大丈夫なのかなあ」

「……………だ、大丈夫だろう……………一応非殺傷設定だし

リニアの上だけ爆発するようにしたから」

おもいつきし目をそらすお兄ちゃん

…大丈夫だよ。スバルさんとティアさん

「そつえばお兄ちゃんって滞空魔法つかえたんだね」

「ああ、ここに来る前はいろいろなところ行っていたからな」

「すごいね兄さん」

3人でさっきのことがなかったように話していると

『何さっきの爆発は！？あずさ、あんたの魔法でしょ』

『あつティア生きてたんだ』

『勝手に殺すんじゃないわよバカ。こっちでレリック回収したから任務終了よ』

『了解』

お兄ちゃんとティアさんの会話が終わると

ロングアーチからライティング部隊はレリックをもってそのまま待機と指令が出された

「このままずっと待つてなくちゃいけないのかあ」

「ははっエリオ君ばやいても意味ないよ」

「そうだ、兄さん今日少し僕に戦い教えてよ」

「私も」

二人で振り向くと奇妙な力カシが一つとお兄ちゃんの字で書かれた置き紙が一つあった

「めんどくさいのでさきに帰ります。
あとはよろしく byあずさ」

「お兄ちゃんもしかして逃げた？」

「そうみたいだね。」

二人で苦笑していると

「二人ともお疲れ…あれ？あずさは？」

「フェイトさん！！来てくれたんですか？」

「私もライトニング部隊の隊長だからね」

フェイトさんがお兄ちゃんがいなかったとキョロキョロとあたりを見回している。

「お兄ちゃんは…これを残して先に行きました」

置き紙を見せる

…あ、あれ？なんかフェイトさんの顔が…

「あ、あずさはサボったってわけね。」

なんかデバイス起動させてるんですけど…

「ふっふふまだそんなに時間は立ってないはず」

「探す気ですか？」

「まだ小さい子を残して…少し待っててね、連れてくるから」

（（死んだな、お兄ちゃん「兄さん」））

そのころ近くの森で

「さっき落ちた時に見たんだがあそこにいるガジェットはなんだ？」

あずさは目の前に見えるガジェットへと走っていた

（あずささんあのガジェットは前の仕事でも見たことがあります）

（あの時も攻撃せず見ているだけだったな）

（きつとレリック事件の黒幕が見ているものだ）

（なるほど）

フルーテと話しているうちにたどり着く
あずさはガジェットレンズをのぞきこみながら

「こっちの声は聞こえるな黒幕さん」

「・・・」

「...まあいい聞こえてるなら一つ忠告だ。」

「俺のこと知っているかわからないけど僕の大事な人たちを傷つけ
ると僕があんたを殺すからね」

「・・・」

「話したいことは話したしあとは壊すか」

いとも簡単に壊す

（あずささんどうしたんですか？）

（なんで？）

（いえ、なんか怒っていらしたので）

（やっぱりばれてたか）

（何年一緒にいると思っているんですか？）

（そうだったな...ただもうあんな思いはしたくないんだ）

近くの木にこぶしをぶつける

（何も失いたくないんだよ）

（…私もあずささんに力を貸しましょう）

（ありが…）

「みいつけた」

「えっ？」

ふと後ろから声がした
振り返るとそこには

「フエ、フエイト姉!？」

（しまった）

「見つけたあずさ二人を残して先に帰るってどうゆうこと？
あと今のフエイト姉って？」

ヤバイどうする？逃げるか？

「いやあ俺入隊したてだし人見知りするもんで」

「なるほど、だから小さい二人を置いてったと」

「はい」

「とりあえずお仕置きしておくか」

…逃げる!!

「あつまで!!」

必死に逃げるがあつさりつかまってお仕置きの時間が始まる…

(フェイト姉?なんかひどく懐かしい)

あずさにお仕置きしながらフェイトは考えていた

第六話 ファーストアラート（後書き）

なんか読みにくくて済みません
前の話とかも見っていると文が…

次は少し過去の話になると思います

今回よりは遅れないようにするのでよろしく願います

第七話 昔のキオク（前書き）

遅くなつてすみません

なかなか上手くかけなくて・・・

いろいろ変なところもあると思いますが気にせず読んでください

第七話 昔のキオク

ファーストアラートが終わり皆が寝静まるころフェイトは一人寝つけないでいた。

「『フェイト姉』あずさがさっき言った言葉なんかとても懐かしかったな

でもなんでだろう、なんであずさはいきなりあんな呼び方をしたんだろう」

首をかしげながら考えていると、ふと昔の記憶がよみがえってきた

【「なのはお姉ちゃんフェイト姉はやて姉ちゃんまつて」】

まだフェイトやなのは、はやてが地球にいたときいつもフェイトたちについてくる子がいた

たしかその子の名前は……思い出せない

「なんだったかなあ？たくみ？はやと？うーん違う気がする」

頭にたくさんのはてなを浮かべながら考えていると

「どうしたのフェイトちゃん？さっきから難しい顔しているけど」

なのはがベッドから体を起こしこちらを見ていた

「あっなのはごめん起こしちゃった？」

「んっべつにいいけど誰？たくみ、はやとって」

「昔私たちと仲の良かった男の子がいたじゃん
年下で私たちを姉のように慕ってくれてた」

「いたいたその子の名前？」

「うん、そうなんだけと思いいせなくて」

「えっと……確かあんず君、村上杏君だよ」

「そうそうあんずだよっと思いいせた」

「でもどうしたのいきなりあんず君のこと思い出そうとするなんて」

「いや、今日の事件でさ事件後にすぐいなくなろうとしたあずさを
怒ろうとしたらさ

見つけたとき『フェイト姉』って言ったように聞こえたからさ」

「あずさ君が？フェイトちゃんに、
そういえばあんず君も確かにそういつて呼んでたよねだから」

「まあそうなんけどさそういえば今あんずはどうしてるんだ……」

私がそこまで言いかけたところで言葉が止まる
なのはがいきなり暗い顔をして下を向いたからだ

「フェイトちゃんその話はしないはずだよ」

「えっ………そういえば、ごめんなのは」

「うん」

二人とも顔を暗くした。なのはとフェイト、ここにはいないはやて三人の中で

あんずの話は禁句だった

「……もう寝よつか」

「そうだね、お休み」

「お休み」

フェイトはベッドの中あんずと会った時のことを思い出していた

確か私がまだ地球に闇の書事件で住み始めて間もないころ

私はなのはたちと一緒に学校に向かっていたら何かが背中につける感触があった

「あつすみません、ほんとにすみません」

「いえ、こちらこそごめんなさい」

急いで謝ろうと振り向くと後ろにはとてもかわいい女の子がいました
 - - - - - すごくかわいいな…女の私でも見とれちゃうくらい
 可愛い

「すみませんでした」

また相手のほうがあやまってしまう

「いや私たちが遅かったのが悪かったんだからそんなに謝らなくていいよ」

私がそういつとなのはたちも

「にはははゝでもアリサちゃんじゃなくてよかったねゝ」

「ちょっとなのは、どういうことよ」

「アリサちゃんにぶつかるとぼろぼろになるまで殴られるからね」

「すずかまで！！全く私は女の子にはそんなことしないわよ」

「男の子にはするんだ」

「あつたりまえでしょ」

「「「・・・」」」

自信満々にいわれてもなあとおきれてるとさっきまでずっとあやまつた子が

先ほどよりもおびえたようにして今にも泣きそうになっていた

「アリサ、この子おびえちゃってるよ」

「えっなんで？だから女の子には・・・」

「あの、ぼつ僕、男なんですけど」

その言葉にみんなが固まる

「……男？ いやいやでもスカートはいてるし、でも地球では男の子もスカートが普通とか？」

私が間違えてるだけ？ でも顔もとても近くにいる男の子とは違うくらい白いしつるつるなんだけど…

周りを見てみるとみんなの困惑した顔をしていた

「あつあのみなさん？」

自称男の子が不思議そうに見てくる

「男の子なの？ 本当に？」

「はい」

私がもう一度聞いてみると首をかしげながらうなずく
その仕草が可愛い過ぎてため息が出てしまった

「いや、でっでも男の子は普通スカートをはかないと思うのだけど」

すずかがそう言う

私はよかった間違ってたと胸をなでおろす

「何かの罰ゲームとか？」

「それとも苛められているとか？」

なのはとアリサが聞いてみる

確かに出なければ男の子がそんな姿をしているわけがない

「苛められたわけではないのですが姉が僕の服を隠してしまったので仕方なく姉が昔来ていた服を着てきたんです」

「……それはいじめと同じじゃないかなあ」「……」

「……そうですね」

自称男の子が急に暗くなってしまった
どうしよう何か元気にすることを

「でっでも似合っているよその姿も……女の子と間違えちゃうくらい」

「僕は男です。女の人の姿で褒められたってうれしくなんかありません」

……さらに暗くなってしまった

「早く学校に行かなくちゃ遅刻しちゃうよ」

さすがに携帯を見ながら言ってきた
八時五分前、ここからだと走ってギリギリだ

「とりあえず走ろう、君も」

「……はい」

私が声をかけると顔を暗くしていた少年も答えた

走っているとなのはが

「ねえ、君は何て名前なのかな？」

「ハアハア…え？僕の名前ですか？僕の名前は村上です。ハアハア」

息を弾ませながら少年・村上君が答える

「いや、あんたの下の名前は？」

「あんず、村上杏といいます」

…え？何て言った？あんず？名前も女の子みたい

「だから言いたくなかったんです」

杏がいう

周りを見てみるとみんなも困惑した表情でいた

「にやははは、別に男の子でもありだよ、その名前」

「そうだよ、か、かつこいいと思う、よ」

「あ、ありなんじゃないかなあ」

言葉を詰まらせながらみんなが言う

すると杏はパツと顔を明るくして笑顔で

「そうですよね。ありますよね。べ、別に変じゃないですよね」

「はい」

なのはが苦笑しながら先に行く
それに私もついていく

- - - - -それが私たちと杏との出会いだった

第七話 昔のキオク（後書き）

地の文をなるべく多くしてみましたかどうか？

今回は過去に注目してみました

フェイト視点の文にしてみましたがつまづかけているかどうか…
誰でもいいから書き方教えてください

お願いします！！

あと横に線を伸ばすにはどうすればいいのか教えてください
頼みごとばかりですみません

次回は一度過去から離れてあずさと管理局の一日を書こうと思います
次の更新は来年になると思います

杏の話をしてはいけない理由とか
なぜあずさはフェイト姉と呼んだのかなど気になるころはいろいろ
ですが

それはまたいずれ書きますのでもう少しの辛抱を

第八話 あずさって敵に回してはいけない存在だな b y u n o (前書き)

……今回はいろいろすごいです。

第八話 あずさって敵に回してはいけない存在だな byユーノ

「なんかさあレリックってなんなんだろうね」

「さあ僕が知っているのは

強大な魔力を秘めた危険度の高いロストロギアで、確認された内の一つは周囲を巻き込んで消滅している。なのは達が救出を行った空港火災の原因でもある。ってことぐらいかな」

「そうなんだ、ありがとうなユー兄」

「いきなり来てレリックについて聞いてきたかと思ったら昔の呼び方をするとか……なにかあったのかあずさ」

「うっ……やっぱりユー兄はうざい!!」

「なんでそうなるっせっかく心配してあげてるのに」

「心配してるのはこっちだよ。なのはお姉ちゃんとはどうなんだよ」

「ノノそ、そんなの子供には関係ないだろうっ」

「子供ってユー兄と大して変わらないじゃん」

「コ、コホン……で、実際どうしたんだよ」

「話そらしたよな。あのさユー兄は知っているとっけと俺がなのはお姉ちゃん達に隠し事をしている理由を」

「……ああ。それが馬鹿げてることもな。そしてそれしか手段がなかったことも」

「それは俺の力がなかったからだ」

「そんな昔のことを今更どうしたんだ？まさかばれたのかあずさ」

「そ、そんな失敗はしない今まで気を付けてきたからな」

「そんなこと言っただって今までとは勝手が違うだろ。今度は向こうにも顔が知れてるんだから」

「まあ近くなっただよな今までよりは。それはそうとこの前いきなりフェイト姉に言っちゃったんだよ」

「なんて？まさか！？」

「『フェイト姉』ってさ」

「ああ、なるほどだからここに来たのか」

「昔からの習慣だから」

「そうだったな。っで向こうの反応は？」

「その時はとくには何も」

「勘の鋭いのはならともかくフェイトなら何とか……」

「だめじゃないかなあ」

「どうして？」

「フェイト姉の部屋に盗聴器を仕掛けたから」

「……ちょ、お、おおお、お前女の部屋を毎晩盗み聞きしてるのか……！」

「ち、違うよその日だけ気になって」

「そうかでどうだった」

「結構聞く気満々だね」

「そんなことないよ。でもなのは達ってみんな同じ部屋だからさ」

「だからさって言っても昨日だけだし昨日ははやて姉ちゃんは教会に行っていたからなのはお姉ちゃんとフェイト姉の二人だったから」

「それでどうしたんだ」

「あんずに行き着いた」

「だろうな」

「でも、思い出しかけてる。」

「いままでは触れない過去として話さなかった。でもきっかけが出てきたことでそれが掘り起こされた」

「しばらくは覚えているだろうね」

「……そうだな。それに今はあんずでもこのままいくとしっかりと
思い出すと思う。」

「封印の魔法も時間^{トキ}を追うことに切れかかっているからね」

「それまでに忘れてもらおうとしてたんだな」

「そうなんだよ。……それなのに、あと少しだと思っていたのに、
クソツツ」

「そう悲観的になるなよ。今のお前なら大丈夫なんじゃないか『鬼神』さん」

「やめてくれよ。ユー兄、それは昔の話だ」

「でも今でも強さは変わらないしさらに強くなっている。」

「でもまだ勝てないよ、なのはお姉ちゃん達には」

「そうか？この前の模擬戦ではなのはのシールドを破ったんだろ」

「あれはただの水を使った応用だよ」

「水を切ることはできない……だっけか？」

「そうだよ。それに手加減していたしね、なのはお姉ちゃんは」

「守るのはなのはより強くなることじゃなくてもできるんじゃないか」

「でもそれでは昔と同じだろ」

「……そうだな」

「.....」

「.....」

「.....」

「.....そういえばこのことをクロノには話したのか」

「話すと思うっ?」

「いや、ないな。でも一応クロノはお前の師だろ」

「まあね。でも」

「そういえば今日クロノが来る予定なんだけど」

「げッッ何時から?」

「あと30分程かな」

「どうしよっそろそろ帰ろっかな」

「別に会っていけばいいじゃ.....」

「――」

「おいユーノはいるか」

「……来たみたいだぞ」

「いやだ。よしこつちの本の陰に隠れれば」

「バレるんじゃないか？」

「大丈夫、隠れ切る自身は有るから」

「あ、ユーノ。この前の事なんだが、」

「ああ、あれね。用意してあるよ」

「済まない助かる」

「別に気にしなくてイイよ」

「ところでユーノ、あれは何だ？」

「地球にあることわざで言うと、『頭隠して尻隠さず』だね」

「だれだあそこにいるのは？」

「クロノの知っている人だよ。あずさ出て来たらどうだ」

「あ、あーちゃんなのか」

「その呼び方やめてよ。クロノさん」

「クロノにとって初めての弟子だったから大切に思ってるんだよ」

「そうだよ。それにあーちゃんはあーちゃんだろ」

「このシスコン（ボソッ）」

「誰がシスコンだ。あーちゃんっ」

「怒らないでよ。クロノさん」

「……怒ってはいないがその呼び方をやめてくれないか？」

「なんでよ。いいじゃん」

「僕だけほかの呼び方はなんか嫌なんだが」

「だったら僕をあーちゃんと呼ぶのもやめてくれ」

「ク、クロノ、そろそろ呼び方変えたほうが……」

「なんでだユーノ。あーちゃんはあーちゃんだろ」

「お、おい、でもあずさのこの一人称は……」

「ユー兄……それ以上は言わなくていいよ」

「?どうしたんだユーノ、あーちゃん」

「さすがKYだな」

「ぼ、僕はKYなんかじゃないっ」

「……自覚がないのかクロノさん」

「で、どうしてあーちゃんはあるところに隠れてたんだ」

「そんなのクロノさんから逃げるために決まっているじゃん」

「あずさはクロノのことが嫌いなのか？」

「そ、そうなのかあーちゃん!？」

「いや、嫌いではないんだけど……苦手なんだよな」

「どうしてなんだ？」

「優しいんだけど……魔法を覚えてくれたのはありがたいんだけど……なんかね」

「どっちだよ」

「僕の教え方が悪かったのか？」

「いや、とても親切で覚えやすかったよ。クロノさんの教え方」

「そ、そうか。ホッよかった」

「でもバインドや封印魔法はユー兄のほうで覚えやすかったかな」

「それは僕の専売特許かな」

「数少ないな（ボソッ）」

「別にいいだろ。……このシスコン（ボソッ）」

「なんだと……この臆病者（ボソッ）」

「誰が臆病者だっつ。そっちこそ結婚までしたんだからフェイトから離れるよ」

「結婚とフェイトとは関係ないだろう……君こそなのはと進展させるよ」

「それこそクロノには関係ないじゃないか」

「やめろよ二人とも」

「「黙れ男の娘」」

「……ねえ昔のキオク二人にも封印しといたほうがよかったのかなあの時とは違っていまは男らしくなっているはずなんだけど……」

「どこがだ、雑誌の人に間違えられているじゃないか」

「……もう耐えられない……僕の昔のキオクで遊んでそんなに楽しいの？……別にいいよ……二人が僕で遊んだったらこっちにも考えがあるから……一つ目、クロノさん、この写真見てください」

「な、どうしたんだ？あーちゃん。……！……これは」

「どうしたクロノ？……クロノの女装写真じゃないかっ！」

「どこでこれを。誰にもばれないようにしてきたのにな」

「……リンディさんから貰いました。……これがエイミーさん、そしてお子さんに見せたらどうなるでしょう」

「や、やめてくれ、あーちゃん。そんなことされたら父親としての権限が」

「……何か言うことは？」

「すまなかった。」

「……それだけ？」

「これからはもうあーちゃんの悪口を言いません」

「……その呼び方」

「えっ？さつきから言うようにあーちゃんはあーちゃんだろ」

「……まあいいや。……これでクロノさんの弱点は137個か（ボソッ）」

「「多っ！」「」」

「……っていうか今しまった手帳みたいのは何？」

「……ユー兄も僕のこと言ったよね。……じゃあ、ユー兄はこの写真」

「う、うん。……こ、これは!」

「……ユーノがフェレットの時の写真だが」

「な、なんでば、僕がなのはと温泉に行った時の……」

「ん、よく見るとなのは達と女子更衣室に入ろうとしているように見えるが……」

「……動画もある」

「何……!?!」

「とんだ淫獣っぷりだな」

「ち、違うよ。あの時は仕方なく連れてかれたんだ!」

「……これをなのはお姉ちゃんに見せたら……」

「こーろーさーれーるー」

「結構見ものだな」

「絶対殺されるでしょ」

「……何か言うことは?」

「すみません。もうしません」

「……許す。……これであとユー兄は281個か」

「僕のほうが多い!!」

「なんなんだ、その手帳は」

「……弱点帳」

「一番敵にしたくないやつかもな」

「怖すぎる……」

「それを使って上の地位に行くこともできるんじゃないのか？」

「……行く必要がない」

「でも上に行ったらなのはたちも守りやすくなるんじゃないか？」

「……これを使うのは、僕が嫌いな奴か相手を恐怖に貶める時だけ」

「そ、そうか」

「ん、そういうことだから気を付けてね。ユー兄、クロノさん」

「「あの怖い状態から一瞬で戻った!!」」

「あ、通信だ。はーい今出ますよ」

《おい聞こえる？あずさ君。今依頼があつて六課の出動要請が出たんだ、任務の場所は 第97管理外世界「地球」にある海鳴市なんだ》

《だから早くに私たちと合流して》

「OKです。なのはさん」

《じゃね》

「ってことでいきますね」

「う、うん。また今度なあーちゃん」

「あまり役に立てなくてすまないな」

「そんなことないよ、ユー兄。久しぶりに俺の気分も晴れたし」

「そ、そうか」

「ってことでまたね」

「……行つたな」

「そうだね」

「なあユーノ、あずさの性格って地はSなんじゃないか」

「もしかしたら昔からから買いすぎたかもね」

「これからは敵にしないようにしよう」

「そうだね……ところであの弱点帳、誰のまであるんだろうな？」

「さつき手帳の表紙を見たら題名が『昔からよく一緒にいた人たち part 2』ってなっていたけど……」

「よく一緒にいた人ってなのはとかもだろ」

「……俺たちのだけで何冊あるんだ」

「他にも管理局とか……あずさはいろいろ飛ばされていたからそこにいる人と資格を取るときに必要な人、あと……いろいろありすぎる」

「もう考えるのはやめよう」

「そうだね。頭が痛くなるよ」

「じゃあ僕も目当てのものが手に入ったらから局に戻るよ」

「またいつでも来いよ」

「ああ、長居して悪かったな」

「別に無限書庫は僕の家とかじゃないから気を遣わなくていいよ」

「ははっでもこの中のすべてを知っているのはユーノくらいだからな」

「
じゃあまた
」

第八話 あずさって敵に回してはいけない存在だな byユーノ（後書き）

リマ「いやゝなかなかすごくないですか？」

あずさ「……何で俺ここにいるの？」

リマ「だってほかの作者さんもやっているもので」

あずさ「ここってリマの謝罪＆こない感想くださいコーナーじゃん」

リマ「この前一通来たもん」

あずさ「その感想で受けた指摘の真逆のことを今回やっているじゃん」

リマ「一度会話だけでやってみたかったんだもん」

あずさ「状況説明無いからよくわからなくなっているし……」

リマ「そこは置いて…… もりもとさん、感想ありがとうございます」

あずさ「置いてくくなよ。……ありがとうございます」

リマ「ま、まあ年が変わる前に一つ書いたからいいってことで」

あずさ「たくつしょうがないな」

リマ「次回あずさたちが海鳴へ」

もしかしたらあずさの家族登場!!」

あずさ「そうなのか？」

あの人たちにまた会えるのか」

リマ「そしてあずさの過去・正体がバレル!!」

あずさ「な、なに……」

リマ「あとがきも長くて済みません

ではまた次回……あずさ？なに弱点帳取り出して……ヤ
ーメーデー」

番外編 大晦日の年越し蕎麦ってあまりおいしくない by あずさ（前書き）

リマ「か、感想が来たよあずさ」

あずさ「よかったなあ」

リマ「今日で2010年終わりだね」

あずさ「そうだな」

リマ「どうしたの？あずさ」

あずさ「さつさと本編行こうよ」

リマ「今回は番外編だよ？」

あずさ「この頃番外編多くない？」

リマ「うゝうるさいうるさいうるさい！ー！」

あずさ「……早く海鳴に行きたい」

リマ「あっそ……………それでは番外編どうぞー」

番外編 大晦日の年越し蕎麦ってあまりおいしくない byあずさ

「兄さんどこいったのかなあ」

僕は今、六課の隊舎内で兄さん……あずさを探している訓練が終わったから一緒にシャワーを浴びようと思っていただけであ、前にキャロ達がいる。あずさんがどこにいるか知っているかもしれない

「みなさん」

「あ、エリオ。どうしたの？シャワーも浴びずに」

「エリオ君どうしたの？」

「兄さん知りませんか？」

「私は知らないわね。スバルは？」

「私も」

「あ、さっきお兄ちゃんならリン曹長を捕まえて何かしてましたけど」

「どういことなんでしょう兄さん？」

何をやっているんだ？

リン曹長に何の用が……

「あずさってやっぱりロリコンなんじゃ（ボソッ）」

「ティア！？何言っているの？」

「だってキャロやエリオにも兄さんって呼ばせているし……」

「そ、それは僕たちが兄さんをお願いしたんです」

「そうです」

「でも、もしかしたらあずさの巧みな話術であや……」

「……いったあゝ」

「何言ってるんだお前は」

ティアさんの頭の上に段ボールを載せている兄さんがいた

「あ、ロリコン」

「だから何言ってるんだよ。スバルまでなんで俺をロリコン扱いするなんて」

「だってあんたさっきリン曹長を捕まえていたんでしょ」

「ああ、なるほど。さっきのところを見られていたのか」

「さっきなにやっていたんですか？あとそのダンボールは？」

「そうですよ兄さんなんですかその箱？」

ティアさんの頭から地面に置きかえた段ボールを見て聞いてみた

「これか？みかんだよ」

「なんでみかんを？それにそれとリン曹長に何の意味があるのよ」

「それは俺がはやてさんに頼んでおいたみかんを取りに行くときにリンにあってみかんのにおいがしたからどういことか聞いていたんだよ」

リン曹長を呼び捨てなんて……兄さんなんかリン曹長に怒ってる？

「どういことだったの？お兄ちゃん」

「ああ。なんか俺が頼んだはずのこのみかんを隊長陣がみんなで食べてた」

「隊長陣が？」

「ああ、はやてさんが勝手に味見とか言って食べたらしいしかったからどんどん食べたらしい」

「で、今どれくらい残っているの？」

「持ってみればわかる」

ティアさんが持つ

「思ったよりも軽いわね」

「だろ。半分以上食べられていたからな」

「なんでお兄ちゃんのみかんを頼んだの？」

「それは……大晦日はこたつでみかんを食べて紅白を見るのが常識だろ」

紅白ってなんだろう？

そう思っているとスバルさんもわからなかったのか兄さんに聞いていた

「あずさ、何紅白って」

「あ、」

（やばい忘れてた）

（何やってるんですか）

（どうしようフルーテ）

（知りませんよ。昔いた故郷とでもいえばいいじゃないですか）

（ばれるだろ。地球にいたってことが）

（地球なんか知らないといええ）

（他の国にもあるってことが）

……兄さんがなにかデバイスと話しているけどよく聞こえない

「あの〜兄さん？」

「ん？なんだ」

「紅白って地球の……」

「な、なんだよ地球って？」

「フェイトさんたちの故郷のことです」

「俺が言ってるのは少なくとも地球ってとこのことじゃないぞ」

「そうなんですか」

思い違いだったんだ

名前もなのはさんと似ていたからもしかしたらと思ったんだけど

「まあみかんも俺とエリオで食べるためだから段ボールいっぱいもいらなかったんだけどな」

いや、僕のおなかには段ボール2、3箱は必要ですよ。兄さん
まあいいけど

「じゃあ俺シャワー浴びてくるから」

「兄さん、僕もまだ入ってないから一緒に入ります」

「そういえばエリオはまだ届かないんだっけ」

「そ、それはみんなの前でいわないでください」

「じゃあ俺たちは行くから」

「わかったわ」

「よし、行くぞエリオ」

「は、はい」

- - - - -

シャワーを浴びてから僕たちは自室に戻った

「みかん食べるか？」

「いただきます」

兄さんからみかんを受け取る

「お、おいしい」

「よいしょっと」

「何やってんですか？」

「こたつ作ってんだよ」

兄さんがこたつを作りおわると入っていいと言ってくれたから
言葉に甘えて入ってみた

「あつたかいですね」

「そうだな」

このまま二人で年を越すことになった……

みかんは美味しいなあ

あ、年越し蕎麦は兄さんが作ってくれました。

すっごいおいしかったです

こんどフェイトさんやキャラにも食べさせてあげたいな

リマ「どうでしたか？」

あずさ「今日は一段と短かったな」

リマ「そうだね」

あずさ「さつさと次行こうぜ」

リマ「感想コゝナ」

あずさ「わ」

リマ「感想を下さったマーボーさん、ユタさんありがとうございました
す」

あずさ「ありがとうございます」

リマ「マーボーさんからは『劉がフィオネに無理やり一緒にお風呂
に入らされて、顔が真っ赤になっている写真と劉特製のチョコケ
ーキとその事実におろおろしているときの写真をいただき来ました』

あずさ「もぐもぐ……これおいしいね」

リマ「あずさ！！何勝手にケーキ食べてんのよ」

あずさ「別にいいじゃないか。減るもんじゃないし」

リマ「ケーキは減るもの!!」

あずさ「この写真もすごいな」

リマ「劉ちゃん可愛すぎ／＼」

あずさ「劉君は男だぞ」

リマ「もう女でいいよ」

あずさ「だめだよ。可哀想だろ」

リマをあずさが殴る

リマ「すみませんでした」

あずさ「よろしい」

リマ「チョコケーキもおいしかったし本当にありがとうございました」

あずさ「本当は反省してないだろ!!」

あずさ「ありがとうございました」

リマ「感想待ってます」

あずさ「こいつのためにも送ってやってください」

第九話 あずさはどこに行ってたんだろっ b y スバル（前書き）

リマ「あけましておめでとっございます」

あずさ「あけましておめでとっございます」

リマ「題名変えました」

あずさ「題名変えろっって言われてきたからな」

リマ「そして先に言うておくと今回はあずさの過去はばれません！
」！
」

あずさ「よかった。……今回はってことはいずればれるのか」

リマ「あったりまえでしょ」

あずさ「さいですか。自信満々に言われてもな」

リマ「まあ本編へどうぞ」

第九話 あずさはどこに行ってたんだろっ byスバル

「小太刀二刀御神流継承者、高町恭也参る!!」

「えっとどうしてこうなった?……柊あずさ参る」

- - - - -

時はさかのぼり

地球への派遣任務に向かう途中で向かう先の資料を見ていると

「えっと……第97管理外世界、文化レベルD、魔法文化なし、次元移動手段無し……え!？」

いきなり声を上げるティア……どうしたんだ?

「どうしたの?ティア」

「魔法文化無いの?」

「え、だとしたらどうしてなのは隊長や八神部隊長のようなオーバーSランク魔導師がいるんでしょう?」

「突然変異とかじゃない?」

何故か知らないがキャラが話を降ってきたから適当に答えておく

「ねえあずさ君、突然変異ってどういう事かなあ」

「そうやで、私たちを化け物と一緒にしておらんか」

なのはとはやてに睨まれた

「え、あ、そ、特に深い意味は無くてですね」

「それに名前からしてあずさ君も地球出身じゃ無いのかな？」

「え、ああ、ばれましたか」

「誰でもわかるやろ!!」

「いや、FW陣は意外だったみたいですよ」

そう言つてFW陣を見るとみんな驚いた表情をしていた……スバルをのぞいて

……なんで？こういうことに一番驚くのはスバルだと思ったんだけど……

「なんでお前は驚いていないんだよスバル」

「ん、えつとお父さんが地球出身だから同じような名前からそうかなあ、と」

えつと確かスバルのお父さんとなると……ゲンヤさんか。確か苗字はナカジマ……なるほど

「まあ私とはやて隊長も魔法と出会ったのは偶然だしね。」

「俺もだ」

「くくくへくくく」

まあ俺には元から二人みたいな大きい魔力はなかったんだけどね

「はいリインちゃんのお洋服」

「わくシャルありがとです」

シャルさんがリインに洋服を渡す

「おいリインそれ、でかくないか？」

「あずさ君、私に対して言葉使いがなってませんよ。それにこれでもいいんです」

「そんな『ちっこい』やつに敬語が使えるか」

「ち、ちっこいですって」

いきなりリインの顔が真っ赤になった
はやてが額を押えたため息をついている。
何か悪いこと言ったか？

他の奴らを見てみてもみんな苦い顔をしていた

「どうしたリイン？」

「どうしたもこうしたもないですよー！私のこと『ちっこい』って
言いましたね。」

「???それがどうかしたか。実際問題お前は小さいじゃないか」

「二回も!ー!もう許しませんっあずさ君とは一生口をきいてあげませんっ!ー!」

「????リイン……おい」

「……………」

「おいリインさん?」

「……………」

「リイン曹長?おい」

「……………」

いきなり口をきいてもらえなくなった

小さいって言っちゃまずかったのか?いやでもそんなこと向こうもわかりきっていると思うしほかに何か理由が???????

（あゝあずさ君?）

（なんですかはやてさん）

「な、何でい決まり黙っちゃったんですかあずさ君?」

（えっとなあ……あゝリインに小さいって言葉は禁句なんよ）

（？なんですか自分でもわかってんじゃないんですか？）

「あずさ君？ねえあずさ君」

（自分でもわかってるらしんだけどなあ人に言われるのはいやだし
いんや）

（それってなんかずるくないですか？）

「ぐすっ……あずさ君……ひっく…あ、あ、あずさ君……うわああ
あああああん」

（まあ子供ってことで大目に見てやってくれないのかなあ）

（別にいいですけど……）

「うわああああああああん」

（やばっ！！あかんリンが泣き出してしまったわ）

（お、俺のせいだと思うのでちょっと行ってきます）

（よし、任したわ）

「うわああああああああん」

「ごめんリン俺が悪かった。謝るから」

「ぐすっ……うわああああん」

なんでだあああああ
なんか赤ちゃんみたいだな

「本当にごめん……なんでも一つゆづこと聞くから」

「ぐすつひつく……ほ……ほんとですか？」

食いついた!!

「ああ、なんかほしいものでもあるのか？」

「ぐすつ……今は何もないですけど欲しいものができたときにもいいですか？」

「別にいいけど」

なんかすごい約束をしたかも

「リンちゃんそろそろ……」

「あ、そうでした。えっとシステムスイッチアウトフレームフルサイズ」

「でかつ」

「嫌それでも小さいけど」

「普通の女の子のサイズですね」

「向こうの世界ではリンサイズの子供も、ふわふわ飛んでいる子

供もいねえーからな」

ヴィータが説明する

「子供みたいでかわいいじゃんリン」

「リンじゃなくてリン曹長ですあずさ君」

「それを約束の一つにするか？」

「ううーそれは……」

「だったらあきらめろ」

俺とリンでまた言い合いをしていると突然シグナムさんが時計を見ながら

「八神部隊長そろそろ」

「うん。ほんならなのは隊長、フェイト隊長私と副隊長たちはちょいよるところがあるから」

「うん」

「先に現地入りしてるね」

「……いつてらっしょい」「」「」

はやてたちが行った後、みんなでもた話していた
そろそろかな

そつとフェイトさんに近づき声を潜めてフェイトさんに言う

「あの〜フェイトさんちょっといいですか？」

「?どうしたのあずさ」

「俺ちよつと行きたいところがあるので先に現地入りしていいですか？」

「別にいいけど……なんで」

「さっき言つたように俺も地球出身なんですよ。それでちょっと会いたい人がいるんで」

「場所は?遠いの?」

「いやそれほどでもないんで。自分の分のサーチャーは自分でつけておくんで大丈夫です」

フェイトさんは少し考えた後OKを出してくれた

「……別にいいけど終わったら連絡すること」

「わかりました」

そついつて他の人にきづかれないように移動する

- - - - -
- - - - -
- - - - -

海鳴市

「懐かしいな」

（そうですね）

「まずはあそこに行く」

（場所はわかりますか？）

「俺は方向音痴じゃない」

フルーテと話しながら住宅街を歩いていく
30分程歩いていくと一つの小さな家にたどり着いた

「懐かしいな」

（5年ぶりですか？）

「そうだな」

（中に入らないのですか？）

「……なんか入りづらい」

（あかりさんに泣かれるんじゃないですか）

「うあ、きつと……いや絶対に泣かれるな」

（そしてなつきさんには着せ替え人形として女……）

「頼む！！それ以上は！！それ以上はああああ」

（今思っただんですけどあずさん変な人になりませんか？）

フルーテが言った言葉に青くなるあずさ

……やばいふつう一人で大声で叫んでたら不審者だ

「どうすればどうすればいいんだ！！」

（もう叫ばなければいいんじゃないか？）

「そ、そうだなじゃあ入……………」

「あのさっきからうちの前でうるさいんですけど」

入ろうとしたらいきなり扉があいてあずさよりも少し小さいロングヘアの女の子が出てきた

「えっと……ただいま？」

「え……お兄ちゃん？」

「五年ぶりになるのかな」

（お久しぶりですあかりさん）

「フルーテも……お兄ちゃん……うわああああああん」

いきなり抱きついてきた

「姉ちゃん？私をそんな風に呼ぶ奴はいないっ！！」

「お、俺だよあずさだよ、あずさ」

「うちのあずさは俺なんか言わないし可愛い女の子だっ！！お前も女の子みたいだが俺って言うているから女ではないだろう」

「いやつまり俺は男だから」

「お前が男だろうとどうでもいいっ」

「うっうあかりなんか姉ちゃんに言ってくれよ」

「わ、私に振られても困るよぉ。昔の呼び方で読んであげれば？」

「それしかないのか」

「さっきからうちの妹と何話しているんだっ。おいっ不審者！！」

「えっと……お姉ちゃん私です、あずさです。覚えてない？」（にこっ

（必殺あずさスマイルですね）

（なんだよそれ）

「……あずさなの？本当に？」

「うんそうだよお姉ちゃん」

「五年間もどこ行つてたのよあずさ」

「えつと魔法関係でいろいろと」

「連絡一つもよこさないなんて……どれくらい心配したと思つているの？」

「それは知らないけど……あとお姉ちゃん私は男だよ」

「何言つてんのよ？そんなのわかつてるわよ。でも三姉妹でいいじゃない」

あのつさつきから普通に話しているけど木刀は突きつけられたままなんだけど

それにあかりはずっとおろおろしているし

（とりあえずみなさんまずは家に入ってからではいかがですか？）

「ナイスアイディアだフルーテ」

「それもそうね」

「（おろおろ」

まだおろおろしているあかりをほっておいてさつさと家に入る
家の中で両親へのお線香をあげてから今までのことを話していると
いきなり

「あつお兄ちゃんわたしね魔法？使えるようになったんだよ」

「は？」

とんでも発言だ！！

あかりが魔法を使えるなんてきいたことないけど

（魔力は推定Bランクですね）

「いつから分かったんだ？」

「お兄ちゃんが魔法使いになってから魔法についていろいろ調べていると12歳くらいからかな？リンディさんがいきなり「あなた魔法の素質があるわ」って翠屋でいわれて、今リンディさんに週一で教えてもらっているの」

といって手にスフィアを出して見せる

魔力光は白か

あかりにも魔力があるってことは姉ちゃんにも……

「そ、そうなのか。姉ちゃんは？」

「そんなもの使えないぞ。そ、れ、に姉ちゃんじゃなくてお姉ちゃんだぞ」

すっごい笑顔で言われた

「は、はい（だったら）」

「そっついえばあずさなんでそんな服着ているの？」

「えっ？これは仕事用の服だから」

「仕事で来ているのは知っているけどそれは男ものじゃない」

「だからおれは男なんだけど」

「俺？いつから俺っていうようになったのかしら？」

どうしよう姉ちゃんに勝てる気がしない

「ね、姉ちゃんだ、だからお、俺は男………」

「それはわかっていているけど……あずさ……さっさと服脱いで……」

「ちよっ……！なん……！や……め……！……て……」

姉ちゃんに服をつかまれ姉ちゃんの部屋へ連れて行かれる

……なんてすごい力だ……！くっ離せない……！！

………

「お兄ちゃん？大丈夫？」

あかりが心配して、きいてきてくれる

俺は今、姉ちゃんのお古を着せられている……ふりふりの
ワンピースを

「これが大丈夫に見えるか？」

「なかなか似合っているぞ」

「もう俺「俺じゃないだろ」…私、この家に戻ってこなければよかった」

「私はお兄ちゃんに会えてうれしいよ」

「そういつてもらえるとうれしいけど」

「私もだ。着せ替え人形が戻ってきてくれてうれしいぞ」

「やっぱり帰ってこなければよかったよ!!」

「そつえばあずさ、お前仕事で来たんじゃないか?」

忘れてた。

まあサーチャーは仕掛けておいたから大丈夫だけど長居するわけにもいかないからな

「そろそろ戻るよ」

「わかった。今度は泊まりで帰ってこい」

「私たちは翠屋へ行くからそこまで一緒に行こう、お兄ちゃん」

「ちょっと待ってくれいま連絡するから……フルーテ頼む」

(わかりました……フェイトさんですよ)

「ああ」

フルーテが繋いでくれる

『はい、こちらフェイトですが、あずさ何？用事は終わったの？』

「はい、ありがとうございます。おかげで用事は済んだので、どこかでおち会いたいんですが」

『だったら翠屋へ行っていまなのはたちがそこにいるからそこで落ち合おう。翠屋への行き方はわかる？』

「大丈夫です。フルーテが知っていると思うので」

『わかった。私たちもあとから行くから』

といって連絡を切る

「ということで俺も翠屋へ行きます」

「やったお兄ちゃんと一緒だ」

「なるほど、お前の上司にあいさつできるのだな」

「そうだけど……（フルーテどうする？なんかばれそうなんだが）」

（もう仕方がないんじゃないですか？それにあかりさんたちがなのはさんたちに会っていたのは10年前ですから）

（それもそうだな）

「？お兄ちゃんどうしたの」

「何でもない行くぞ」

「お前が仕切るな」

歩いて10分程で翠屋へつく

あかりは今魔法を習いに行くときに翠屋へよって言っているらしく
美由紀さんと、とても仲がいいらしい

「いらっしやませー」

「こんにちは美由紀さん！」

「あ、あかりちゃん。どうしたの？今日はリンディさんのところに行く日じゃないよね」

「まあね。今日は遊びに来たの」

「そっか〜でも今妹たちが来ちゃってさ」

「この子達か〜……えっとお兄ちゃんがいつもお世話になってます」

「「「「えっ？」「」「」」」

さっきまでわいわい話していたなのはたちが目を丸くする

「えっとお兄ちゃんて誰なのかな？」

なのはが率先して聞く

あれ？今思っただけ俺いまワンピースの姿じゃね？

「あ、初めまして。私の名前は柊あかりといいます」

「柊っていうとあずさ君の？」

「はい」

「そういえばあずさ君は今どこにいるんでしょうか？あ、私はリンといいますです」

「こんにちはリンちゃん。私の兄はここにいますよ」

「え、どこですか？」

リンがあかりのとなりを探す

美由紀も同じように探すが思いついたように

「そういえば三姉妹だったんだあかりちゃんって」

「えっ、私にはお兄ちゃんとお姉ちゃん一人ずつだけど」

「じゃあそちらの子はだれ？」

姉ちゃんのこと知っているみたいだが俺のことはまあ知らないだろう

……魔法は知っていても俺のことは今知らないからな

「あの私の名前は柊あずさといいます」

.....

「「「え〜〜〜!?!?」「」「」

「ごめんみんな途中でいなくなつて」

「にやははゝそれはいいけどどうして隊員服じゃないのかな?」

「それになんで女物の服なのよ」

「なのはさん、ティアこれには意味があつてなあ」

「あずさ君に会つてるよ」

「なのはさん!?!」

なのはさんに俺は詰め寄る

これは弁解しないというろまずいことになる

「ちよつと待て!! お前男なんだよな」

「は、はい」

恭也が近づいてきた

あれ? 今ドイツにいたはずじゃ

「なのはに近づくとはいいい度胸だ」

「いえこ、これは弁解しよう」と

「普通の男ならわかるが女装壁があるやつがなのはに近づくなよつ
!?!」

「ないですから！！女装壁なんてないですから！！」

「とにかく決闘だ！！勝負しろ！！」

「どうしてそうなるの――――！！？」

――――

ということで冒頭に行き着く

ここはなのはの道場

「小太刀二刀御神流継承者、高町恭也参る！！」

「えっとどうしてこうなった？……柊あずさ参る」

恭也は二刀流、俺も二刀流で戦う

「お兄ちゃん頑張って」

「あずさ負けたら承知しないぞ」

「どっちが勝つかしら」

「にやははお兄ちゃん強いからあずさ区は大丈夫かなあ」

みんながそれぞれ歓声を上げる

「試合のルールは魔法無しの純粋な剣術でいいですね」

「ああ、俺は魔法は使えないからな」

ルール確認をした後お互いに構えと先に恭也が仕掛けた

「はあああああああ」

横に払ってくる木刀を俺がいなす
そしてもう一つの木刀で頭を狙う
それを恭也がもう一つの木刀でいなす
その反動で俺は宙に浮き、恭也の後ろに回り切りつける
恭也が振り返りざまにはじく

「強いっすね」

「そっちこそ」

今度は俺から仕掛ける
足を狙い切りつける
それを恭也がかわす
そして頭を狙い切りつける
それをいなしこちらも頭を狙う
それをかわし恭也が距離を取る

「その技は我流か」

「はあはあ……はい」

「でもなにかその技の奥にはなんだかの型がある……お前剣道をど

「こかで習ったな」

「さあ？」

「見つけてやる」

そういつてまた切りつけてくる

それをかわす

また恭也が切りつける

またかわす

また切りつける

かわす

「いつまでかわす気だ！！」

「さあ？」

恭也が切りつける

それをいなしこちらからも切りつける

向こうもかわすそして横から切りつける

かわす

……やばい倒れる！！

体制が倒れる

そのまま切りつけるがしっかりとした体制ではないためすぐにかわされる

そして恭也がこれを好機に切りつける

転がりながらかわすが回り込まれる

また恭也が切りつけるそれを紙一重でかわし手を狙いこちらにも切る当たった！！よしいける！！

木刀を落とす恭也

こちらが好機と頭を狙い切るがこちらも紙一重でかわされる
そして恭也が距離を取る

「この型は！！俺と同じ小太刀二刀御神流か」

（ばれたか）

とつぜん恭也がもう一つの木刀を落とす

「お前はあずさ！！あずさなのか？」

恭也が驚いた顔でこっちを向いた

第九話 あずさはどこに行ってたんだろっ byスバル（後書き）

リマ「なんか読みづらいかも」

あずさ「戦闘シーン下手だな」

リマ「うるさいうるさいうるさい」

あずさ「これからつまくなろうな」

リマ「あつたりまえでしょ」

あずさ「……さっきもそれいった」

リマ「感想コーナー」

あずさ「話そらしやがった」

リマ「ユタさん、庚さん、天ノ刃羽斬さん、マーボーさん感想&指摘ありがとうございます」

あずさ「ありがとうございます」

リマ「おまけにユタさんからは俺から高級鍋セット（肉、カニ）と優ちゃんが作った年越し蕎麦と今の優の写真（笑顔）マーボーさんからは瑠璃が着物姿でお餅を口に入れてハムスターみたいになっている写真。

こたつに入ったまま寝てしまった写真。

瑠璃がさっきから顔が赤いから、その写真をいただきました」

あずさ「年越し蕎麦は美味しかったな」

リマ「うん！！それに鍋も」

あずさ「他の奴らにも分けようと思ったのにリマが全部食べちゃうんだもんな」

リマ「違つでしょ。あずさが半分以上食べたもん」

あずさ「べ、別にいいじゃないかよ……おいしかったんだし」

リマ「そうだけど……この写真可愛すぎるよ」

あずさ「そうだな」

リマ「さっそくファイリングを」

あずさ「なんだそのファイル！？」

リマ「もらった写真ファイルだよ」

あずさ「まあいいや」

リマ「次回はあずさがみんなに過去をばらすかも？」

あずさ「何でそこで疑問形なんだよ」

リマ「この前そういつてばらさなかったから」

あずさ「このダメ作者が」

リマ「わかったよ！次はあずさが過去をばらします！！」

あずさ「まって過去ってあれだろ」

リマ「？そうだけど」

あずさ「ちょっとまだ心のじゅんびが……」

リマ「あんたが確実にしろっていったんだから文句言わないの」

あずさ「ううゝ」

リマ「ではまた次回」

第十話 みんなどうしたんだ？ by あずさ（前書き）

リマ「第十話にやっとなったよ」

あずさ「ながかったな」

リマ「約半年もかったよ!!」

あずさ「他の人比べて遅いな」

リマ「また徐々に遅くなるけどね」

あずさ「学校か」

リマ「うん、でも前みたいに一月一個じゃなくて2週間に一個く
らいのペースに　　するよ」

あずさ「一週間に一個にしろ」

リマ「頑張ってみるよ」

あずさ「そういえば第十話を記念して何かあるのか？」

リマ「あずさの過去がわかる」

あずさ「……そうなのか」

リマ「ではどうぞ」

第十話 みんなどうしたんだ？ by あずさ

「お前はあずさ！あずさなのか？」

恭也が驚いた顔でこつちを向いた

まさか恭也さんにばれるとは思ってもみなかった
やっぱり武道って魔法とは違う力があるんだと思う

「お兄ちゃん？何言っているの？」

「どうした恭也？さっき自己紹介していただろ」

「いきなりどうしたのかなティア？」

「私に聞かれてもわかるわけないでしょ」

みんなが恭也を不思議がる

一人にばれちゃったからほかの人にばれるのも時間の問題だろう

「みんな何言ってるんだよ！！ここにいるのは8年前まで……」

「」

「ストップです。恭也さん」

「なんだよあずさ」

「ここからは僕が話します」

他人から言われても解けないぐらいには魔法を強くしてある……クロノさんやユーノ兄が口を滑らしてもいいように
だからここで恭也さんが何言っても変な人扱いされるだけだろう

「あずさ君何を？」

「なのはさん今から話すのでちょっと待っててください。フェイトさんたちにも聞いてほしいことなんで」

「おいっあずさ今までどこに……」

「だから待ってくださいって言ってるでしょう」

聞いてくる恭也をあしらっているとフェイトたちもやってきた

「みんなどうしたの？道場に入って」

「あ、フェイトちゃん。それがあずさ君とお兄ちゃんが私を巡って戦ってた……」

「巡ってなんかいませんよ！！変な冗談はやめてください」

「あずささ？」

「だから誤解だって言ってるでしょ」

フェイトのすごい殺気をつけながらなんとか訂正する

「あゝもう。話ができないでしょう」

「あ、そうだった。で、なんなのお兄ちゃんが言っているあずさ君がどうしたらこうたらって」

「何それ？なのは」

「フェイトさん黙っててください」

「は、はい」

少し目を細めて怒気をあらわにして言う
いい加減話を進めたい

「こつから一言でも話したらみんなの言われたくないヒミツをばらしますからね」

「……………はいっ……………」

（……………何その手帳！？……………）

弱点帳を出して言う

うん効果は抜群だ！！

「まずは俺の過去について話します。俺は8年前までここ、海鳴市に姉ちゃん、あかりとともに住んでました……あ、両親はずいぶん前に交通事故で亡くなりました。」

真剣な顔で話し出す

両親ともにとても優しい人だったんだけどな。あの時俺があんなことを……

昔のことを思い出すが今は表情に出さないようにする

「俺は姉ちゃんが遅くなる時が多かったためまあかりに料理を作ったりしたり家事をこなしたりいろいろとやってみました。俺の顔が当時は女の子に見えていたらしく3姉妹呼ばれていたりし、とても大変でした。また、姉ちゃんがわざと俺に女物の服を着せたりして噂がなくならず、なぜか男子からラブレターをもらうことなんかもありました」

「あずさ、おまえ今身の上話になっている……」

「シヤラップ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!とうじのおれはなあ姉ちゃんのせいで大変だったんだぞ!!!!姉ちゃん一回しゃべったから姉ちゃんの恥ずかしい過去を暴露しよう」

「い、いいとも言ってみろ」

「これは姉ちゃんが昔書いた手紙です。だれに向けて書いたのかわ書いていませんが内容を朗読します」

○○さんへ

私はあなたのことが大好きで胸がはちきれそうです

あなたのことを思うだけで心拍数が200000倍跳ね上がりm

「わあああああやめてくれもう話さないから頼むこのとうりだ」

「え~~~~この後が面白いのにしょうがないなあ」

といって弱点帳から取り出した手紙をしまう

(((((絶対(に話さないようにしよう))))))
))))))

みんなから汗が出てきている

これで少しはスムーズに進められるかな？

「えつと話がそれたけどある日女装をさせられて学校に向かってい
ると金髪で可愛い上級正さんにぶつかりました。その人の周りには
ほかにも可愛い人が3人いました。その人たちといろいろな成り行
きで仲良くなりました。俺はその人たちの弟として、俺はその人た
ちのことを姉として仲良くするようになりました。しかしその4人
の姉のうち2人には秘密がありました。……魔法少女だったのです。
当時の俺は魔法のことについて架空のものだとおもって信じていま
せんでした。でもある日のこと俺が夜ご飯の買い物に行っていると
いきなり人がいなくなりました。俺は怖くなって海の近くの公園で
おろおろしていました。すると海のほうから大きな音がしてきました。
た。なんだろうとよく見ると海にいる奇妙な物体を空から取り囲み
翠や黄色やらの色をした光線を出している人がいるではありません
か。しかもよく見るとそのうちの2人は俺のよく知っている人で
はありませんか。俺はびっくりしてじつと食い入るように見ていま
した。するといきなり奇妙な物体から切断されたと思われるもの
がこつちに飛んできました。よけようと思いましたがよけられず、
もうすぐでぶつかると目をつぶったときに奇妙な現象が起こりまし
た。なんと俺の前に水の壁ができていたではありませんか！！しか
も俺が思うように水を動かすことができます。これが魔法なのかと
感心しているといつの間にか宇宙船に移動させられました。そこ
に戦っていた2人の姉以外の2人の姉が目を白黒して、ほかの子た
ちが戦っているところをモニターで見っていました」

ここでいったん話を切る
みんな目を白黒させているが、なのはさんとフェイトさんはびっくりしたように聞いていた

「えつと一回息抜きするために俺の演奏を聴いてください……あ、ここでもしゃべったら姉ちゃん見たくするからよろしく」

といってフルーテを起動させる

（フルーテ魔法を解くよ。）

（範囲はどこまでにしますか？）

（結構魔力を使うけどはやてさんの所まで）

（わかりました。でも無理はしないでくださいよ）

（わかってるって）

「では聞いてください『交響曲第1番の2 現実』」

フルーテを奏でていく ただの音楽ではない

これは俺が一番最初に考えた曲でこの魔法は簡単に言えば1番の1『幻想』でキオク封じ、2でそれを思い出させるといった魔法だ。相手が完全に忘れれば思い出させることも不可能になる。ほんの少しでも覚えていれば思い出すようにできている

周りを見てみるとみんなびっくりしたような顔をしていた。

少なからずみんなに隠していた話がある。それを思い出させているから驚くのも無理はない。

15分ほど奏で続け静かにフルーテから口を離す

「いままで全員思い出したと思うけどそれはあとで何でも聞くから今は俺の話を聞いて。」

「さきほどの続きから話すとあの後奇妙な物体が何らかの方法で消滅し、二人の姉……もうとくにわかつているとは思うけどなのはさんとフェイトさんのことです。それと二人と一緒に奇妙な物体と戦っていた人が僕と同じように宇宙船に戻ってきました。さっきのはなにごとなのかと二人の姉……こっちはアリサさんとすずかさんです。問い詰めると、なのはさん、フェイトさんは自分が魔法少女ということ、先ほどの闇の書と呼ばれるロストロギアの防衛プログラムだったということを教えてもらいました。そして俺たちが乗っていた宇宙船の艦長という人から俺にも魔法の素質があるといわれました。俺はともうれしくすぐに俺の家族に話しました。それからは同じ魔法使いの人から魔法を教わったりなのはさんやフェイトさんに教えてもらったりしました。俺にとってはとても楽しいひと時でした。またその間にはやてさんという人と新たに姉のような人になりました。そして俺は魔法以外にも士郎さんに弟子入りして剣道も教えてもらいました。しかしそんな楽しいひと時も長くは続きませんでした。あるとき俺にも管理局に入らないかと言われるようになった。俺はなのはさんやひやてさん、フェイトさんが入っていたので喜んではいりました。俺には最初簡単な管理外世界の調査などを任されていましたがあるとき報告をしようと管理局を歩いていると何やら俺について話している声が聞こえました。内容はまあこの地球から出る魔道士はとも膨大な魔力を持っているはずなのになんで俺は簡単な任務ばかり任されているんだという話でした。しかし俺には当時ランクB程度の魔力しかありませんでした。そのことを知っているのはなのはさんたちや俺の情報を讀んだ人し

かわかりません。だから俺の管理局でも見られ方は意気地なし弱虫といった感じになりました。ある日俺にとても長期にわたる任務が渡されました。それはA級ロストログアの搜索というそのころの自分では考えられないような危険な任務でした。もちろん断ることは許されないといった感じでしたので引き受けました。そしてわずか3週間で任務から大けがをして外れました。全治3か月といったところでしょうか。幸い傷は残らないといわれていたのです。と海鳴にある病室で寝込んでいるとある日みんながお見舞いに来てくれました。なのはさんたちは今海鳴に來ている犯人を追っている所だといっていました。そして2日後俺がりハビリをして病院の中庭に出ていると近くで魔力反応がありました。興味半分で近づいてみるとそこにはなのはさんたちと一人の男の姿がありました。俺は気配を消して見守っていると男がフェイトさんにいきなり大剣で切りかかりました。とっさのことでシールドをはれないと思った俺はフェイトさんをかばうようにして大剣で背中中の肉をえぐられました。そして意識がなくなりました。そのあとはなのはさん達に聞いたところなんとか捕まえたそうです。俺は約3週間意識が戻らなかったらしいです。フェイトさんは俺が起きた後ずっと泣きながら謝ってくれました。また、あとから来たあかりも何度も来ては泣いての繰り返しになっていました……そのあと俺は自分が傷を負わずにみんなを守りたいと思い、一人離れて無茶な魔法の使い方をしたりして自分を鍛えました。そして自作のこのフルーテを作り、自分が離れていてもみんなが心配しないように記憶をけしました。さすがに家族にはばれそうだったので、適当な理由を付けて家から出ました。そしてそのあともいろいろやって今の自分になります。あ、あとユー兄とクロノさん、リンディさんは記憶を消さなかったので俺のことを知っていました。が怒らないでください。……以上!!」

あの後にもいろいろあったのだがそこは話さないでおく

「あずさ、なんで昔みたいに呼んでくれないの」

「だってフェイトさん恥ずかしいじゃないですか」

『もしもしユーノ君』

「この前はフェイト姉って言った」

「あ、あれはびっくりして思わず」

『ねえ、なんであずさ君のこと黙ってたの』

「これからも前みたいに呼んで」

「いやですよ恥ずかしい」

『口封じされてた？じゃあなんでユーノ君はあずさ君にユー兄って呼ばれてるの？』

「昔は敬語じゃなかった」

「今は職務上、上司じゃないですか」

『そんなの知らない？ずるいよユーノ君だけ』

「そんなの気にしないから」

「気にしますって。なんなんですか？記憶が戻ったと同時に」

『そんなことあずさ君に言え？あずさ君が呼んでくれないんだもん』

「記憶がなかったからだよ。あったら前みたいに呼ばせてた」

「今はエリオたちがいるんだし」

『えっ？お話を使えばいい？あ、そっか』

「ちょっと！？何言ってるんのユー兄！？」

『お前ばらさないんじゃないのかよ』

「だからっってお話って！？」

『じゃないと僕が殺されそうだったんだからしょうがないだろ』

「そうやって弟を売るなんて酷いじゃないか」

『だったら昔みたいに呼んであげればいいじゃないか』

「だって恥ずかしいじゃん」

『俺の前ではいつも昔のようにお姉ちゃんって言ってるじゃないか』

「い、いわないで……」

「そうなんだあずさ」

「ち、ちがつ」

「そうなんだよねあずさ君（ニコッ）」

「……はい、そうです。認めます。だからその笑顔やめてください」

「やだ、前みたいに呼んで、敬語無しで」

「わかったよ、なのはお姉ちゃん」

「やったーあずさ君がよんでくれたー」

「あずさ、私も」

「……フェイト姉」

「よしっ」

強制的に呼ばされてしまった

「お兄ちゃん、私もお兄ちゃんに会ったことがあったんだね。」

「ん？何キャラ？ダジャレ？」

「ち、違うよ」

「そうだね、あったことがあったね」

「兄さん僕もあったことが……」

「あったね」

「最後まで言うてからでもいいのに」

「あんと小さいときに会っていたなんて」

「ティアのその顔面白いな」

「うっさいバカ」

「スバルにもあったことがあったからね」

「私から言おうと思っていたのに……」

「もうメンドイ」

ため息をつく。こんなに聞かれるとは意外だった

「あずさ君、また一緒にケーキ作りましょ」

「今の腕だったら桃子さんには負けないと思いますよ」

「ふふっ楽しみね」

「あずさ君いまは私が翠屋にいることを忘れてない？」

「もちろん美由紀さんにだって負けないよ」

「あずさ、強くなっただな」

「士郎さんに教わった後もいろんなところで鍛えましたから」

「でもまだ俺には勝てないがな」

「あのままだったらきつと俺が勝ってましたよ」

「言うようになったじゃないか」

「お、お兄ちゃんっ」

「なんだ？あかり」

「わ、私も管理局に入る！！」

第十話 みんなどうしたんだ？ by あずさ（後書き）

リマ「終わりが変になってしまった」

あずさ「何回かこんな終わり方だよな」

リマ「これが楽っていえば楽なんだよね」

あずさ「まあそうだな」

リマ「あかりちゃん管理局に入るって」

あずさ「びつくりだな」

リマ「あずさがどう反応するのか次回に期待だね」

あずさ「期待しなくていいから」

リマ「感想コゝナ」

あずさ「ユタさん、マーボーさん、感想ありがとうございます」

リマ「私の役を………ありがとうございます」

あずさ「感想ぜひ送ってください」

リマ「だからそれ私の役……」

あずさ「次回ははやて姉ちゃんたちに会うところです」

リマ「だ・か・ら・それ私の役」

あずさ「みんなの反応が楽しみだな、リマ」

リマ「知らないよ、全くもう（ぶんぶん」

あずさ「ではまた次回」

リマ「さよなら……あずさ次回の初めは覚えてなさい！！（ボソッ」

第十一話 無視は馴れてるもん。大丈夫だもん b y あずさ（前書き）

リマ「これで海鳴り編終了です」

あずさ「……早く次にいこう」

リマ「どうしたの？まあいいや。ではぐっぐっ」

第十一話 無視は馴れてるもん。大丈夫だもん byあずさ

「お、お兄ちゃんっ」

「なんだ？あかり」

「わ、私も管理局に入る！！」

何言っただ？魔力があるからって危険の多い管理局に入るだなんて…

「何言っただよ。あかりには危険だ」

「お兄ちゃんは今の私よりも小さいときに管理局に入ったじゃない。それに私よりも小さいキャラちゃんやエリオ君だって入っているんだし私だって大丈夫よ」

「どんな任務でも少なからず命の危険が伴うんだぞ！！それにエリオたちは最初から魔力の素質があったからすぐに覚えられたがお前にはついこの前魔法を知っただけじゃないか」

「でも、もう悲しい思いはしたくないの！！お兄ちゃんから離れたくないの！！」

あかりが瞳に涙を浮かばせながらいう。あかりの言っていることはわかるが

しかし俺にもあかりを危険な目にあわせたくはないという思いがある

「悲しい思いなんて姉ちゃんがいるから無いはずだろ！！今までだ

つてたまに会いに行っているじゃないか！！何が不満なんだよ！！
それにお前は中学生だろ」

「私はお姉ちゃんと歳が離れていたからいつも遊んでくれたのはお兄ちゃんだった。お姉ちゃんも優しくしてくれるけど私はお兄ちゃんと一緒に良いの！！それに私が中学生だからっていうんだっからお兄ちゃんはどうなのよ？小学生でいなくなったじゃない」

「あのお二人さん？」

「俺はお前を危険な目に合わせたくないんだよ！！さっき話したようにお前も管理局にいろいろ言われるんだぞ！！」

「それでもお兄ちゃんがいるもん！！だから私はお兄ちゃんと一緒に良いの！！」

「聞いてるゝあずさ君、あかりちゃん」

「いい加減ゆうこと聞けよ！！記憶が戻らなかったらこんなこと言わなかったんだから思いつきでいうなよ」

「違うもん！！リンディさんとも話していたんだもん」

「あのゝ」

「なのは、俺に任せろ」

「お兄ちゃん？」

「だゝゝだったら委託魔道士にでもなってる」

「だ・か・らお兄ちゃんと一緒に良いんだって!!」

「あのなあ何回も言ってるだろ」

「だから私は……」

「おい、シスコン!!」

「あんたにだけは言われたくないわ!!」

恭也さんにだけは言われたくない言葉だ!!
シスコンだなんて!!俺は絶対にシスコンじゃない!!断じて

「いやシスコンだろ!!」

「俺は心配性なだけだ!!」

「さつきから聞いていればお前は心配性なんかじゃない」

「じゃあなんだっていうんだよ!!」

「だからシスコンだ!!」

「違っって言ってるだろ」

「……ちよつと二人とも頭冷やそうか」

「「えっ?」」

横から声がしたから恭也さんと二人で見るとそこには、にぱと笑っているのはお姉ちゃんがいた
……いや魔王様がいた

「二人とも周りのみんなが引いているのがわからない？」

「「わかります（ぶるぶる）」

「だったらそろそろやめないとね」

「はい」

「わかりました魔王様」

「何かなあずさ君？なんか言った？」

「いえっ何も言っていないです」

なのはお姉ちゃんににらまれる
まるで蛇ににらまれた力エルの状態だ

「もうやめましよう恭也さん」

「そうだなあずさ」

「あとあかりも勝手にしていいぞ」

「本当！！お兄ちゃん」

「ああ、もう疲れた」

「とりあえずそろそろはやてちゃんたちも待っているだろうし戻ろ
うか」

「そうだねなのは」

「」「」「はいつ」「」「」

「すもませんが車って五人乗りですよね？」

「敬語禁止だよあずさ。」

「すみま……ごめん」

「違うよ6人乗りだよ……そうするとあずさが入れないね」

「俺が入らないのは確定ですか」

「だって私は運転があるしあずさ以外のFWの子たちはこの町知ら
ないし、なのはは……ね？」

「ねってなんなの！？フエイ姉」

「でも、他には誰もいないし」

「わかったよ、歩けばいいんですよ」

「うん、ごめんね」

「別にいいよ」

みんなを送り出してから俺も歩き出そうとすると桃子さんにつかま
った

「……なんですか桃子さん？」

「あの、あずさ君、なのはのことお願いね」

「何がですか？」

「だから守ってあげてね」

「ははっ、まだなのはお姉ちゃんのほうが俺より強いですよ」

「でも、なのは頑張りすぎちゃったところがあるから」

「そうですね。まあ俺にできることだったら何でもしますよ」

桃子さんと話終わり今度こそあるこうと思ったたら今度は姉ちゃんが
話してきた

「ちょっといいかあずさ」

「はあ……よくない」

「そういわずに聞いてくれ。……私はあかりが魔法使いになるのは
反対だ」

「俺だってそうだよ」

「でもお前がいなくなってからあかりは時々悲しい顔をしていた。もちろん私には見せないようにしていたがな」

「……だろうな」

「だからかあかりに魔力があるといわれたと聞いた時にはびっくりした。そしてあかりが魔法を練習してお前に会いに行くといったときもな。なあ、あずさ私は妹がほしかったのは知っているな」

「欲しかったっていうか実際にあかりがいるだろ」

「違う、私は弟はいらなかったって言うてんだ」

「何気にひどくね。本人に言うかふつつ？」

「過去形にしただろうが！！まあお前は可愛いから好きだけどな。でも私はお前に嫉妬していた」

「……で？」

「私とお前らは年が離れていたからどうしてもあかりがお前のほうに懐くのは仕方がないことだった」

「まあ別に懐かれてないだろ」

「いや、あかりははつきし言ってお前が大好きだ。しかし私はお前とあかりを一緒にしたくなかった」

「父さんと母さんのことか」

「ああ、あのことは私はまだ許せない。いくら仕方のないことだとしてもお前が殺したようなものだからな」

「……悪い……そのせいで姉ちゃんが苦しんでいたの知っているからな」

「でも、今日お前を見て私たちから出て行つた理由を思い出してから今のお前ならあかりを任せられると思った」

「……俺は自分の過去を隠したかったただけだ。それに自己満足ではないしな」

「それでもお前は私に思い出させてくれた」

「……あかり何があつても俺が守るから」

「当たり前だろ！もしあかりに何かあつたらお前のことを絶対に許せないからな」

「安心しろとは言わない。でも今まで俺たちに尽くしてくれた分これからは好きに生きてくれ」

「姉に向かつてなんか生意気だぞ」

「ははっ。あ、姉ちゃんに会ったら渡そうと思っていたんだ」

と言って姉ちゃんに小さな包みと銀行の通帳を渡す

「これは？」

「大したものじゃないけど今までのお礼」

「これはネックレスか！！通帳のほうはー！！」

「ネックレスは特注品なんだ。通帳のほうは俺が姉ちゃんのバイト代で生活していた時のお金分を利子つきで」

「そんなこと気にしなくてよかったのに。それに生活費は私たちの3人分だろ」

「家計を預かっていたのは俺だから」

「だからって……」

「気にしないで受け取ってくれ」

「……ああ、ありがとな」

「あずさ君、私たちの車に乗っていく？」

エイミイさんが窓から手を振っていた。
横には美由紀さんが乗っている

「いいんですか？」

「私たちもみんなのところに行くから」

「ありがとうございます」

「ほら早く乗っちゃって」

「じゃあ姉ちゃんまたな」

「ああ、あかりを連れてすぐにも戻ってこいよ」

「上手く休日が取れたら絶対行くから」

車に乗り込む。隣にはあかりも乗っていた
ほんとに行く気なのか

「桃子さん、士郎さんまた来ます」

「おう、また来いよ」

「またね」

「おい、俺は？」

「恭也さんはドイツだろ。なかなか会えないからいいと思って」

「どんな理屈だよ」

「まあじゃあね恭也さん」

車が動き出す少し進んだところで俺があかりのほづをふと見るとこ

つちを向いて涙を浮かべていた
やっぱりここから離れたくないのかと思っているとあかりが俺を指さしてきた

「どうしたあかり」

「お、おおお兄ちゃん、頭、頭から血が」

「えっ？」

頭に手を持って行って確かめると確かに出ていた
なんだこれ？俺こんなに怪我した覚えはないぞ
手で頭の上を探ると毛皮のような物に触れた……これはなんか覚えがあるぞ

「……何をするアルフ」

「フエイトを苦しめた分のお返しだ」

「痛い」

強引に引き離すとアルフは獣から小さな子供の姿になった

「お前そんな姿になれるんだな」

「そっか、あんたはこの姿を見るのは初めてなんだっけな」

「ああ」

「今はちび達がいるからこっちの姿のほうがいいんだ」

「なるほどな」

「アルフちゃん、私管理局に入っていていいってお兄ちゃんに言われたんだよ」

「ホントか？よかったなあ」

「入っていいとは言っていないけどな」

「そういえばあかりは魔法を見せてあげたのか？」

「ううんまだスフィアしか」

「じゃあ魔力変換資質は？」

「まだ」

「無視かよ！！で、変換資質ってなんのだよ」

「それは秘密」

「お楽しみだな」

「教えろよ！！」

「そろそろ着くよ」

「はい」

「教える」

「やだ」

「じゃあお前のデバイスは？」

「あ、そういえば忘れてた」

「そういえばあかりのはないな」

「は？」

「無しでやっていたんだよ」

「ね」

「マジかよ……だったら俺が作ってやるよ。デバイスマイスターの資格あるし」

「本当？お兄ちゃんありがとう!!」

「よかったなああかり」

「うん」

「はい到着」

みんなが車から出ていく……そういえばはやて姉ちゃん達怒っているだろうな

ヴィータとかシグナムさんと怒っているだろうな

「お兄ちゃん早く」

「あ、ああ」

そろそろと出ていく

ん？なんかいいにおいがする。これはBBQかなんかお腹空いてきたな

「エリオ、俺の分、残っているか？」

「あ、兄さん！！戻ってきたんですか？」

「ああ、お姉ちゃんズの車に乗せてもらってな。でっおれの分は？」

「あ、すみません。もうないんです」

「は？」

「僕たちが全部食べちゃったんです」

「僕たちじゃなくてエリオとスバルがね」

「エリオ、スバル」

「ひい！！兄さんごめんなさい！！」

「だって、おいしかったんだもん」

「おいスバルお前のおなかはどうなっているんだ」

「他の人の十倍は食べるわね」

「そ、そんなには食べ……られるかも」

「食べられるのかよ」

「うるさいあずさ」

「で、俺は明日まで何もなしか」

「あ、あのお兄ちゃんこれ」

キヤロが肉や野菜がのつたお皿を渡してきた
やばい涙が出てきた

「あ、ありがとなキヤロ」

「い、いえ、一応とっておきました。私の使ったお皿で悪いんですけど」

「別にそんなの気にするかよ」

ありがとうと言って受け取る。うん、おいしい

「なあ、あずさ君私たちに言うことないん？」

「もぐもぐ……ん？なんですか？はやてさん」

「だから私たちに言うことは？」

「もぐもぐ……………ん？」

「一回食べんのやめい！！」

「たくつなんですか？はやてさ、ん！！」

「何で教えてくれなかったんや？」

「あの、それはその…なのはお姉ちゃん助けて」

「それは無理」

「あゝずゝさゝくゝんゝ？」

「その、すみませんでした。」

「まあなのはちゃん達から詳しい話は聞いたから許すことは許したる」

「あ、ありがとうございます」

「それと、敬語やめてくれへん？」

「え、ど、どうして？」

「そなん、なのはちゃんとフェイトちゃんだけずるいやないか」

「そ、そんな理由なんですか？」

「そや、その何が悪いっていうんや？」

「わかったよ、はやて姉ちゃん」

「うん、」

はやて姉ちゃんが満面の笑みを浮かべてうなずいたあれ？なんか手に持つてる。煙が出ているような？

「ね、ねえ、その手に持っているのは何？」

「ああ、これはなあゝシャルが勝手に作っていた食べ物や」

「え、シャルさんの？それが食べ物？何で煙が出るの？」

「煙はただ熱いからや」

「いや、でもその煙紫色だし」

「せや、これあずさ君食べへん？」

「食べませんよ！！俺にはこのキャロが取っといってくれたご飯があるから大丈夫です」

「敬語は禁止だって、それとそのご飯ならフェイトちゃんが」

「え？」

ご飯を置いていたはずののテーブルを見るとフェイト姉が俺のご飯を一心不乱に食べていた

「フェ、フェイト姉何で食べてんの？」

「がつがつ……だってあずさだけキャラからもらってずるいんだもん」

「そんな、せっかくキャラがくれたのに」

「がつがつ……はあくおいしかった」

「……どうしよう」

「さあこれをあずさ君は食べようか」

「わ、わかったよ。胃薬用意しておいて」

「大丈夫や、胃薬、整腸剤、なんでもあるで」

「よしっこうなったら覚悟を決めるしかないな」

変な食べ物を食べる

「もぐもぐ……なんだこれ？シイタケと……このジャリジャリ感はいの殻？……なんか変な味が……ぶほっ！！ごめん……みんな……先に逝く」

ばたり……俺の意識は途切れた
遠くからなんか声が聞こえる

「全く、私たちには何も言わないで逝っちゃうなんて」

「うつうつ、あずさちゃん私たちを置いて先に逝っちゃうなんて…
…しょうがないあずさちゃんの首を私の家に持って帰って飾るしかないのか」

なんか不吉なことが聞こえたような……いやいや聞こえてない聞こえてない

「そうね、私たちに何も言わずに逝った罰として私には心臓を頂戴」

「ちょおおおと待ったあああああ」

「あ、あずさ」

「あずさちゃん」

「二人とも何怖い事話しているの？」

「そんなのウソに決まっているじゃない」

「私は本気だよ」

「すずか姉めっちゃ怖いからやめて」

「だっ たらしいことは」

「すみませんでした」

「うん」

「よろしい」

「そろそろお風呂に入ろうか」

なのはお姉ちゃんが言い出す
そういえばもう夜だしな

「でもここお風呂ないわよ」

「アリサ姉なんでないんだよ」

「そりゃ、ここを使うのは夏だから湖で十分なのよ」

「アリサ姉が湖で……」

「何よ」

「何でもないよ……そうするとなのはお姉ちゃん、あそこかな」

「そうだね、じゃあみんなでスーパー銭湯に行こうか」

「すつばあせんとっ?」

「何言ってんだ?」

「公共浴場みたいなものね」

「じゃあ行こうか」

「大人11人子供5人で」

「ちょっと待てあずさ!!私は大人だ」

「何言つてんだよヴィータ。子供だといいいことがたくさんあるが大
人だとないんだぞ」

「なにがあるんだよ」

「例えば子供だと、何かのチケットも半額だしクリスマスだってプ
レゼントもらえるんだぞ」

「た、確かに……私は大人だー」

「……ちっ」

「今お前私を丸め込もうとしたよな」

「シテナイヨー」

「会計は私がやるから先行つてていいでー」

「じゃあ行くか……ん?」

なにやらエリオが焦っていた

「エリオ君一緒に入ろうよ」

「いや、ぼ、僕男だし兄さんもいるから」

「えゝだったらお兄ちゃんも一緒に入ればいいじゃん」

「いやでも、兄さんは16歳だから入れないから」

「エリオゝ」

「兄さんが呼んでいるから行くね」

「あ、エリオ君待って」

「じゃあねゝ」

エリオがこちらに走ってくる
なんか大変なことになってるなゝそういえば俺も昔……

「何で赤くなっているの？兄さん」

「いや、なんでもない」

「早く行こうよ兄さん」

「あ、ああ」

もう服を脱いだエリオがタオルを巻いて待っていた

俺も服を脱ぎエリオのもとに向かう

「また体洗ってやるよ」

「ありがとう兄さん」

初めてエリオと知り合った時以来ずっと体を洗っている
毎日の習慣だな

「お、前来た時より風呂の数が増えたな」

「前にも来たことがあるの」

「まあな、ほら頭洗うぞ」

「はい」

頭から洗い始める。エリオを洗うのと同時に俺の髪も洗う

「エリオ目、つぶれ」

「はい」

バシャアアアア

頭から水をかける

「次は体を洗うぞ」

じゅじゅじゅ……じゅじゅじゅ……

「手、あげろ」

「はい」

「エリオまた背、伸びたか？」

「え、そうか……」

「エリオくん、お兄ちゃん」

「きゃきゃきゃキャロ!?」

「なんでおまえここにいいいい居るんだ!??!?!?!」

「そうだよ何でここに……」

「係員の人に聞いたら11歳未満なら私もこっち来ていいんだって」

「だ、だからってこっちに来なくったって……」

「あーエリオ君何やてもらっているの？」

「え、兄さんに洗ってもらっているだけだけど」

「キャロもスバルとかに洗ってもらってんだろ」

「ずるい」

「「え?」」

「エリオ君だけずるい！！私も」

「待て待て待て待て待てキャロ！！俺は女の子を洗ったことは……」

「フェイトさんたちがさっき昔はよく一緒に入っていたって」

「フェイト姉ーーーー！！！！！！！！！！」

「お兄ちゃん」

「わかったよ、エリオが洗い終わったらな」

「うん」

「どんどん洗っていく、俺は男子は洗ったことはあっても女子は……何年か洗ったことはないぞ
力加減とかよくわからないんだけど」

「まあこんなもんだろ」

「ありがとうお兄ちゃん」

「お前ら二人で子供用風呂行って来れば？」

「そうだね、行こうエリオ君」

「う、うん」

二人が行った後一人でゆっくりとつかる

そういえばキャロには背中傷見られなかったな

「ん？」

更衣室で髪を乾かしているとエリオが戻ってきた

「エリオどうだった？」

「どうだったも、あの後フェイトさんたちがきて大変だったんだよ」

「そ、そうだったのか」

「そういえばキャロには見られなかったの？」

「ああ、俺にとってはいいことだけだな」

「まあ」

「あ、何か飲むか？」

「別にいいよ」

「子供が遠慮するな」

「じゃあコーヒー牛乳を」

「なんだ？妙に大人っぽいんだな」

「兄さんは？」

「うゝん何にしようかなあ？……あ、あつたあつた俺はこれにするよ」

「チーズ牛乳？」

「結構おいしいんだぞ」

「乳製品を乳製品で……」

「飲む？」

「いらない」

「そう」

二人で黙って飲む

もちろん片手は腰に当てて飲んでるぞ

飲み終わり外に出ると、アラートが鳴った

「どうすればいい!!」

「場所を教えるから先行って待ってて」

「オーケーはやて姉ちゃん」

（フルーテ場所までよろしく）

（わかってますよ）

場所へ行くとスライムが出た

（これ？）

（そうみたいですネ）

（どうする）

「どんな攻撃が聞か試してみるか」

フルーテを起動させる

自分の周りにスフィアを20個ほどだす

「いくぞ……シュート」

スライムに0のダメージ

スライムが分裂した

スライムが増えた

スライムがさらに増えた

あずさは精神的ダメージ50を食らった

（ぐはっ）

（なにふざけているんですかー！！）

（増えるとか聞いてねえぞー！！）

（全部ロストログアなんでしょうかね）

（もしかして俺のせい？）

「あずさ私たちに任せなさい」

フルーテと話しているとみんながやってきた

「あれ？隊長陣は？」

「はやて部隊長たちは空で守ってくれてる」

「ティア動きは？」

「エリオとスバルはこれ以上広げないように、私とキャロで本体を見つける」

本体っていうことは他はダミーか。よかったあゝ

「で、俺は？」

「あんたは私たちのサポート」

「OK、フルーテ準備して」

（元から大丈夫です）

「えっと本体はどのように見つける気だ」

「小さな動きの違いからよ」

「めんどくさいことするんだな」

「うっさい集中できないでしょ」

「はいはい」

「おいあかりも来てんだろ」

あかりを読んでみる

お、来た来た

「お前の魔法で周りの動きを止められないか？」

「できるよ」

だめもとで聞いてみたんだけどな

「早くやってくれ」

「うん、えっと……こうかな？」

「スフィア？」

あかりがスフィアを40個ほどつくる
デバイスなしで40は無理すぎる

「大丈夫このスフィアは特別だから……シュート螺旋陣」

スフィアをスライムたちを囲むようにする
そしてその輪を縮めていく

「……あかり向こうにスフィアは効かないぞ」

「うるさいお兄ちゃん」

こつちを一瞥してまたスライムのほうを向く
輪がスライムを全部囲んだらあかりが

「……固定、フリーズ」

「え？お前の魔力資質って氷？」

「うん」

スフィアがそれぞれ固まっていく
全部固まると今度はドーム状に固まっていく……止まった。まだ半分で来ていないんだが

「ごめんお兄ちゃん私まだここまでしか作れない」

「おい！！たくっだから無理するなって言ったのに……お前の魔力資質、元から水があつたらやりやすかったりするか？」

「え？うんそうだけど」

「だったら今からやるからすぐに固めろ」

俺はスフィアを40個だす

そして上へまだあかりが固めてないところへ放つ

「あかり、俺の魔力変換資質は水だ！！スフィアに水をまとわせておいたからすぐに氷を作れ」

「う、うん」

氷のドームが出来上がる。寒いなさすがに……スライムたちの動きも鈍くなっている

「ティアこれで少しはわかりやすいと思うぜ」

「ありがとう、あかりちゃん」

「まで、俺には？」

「見つけた！！キャロ」

「はいっ！！」

「……無視かよ」

結局キャロが封印して終わった

あかりの変換資質は俺と相性がいいのかもしれないな。

「もう帰っちゃうの？」

「うん、ロストロギアが手に入ったから」

「そう、また来なさいよ」

「うん、わかった」

「あずさもいなくならないようにね」

「んゝわかってる」

「あ、あずさ君。さっき勝手にロストログアに攻撃してたよね。」

「そうですけど」

「はやてちゃんは先行って待っててていう命令だったけど」

「……そうだねなのはお姉ちゃん」

「あとで少しお話しようか（ニコーーーーー）」

「は、はい（ダラダラダラダラ）」

「あの、私はどうなるんですか？」

「ああ、あかりちゃんは六課で一応預かりってことにするから」

「はい！ー！」

こうしてみんなは帰って行った

俺は地獄へと旅立った

第十一話 無視は馴れてるもん。大丈夫だもん byあずさ（後書き）

リマ「そしてあずさは二度と戻ってこなかった」

あずさ「戻ってきたよ」

リマ「……ちっ」

あずさ「リマーーーーー」

リマ「えゝ今回はあずさが無視されたり命令無視したりいろいろと
- - - - -」

あずさ「命令無視はフルーテのせいだ!!」

リマ「あずさ、うるさい!!あ、今回は感想コゝナゝはありません」

あずさ「……どんまい」

リマ「泣いてなんかいないもん。」

あずさ「あつそ」

リマ「次回は番外編なんだからね!!」

あずさ「なぜにツンデレ?」

リマ「あずさはあまり出てないんだからね!!」

あずさ「主人公なしかよ!!」

リマ「今回あずさはスフィアしか出してないんだからね!!」

あずさ「それ言っなよ!!」

リマ「また今度なんだからね!!」

あずさ「……お前大丈夫か？」

番外編

お兄ちゃんはロリコンなのか!!

byあかり(前書き

リマ「今回は短いんだからね!!」

あずさ「まだツンデレなのか」

リマ「デレは一ミリもないんだからね!!」

あずさ「あっそ」

リマ「ではどうぞなんだからね!!」

番外編

お兄ちゃんはロリコンなのか!! byあかり

薄暗い部屋で1人あずさが手元で設計図を書いている

ここはデバイスルーム、あずさはあかりへのデバイス作りをしていた。

今回の主人公はこのあずさでは無く、その妹あかりが主人公である

（あずささん、どのような設計にするんですか？）

（フルーテか。うーん、あかりはヴァイオリンをやっていたからそれをベースにして

あいつの魔力変換資質にあったものにしなきゃな）

（ところであかりさんは？）

（あいつはいまはやて姉ちゃんの所で説明を受け???）

「お兄ちゃん!!」

あかりが扉を開けて入ってくる

何やら顔が赤い

「どうした？あかり？まだデバイスは出来てないぞ」

「今はそんなのどうでもいいの!!」

「じゃあなんだ？」

疑問を浮かべつつ近くにあるチーズ牛乳を飲む

「お兄ちゃんってロリコンなの!？」

ぶはっ

口に含んだチーズ牛乳が綺麗なアーチを描きながら吐き出される

「げほっげほっ……誰から聞いた!!」

「?はやてさんだけど……汚いよお兄ちゃん」

あんの狸姉!!人の妹になんて事を

「断じて違っぞ」

「本当?でもお兄ちゃん、この前のお風呂でエリオ君とキャロちゃん
の身体洗ってたんでしょ」

「そ、それは小さい子にせがまれたら仕方が無く……」

「やっぱりロリコン何でしょ」

「ち、ちがっ??？」

「そこまで言うんだったら他のヒトに聞いてきてあげるよ」

「や、やめろ」

「あ、フルーテを持って行くから」

（あずささん私も気になるので）

「ま、待て！！フルーテも何で！？」

（それは・・・まあいろいろと）

「じゃあ行ってくるから」

「やめるーーーーー」

あずさの悲鳴も虚しくあかりはフルーテを持って元気良く出て行ってしまった

「・・・早くデバイスつくろう」

*

「ねえフルーテ。誰に聞くのがいいのかなあ？」

（まずは、エリオさんなんかは良いと思います）

フルーテと話しながらエリオを探す

「何でお兄ちゃんはおリコンなのに私には冷たいんだろう？」

（昔はどうだったのですか）

「昔？昔は私が幼稚園に居た時には、毎日早くに迎えに来て遊んで

くれたんだよ」

それに私が何をしたいって言ったら嫌な顔一つせず遊んでくれたの」

（優しいお兄さんだったんですね）

「うん！それに私が小学生になってからは、いつも一緒に登下校してくれたし、夜ご飯もお兄ちゃんが作ってくれたの」

（でも、あずささんが魔法に出会ったのって1年生ぐらいのときでしたよね？）

「？そうだけど」

（そうすると、あずさんはなのはさん達とも仲が良かったと伺っているのですが、あかりさんはなのはさん達の事知らなかったんですね）

「そうだよ。お兄ちゃんは今が私の友達の家で遊んでいるときに遊んで居たみたい」

（不思議に思わなかったのですか？）

「私はそのときちっちゃかったからなにも思わなかったよ」

（魔法については？）

「聞いたときは、お兄ちゃんってすごいなあ　位だったよ」

（聞いてはいけないと思うのですが・・・あずさんがいなくなっ

たときは)

「ん」と・・・お姉ちゃんがすごく怒っていたのは覚えているけど、私は頭の中が真っ白になったかんじだった」

(そうですか・・・すみません辛い過去を思い出させてしまった)

「別に気にしてないし、お兄ちゃんの魔法でその時の事は忘れてたからね」

(エリオさんが来たみたいですよ)

フルーテに言われて前を見てみるとエリオ君とキャロちゃんがい

「エリオくん!!」

「あ、あかりさん」

「?どうしたんですか」

「エリオ君に聞きたい事があって、キャロちゃんにも」

「?なんですか?」

「お兄ちゃんってどんな人?」

流石にロリコンかは聞けないもんね
だから少しづつ聞いて行こう

「兄さんですか?兄さんはとても優しい人ですよ」

「私もそう思いますけど」

「始めてあつたのは？」

エリオ君にまず聞いてみる

「兄さんに会つたのはこの前思い出した事なんですけど、始めては孤児院にいる時です」

「あ、ゴメン。辛い事聞いちゃったかな？」

「いえ、別に気にしてないです。」

「だったら詳しく教えてもらえる？」

「わかりました。えっと、僕が孤児院でフェイトさんが後見人になってくれて間も無い頃、僕の孤児院では管理局へと行く人を育てる様な目的があつて、僕も魔法を勉強し始めて早くに上手くなろうとしていた時に会いました。兄さんは僕が無理をしているとって正しい魔力の使い方を教えてくれました」

「それが出会い？」

「はい。そして僕にソニックブームの使い方を教えていただきました」

「そうなんだ」

「はい。そのあともしろい口と教えていただいたんですが記憶を失

「つていたのでフェイトさんに教えてもらうまでは忘れてました」

「意味ないじゃん」

「身体が覚えていたので、フェイトさんに教えてもらうときはすぐに出来ましたよ」

「で、お兄ちゃんと同室だけど、お兄ちゃんはどんな感じ？」

「いつも訓練に付き合ってくれたり、接近戦のやり方などを教えてください」

「そうなんだ」

「それに、料理とかも教えてください」

「料理？」

「はい。僕は無人世界とかに行く事もあったので自分で作って食べる時もあるのでとてもやくにたちます」

「へエーありがとうエリオ君。つぎはキャロちゃんお願い」

「あ、はい。私がお兄ちゃんと初めてあったのは、管理局に入られて間も無い頃です」

「深い内容は教えてもらえる？」

「いやそれはちょっと・・・」

「そっか、ありがとね」

「お兄ちゃんはとても優しい人です」

「たとえば？」

「私はお兄ちゃんと同じフルバックって言うポジションなんですけど、それについて教えてもらったり補助の魔法とかを教えてもらってます」

「この前のお風呂ではどんな感じだった？」

「どんなって？」

「身体洗ってもらったんですよ」

「あ、はい。お兄ちゃんはとても顔を赤くしていました」

「そりゃするでしょ（ボソッ）」

「何？エリオ君」

「何もいつてないよ」

「ありがとう二人とも」

「いえ、でも何で？こんなことを」

「特に理由は無いんだけど、お兄ちゃんがロリコンなのかどうなのかって調べているの」

「「えっ!?!」」

「まあいろいろとみんなのことを知りたいって事ってもあるし」

「そういえば・・・」

「何キャラちゃん？」

「お兄ちゃんに前抱きしめられました」

「え!?!」

「そういえばそうだったねキャラ」

詳しくは第五話で

(あかりさん?)

ずるいよキャラちゃん、私はこの年になってからまだ抱きしめてもらってないのに

「私だって昔、お兄ちゃんに抱きしめられた事があるからいいもん」

「え?何の事ですか」

「キャラちゃんはとうせ一回だけでしょ!! 私なんて何回もあるもん」

「「は?」」

「キャロちゃんには負けないから!!」

(あかりさん?)

「あれ? キャロ?」

「あかりさん!! 私はお兄ちゃんに身体洗ってもらった事もあるんですよ!!」

「それが何よ!! 私ほき、キスした事だってあるもん」

「兄妹の間のキスなんてキスには含みません!!」

「キャロちゃんは一回もした事ないからそう言ってるんですよ!!」

「わ、私だって昔お兄ちゃんにキスした事あります!!」

「!!」

「それに、私はお兄ちゃんと二人で夜中に訓練したりしてるんですよ!!」

「ど、どうせ訓練でしょ。私は一緒に寝た事もあるもん」

「!!」

「キャロちゃんには無いでしょ!」

「あかりさんは今のお兄ちゃんを知らないですけど私は知ってます」

から!!」

「そんなのこれから知って行けば良いもん!! キャロちゃんも昔のお兄ちゃんを知らないでしょ」

「昔より今です!!」

「キャロ、さっきの夜中の訓練の所詳しく教えてくれるかな?」

二人で口論していると私の後ろからフェイトさんが笑顔で立っていた

「「フェイトさん」」

「あずさと二人きりだなんて・・・何もされてない?」

「え、教えてもらっているだけですから」

「それならいいんだけど・・・私に話してくれたら教えてあげたのに」

「フェイトさんとはポジションが違いますから」

「でもでも教えてあげる事もあるもん」

「そんな事言われても」

「エリオは?」

「僕も教えてもらってますけど」

「何で！？エリオにはわたしがおしえられるとおもったのに」

「フェイトさん忙しいですし」

「ずるいよあずさ、ちょっとあずさとお話ししてくる」

「「「え！？」「」」

フェイトさんがデバイスルームへかけて行った
しばらくするとお兄ちゃんの悲鳴が・・・

『どうしたのフェイト姉！！ドアを壊して』

『あずさだけずるい！！』

『話が見えないんだけど！！・・・ぎゃあああああ！！！！！！！！！！』

「お兄ちゃんはロリコンだったで良いかも」

（そうですね〜）

「「いいんですか！？」「」

「何か疲れたから」

判定

お兄ちゃんはロリコンか

お兄ちゃんは優しいか

お兄ちゃんは死んでるか

これが調査結果です

「ありがとな〜あかりちゃん」

「いえ、別に良いですよ。はやてさん」

番外編

お兄ちゃんはロリコンなのか!! byあかり(後書き)

あずさ「短いし俺はロリコンじゃない!!」

リマ「嘘だつ!!」

あずさ「ネタ古くね!!」

リマ「つぎも番外編の予定です!!」

あずさ「また？」

リマ「・・・感想コナ
す!!」

ユタさんありがとっ!!

あずさ「話しそらした!!」

リマ「ではまた次回」

あずさ「無視!?!」

リマ「ps、あずさはロリコンです」

あずさ「何言ってるのリマ!?!違うから絶対に違うから!!」

番外編 はじめてお兄ちゃんと出会った時のこと b y キャロ（前書き）

リマ「番外編です」

あずさ「何話やるんだ」

リマ「アグスタまでにもうちよつと入れておきたいんだよね」

あずさ「だったらいいけど」

リマ「今回はキャラが可愛いんだよ」

あずさ「そうなんだ」

リマ「ではどづぞ」

番外編 はじめてお兄ちゃんと出会った時のこと by キヤロ

- - - 怖い - - - 怖い - - - 怖い - - - 逃げなきゃ - - -
- 早く - - - より遠くへ - - - 見つからないところへ - - -

私は走っていた。道なき道を、ひたすら前を見て走る。

どれほど走っただろうか、いつの間にか人通りの多い商店街らしきところに来た

人ごみの中でいろいろな人にもまれていると管理局の服を着た人が見えた

- - - 隠れなきゃ、見つかったら捕まる。

裏道を見つけすぐに入る。そのまま走り続けていると人にぶつかった

「あ、すいません」

「いや、別にいいけど君一人？」

ぶつかった人を見上げると三人ぐらいで固まって何やら笑っていた

「一人ですけど？」

「だったらさあこれからお兄ちゃんたちといいたころへ行かない？」

「いいところですか？」

私は考えた。この人たちと一緒に行くのもいいことだがもし管理局に見つかったらこの人たちは助けてくれるのだろうか？いや、この人たちを巻き込むのはいけないことだ。この人たちはいい人だ。だからここは、断らなくては

「あの、すみません。私にはかわらないでください」

「何？俺たちに気い遣ってんの？別にいいから行こうぜ」

「いえ、本当にお気遣いは結構なので」

「いこうって言うてんだろぅが!!」

「痛っ」

強引に腕をつかまれてしまった。よく見るとこの人たちの笑顔が怖い

「嫌っ!!だれか助けて!!」

「誰も来ねえよこんなところ」

「もういい犯っちまおうぜ!!」

「お前ロリコン趣味があつたのか」

「ちげーよ。この年齢ならこれから俺たちの好みにできるだろ」

言っていることはわからなかったが何か嫌なことを言われてるような気がした

このままだと連れていかれる

「だれか!!助けてー!!」

「だから来ないって……」

「お前ら邪魔なんだけど」

「いまおれたちがここ使用中なんですけどー」

「そうだ、ガキはおうちに帰ってい、ろ？」

「おい、こいつは管理局だぜ!？」

「何で管理局の奴がこんなところに!？」

「あんたらさあ小さい女の子に向かって何変態じみたこと言ってるの？」

「はあ？僕たちはこの子と遊んでいただけですけど」

「そうですけどおゝ管理局の人はそれを邪魔する権利を持っているんですか？」

「そうなのか？」

「い、いえそんなことは、私は……」

「違うつてよ？」

「く、くそっ!!もういいやっちまうぞ」

「」「おうつ」「」

小さな管理局の人に向かってさっきの3人の人が殴りに行く

大変！？私を助けてくれようとした人が逆にやられてしまう

「そこの子、そこから動かないように」

「えっ！？はっはい」

「おら管理局さんよおよそ見していていいのか？」

ガンッ

一人の人が持ったパイプが管理局の人の頭に当たる
管理局の人はふらつとよろめいてしまう

「痛っなあゝゝ……手を出さないで収めようと思っていたけど……
お前ら殺すよー!!」

「はあゝ何言っちゃってんのこいつ？」

「知ら……ぐはっ」

「おまつどうし……ぐはっ」

「早い!-!」

思わず言葉が出てしまった

それほどまでに管理局の人はさっきの攻撃されるまでとは違った
その人のことを勘定で表すなら『怖い』が一番合っている
私がびっくりしている間に管理局の人はほかの人を倒してしまつて
いた

「……さすがに殺すのはダメだね。君もそう思うよね」

「えっ？は、はい」

「……じゃあこのロストログアを持たせて……ロストログア不法所持でいいか」

「ロストログアなんて持っているんですか？」

「……まあ管理外都市で手に入れたやつだけど」

管理局の人がそういつて連絡している

この人は他の管理局の人とはなんか違うな

「……よしつ。えつとさっきの人たちと一緒になると思っけど君はどうしてこんなところにいるの？」

「えっそ、それは……」

「何か事情があるみたいだね……まあいいや名前は？」

「きゃ、キャラです」

「俺の名前は柊あずさ。じゃあキャラ、これから行くところあるの？」

「ありませんけど……なんですか？」

「じゃあ俺についてきて」

「へ？別にいいですけど」

この人は信頼できる
さっきの人たちみたいに悪い感じはしない
でもどこへ行くんだろう？

「じゃあ行こうか」

「はい」

「どこに行きたい？」

「どこでも……」

「だったら遊園地に行こう」

「遊園地ですか？」

「知ってる？」

「話でしか聞いたことはありません」

「そう、きっと楽しいよ」

そう言ってあずさんは私の手をとって歩き出して行った
電車とバスを乗りついで遊園地に来た

「あの、私お金持っていないんですけど」

「電車の代金なら気にしないでこれでも管理局に務めてるから」

といってあずさんは私を連れて中に入って行った

中にはいると映像や本で見たのとは全く違いその迫力にびっくりして声がでなかった。

「何に乗って見たい？」

「あの・・・私まだ来た事がないのでどの様なものがあるのか良くわからないんですけど」

「うーんだったら何かに乗る前にご飯でも食べようか」

「ご飯ですか？」

「うん、俺まだ昼ご飯食べてないからお腹空いちゃって」

そういえば私も午前中に研究所から逃げ出したから食べていないそれにずっと走り続けていたから少し眠いだから休める所に行きたかった

「じゃあ行こうかキャロ」

「はい。」

近くにあるレストランにはいるとお昼もすぎていたからか空いていた私はこんな所にも来た事が無く目をキョロキョロさせていた

「何がいいキャロ？」

「えっと、何でもいいんですか？」

「うん、何でも好きなの選んで」

「あずさんは何にするんですか？」

「俺はモッツアレラチーズとあと野菜のスープと牛乳にしようかな」

「じゃあ私は??？」

「キョクル」

突然鳴き声がした

あ、フリードの事忘れていた

逃げ出す時に音がでない様に帽子の中にいれてそのままだった

「出してあげなよ」

「はい」

「キョク」

「この子は何て言う名前？」

「フリード、フリードリヒといいます」

「可愛い名前だね」

「そうですか？ありがとうございます」

「その子牛乳飲める？」

「はい」

「だったら俺のを少し分けてあげよう」

「すみません」

「良いよ良いよ。キャラは何にする？」

「じゃあ、あずささんと同じやつで」

「・・・いいの？」

「はい」

「まあいいや。すみませんオーダーお願いします。」

あずささんが注文する

フリードは頭の上で疲れたのかねむっていた
しばらく待っていると料理が運ばれて来た

「じゃあ食べようか」

「はい」

二人で食べているとフリードが食べ物の匂いにつられて起きて来た

「俺のをチーズ牛乳をわけてあげよう」

「え？」

「あ、キャラも飲んでみる？」

なんとあずさんはモッツアレラチーズを牛乳にいれ書き混ぜて飲んでいた

フリードにも小皿にいれ渡すとフリードは一口舐めると羽をばたつかせて飲み始めた

美味しいのかな？少し気になったからコップを受け取り飲んでみる

「・・・おいしい」

「でしょ。本当はこれにレモンをいれて温かくするともっと美味しくできるんだけどね」

「へえ、私もやって見ていいですか？」

「いいよ、これは疲れている時には持つて来いなんだよ」

私もチーズを入れて飲む

ご飯を全部食べ終わると、先ほどの眠気が強くなって来た

「少しベンチでお腹を落ち着かせようか」

「はい」

ベンチで休んでいると徐々にまぶたが重くなってきた

????????????

「ん、あれ？」

何時の間にかねむっていたらしい

いつもは良く眠れないのに、今だけはとても暖かい夢を見た

「あれ？あずさんは」

「んゝ何？」

上から聞こえる

上をみるとあずさんの姿が見えた

そういえば私が今頭をおいている場所ってあずさんの膝？

「すみません」

「別にいいよ。気にしないで」

あわてて顔を上げる

あたりはもう暗くなり始めていた

「ねえキャ口観覧車に乗らない？」

「観覧車ですか？」

「そうあれ」

あずさんが指差す方をみると大きな輪にカゴがたくさんついていて少しずつ動いているのがみえた

「別にいいですけど」

「じゃあ行こうか」

観覧車に着くと二人＋一匹でのりこんだ

半分ほどまで上がり景色を眺めているとあずさんが深刻そうな顔をしていた

「ねえキャラ」

「はい」

「キャラはさあ研究所にもう戻りたくは無い？」

「っ!!」

知られていた

あずさんは管理局の人だ

知られていて当然だろう

でも知られたくは無かった

「キャラは誰か後見人はいるの」

「いませんけど」

「・・・だったら俺が後見人になろうか？」

「えっ？でも私とあずさんってあまり年齢変わらないですよね」

「まあ6歳の差だしそんなに離れていないけど後見人になる事はできるし」

びつくりした

きっと研究所へ返されると思っていたのに

「もしキャロに俺以外の後見人になるって言う人がいたらいいんだけど」

「でも私の後見人になってくれるんですか？」

「まあ本当はあと5日立たないと後見人になれる年齢じゃないんだけどね」

「待ちます」

「そう？でも俺以外に後見人になりたいって言う人がいたらそっちにいくんだよ」

「なんでですか？」

「俺は管理局の中ではあまり良く思われていないから」

そういったあずささんの顔はともかなしそうだった
私はあずささんに感謝していた

観覧車が終わるとあずささんは私を研究所まで送り届け
研究員の人と何やら話をして帰って行った
最後にあずささんは

「もしかしたら5日後会える力モ」

といていた

その後、研究員の人達の私への態度が少し変わった
少しだけ優しくしてくれる様になったのだ

それから3日後私はフェイトさんに引き取られた

2日後、どこからか笛の音が聞こえて来た

????????

「これが始めてのお兄ちゃんとの出会いだね」

「そうだったな」

夜中にお兄ちゃんと訓練をして休憩中にお兄ちゃんとチーズ牛乳を
飲みながら話していた

チーズ牛乳はお兄ちゃんが作ってくれたものだ

「お兄ちゃん、今度遊園地と一緒にいこう」

「別にいいぞ」

「そういえばあの時に倒した男の人たちはどうなったの？」

「ん？？ロストロギア不法所持でつかまえたぞ」

「あの時のお兄ちゃん表情つて……」

「……キャラ、俺はあの頃のことはあまり好きじゃないんだ」

「だったら聞かないね」

「キャラはいい子だな」

「えへへ」

お兄ちゃんに頭をなでられてしまった
／＼／＼気持ちい

「だったら訓練を続ける……」

「キャラ!!大丈夫!?!」

「フェ、フェイトさん!?!」

「フェイト姉!?!」

フェイトさんがいきなりやってきた
何やらすごく怒っている
どうしたんだろう?

「訓練の邪魔だよフェイト姉」

「あずさ!!私がキャラの訓練につきあうから!?!」

「え！？でも！！」

「フェイト姉ではフルバックは無理だろ」

「大丈夫だもん！！キャロには私が教えるんだもん」

「無理だつて」

「だったら強いほうがキャロに訓練を教えるってことで」

「何でそんなことになるの！？」

「明日の午後トレーニングルームで模擬戦ね」

「フェイト姉無理だつて」

「だったら負けを認める？」

「……それはなんかいやだな」

「じゃあ明日待っているから」

フェイトさんはそういつて帰って行った

私の意思是？何も言われなかったけど

なんかお兄ちゃんが落ち込んでる

「お兄ちゃん大丈夫？」

「……なあキャロは俺とフェイト姉どっちに教わりたい？」

「んゝやっぱりフェイトさんは忙しそうだからお兄ちゃんに教わりたいな」

「フェイト姉のことを思ってるんだな」

「そんなことないよゝ」

「だったら明日俺が勝たなきゃな!!」

「頑張つてねお兄ちゃん」

うなずいたお兄ちゃんはまたチーズ牛乳を飲んで私に教えてくれた

番外編 はじめてお兄ちゃんと出会った時のこと b y キャロ（後書き）

リマ「感想コゝナ」

あずさ「わゝ（ぱちぱち）」

リマ「ユタさん、月光閃火さん、ありがとうございます」

あずさ「ありがとうございます」

リマ「次回はフェイトvsあずさです」

あずさ「……はあ」

リマ「どうしたのあずさ？」

あずさ「フェイト姉か……」

リマ「頑張れ！！負けたらキャロが泣いちゃうよ？」

あずさ「そ、そうだね。俺、頑張る！！」

リマ「感想待ってます！！ではまた次回！！」

番外編

『ロリコンvsロリコン』これは見ものやわ

リマ「すみません」

あずさ「何が？」

リマ「戦闘シーンがめちゃくちゃ少ないです」

あずさ「お、俺の晴れ舞台を・・・」がくり

リマ「あずさ！??で、ではどうぞ」

「ん、あ、だめ!!」

「何言ってるんですか?」

「だからそこは!! あう……はあ」

「フェイト姉、だから何言ってるの?」

「あ、あずさのせい……はふ」

何でこのような事情になったかというと

――

「来たわねあずさ!!」

「はあ、本当に戦うの?」

フェイト姉の目はランランに輝いている

やべーあんな状態のフェイト姉に勝てるのか?

いや、キヤロのため、フェイト姉のためにも勝たなくちゃいけない

「じゃあ始めるか」

「うん、どちらかが降参するか審判……なのはがもう無理だと判断した場合」

「あと、俺かフェイト姉が気を失った場合ね」

「ああ、それもあつたわね」

「いや忘れないでよ！！これ一番大事じゃん」

「一つ言つとくとあずさが気絶した場合だけどね」

むかつくなあフェイト姉

なのはさんの合図で始まる

俺とフェイト姉はそれぞれフルーテとバルディッシュを起動させる

俺はカートリッジを一発ロードしてブレードシステムに切り替える
さすがに横笛じゃあ戦えないしな

「じゃあ行きますか」

「あずさからくるの？」

「ええ」

フェイト姉が驚いた顔をしている

本当はフェイト姉から仕掛けてもらおうと思ったんだけど
まあ言っちゃったもんは仕方がないし

「はああああ！！」

切りかかる

しかしすぐにかわされる

どうしようかなあ？

やっぱりフェイト姉の得意な近接戦には持っていきたくないなあ

あれ？いま俺、近接戦仕掛けなかった？
いやいやでも軽くかわされたし今は距離を取っているから大丈夫だ
ろう

何とかフェイト姉から距離を取ろう

スフィアを40個展開させる

10個は追尾

10個は直線

10個は自分の周りに置いておく

「いきなりそんなに出して魔力大丈夫？」

「そんなにやわな身体していないよ」

「そう？ひよろひよろじゃない」

「うつさい！！シュート！！」

フェイト姉が持ち前のスピードでかわす
追尾も難なく破壊される

フェイト姉はフィールドのすみで聞いた

「こんなもんなの？」

「……こんなもの？」

「だって手ごたえが……わっ！！」

俺はスフィアを40個展開した

そのうちの10個はフェイト姉が来るであろう場所……今フェイト
姉がいる場所に仕掛けた

「螺旋 渦潮!!」

スフィアから水をだし回転させ渦を作り出す
フェイト姉はびっくりして動けないでいる
…決まった!!

「ソニックムーブ」

「え？」

「まさかこんな技で仕留められるとでも？」

「……思ってた」

「ずいぶん甘く見られたんだね!! そんなにあなたのお姉ちゃんが
弱いとでも？」

「何で今になつてお姉ちゃん宣言!？」

「なんとなく？」

「まって、フェイト姉!？何で??なぜに??俺の前じゃなくてほ
かの人の前でやれよ!!」

「あずさの前だからやっているのに(ぼそっ」

「何言ってるの?」

「あずさ!!今度は私からいくよ!!プラズマランサー!!」

「ちっ……ウォーターシールド」

即座に放たれた魔法に対応できずにシールドで受け流す
水は電気をため込むことができるためシールドに触らなければ俺には危害がない

「そっかあずさの変換資質には私のは不利だね」

「そうだね。打てば打つほど不利になるよ」

「どう有意味？」

「いつけ！！ウォルトサイバー！！」

シールドに使った水をやりに変えて放つ

「電気をまもっているから威力はupしているぜ」

「クっ……でもこんなのすぐによけられる！！」

そうこのウォルトサイバーはスピードが遅い
すぐによけられる

しかし遅いには理由がある
それは……

「散開！！」

「なっ！？」

いきなりウォルトセイバーがはじける

近くにいたフェイト姉はとっさのことでまともに浴びる
電気をまとっているためフェイト姉もしばらくは動けない

「よしっバインド!!」

簡単にバインドをかける
さあ何をしようかなあ?

「な、なにあずさ?」

「どうしようかな?」

「な、何で近づいてくるの?なのは?」

「にやははあゝあずさ君も悪いことをしようとしているわけじゃ
なさそうだからもう少し見せてもらおうかな?」

「ううゝなのはゝ」

「フェイト姉準備はいい?」

「何の?...はにやつ!!?」

フェイト姉の情けない声を聴きながら肩をおもいきし揉む
うゝんそれにしても凝ってるなあゝ

そして冒頭に至るわけです

「も、もうやめてあずさ」

「うゝん今日は久しぶりに姉孝行でもしようかな？」

「なにその姉孝行って!？」

「あ、なのはお姉ちゃんにもやってあげるから」

「ありがとうあずさ君」

「なのは？これが気持ちいいと思う!？」

「思うけど？」

「いや実際には「えいつ」はふゝ」

「気持ちよさそうだよ」

「本当はいた「えいやっ」ふあふんっ!！」

「あずさ君はマッサージ上手だね」

「昔、少しだけ医療班にいたことがあったから。それに俺は今、整
体師の免許も持っているから」

「へえゝ」

「フェイト姉にはあとここをやれば……とっつ」

「ふあほ!！」

フエイト姉が白目をむいた

うん、成功だこれであと3、2、1、「はっ!!」

体の疲れはだいぶなくなったと思うけど、心のほうはわからないなあ

「身体は？」

「ん？軽いよ!!すごく」

「じゃあなのはお姉ちゃんも」

「うん!!」

- - - - -

「はあ気持ちよかった」

「フエイト姉、俺の勝ちでいいよね」

「え、あ、うん」

「で、二人ともどんな気分？」

「すごく体が軽いけど……」

「うん、軽いけど……」

やっぱり身体がいきなり回復したから心のほうの疲れが感じやすくなっちゃうからな
どうしようかなあ？

心の疲れをなくすには楽しませることか癒すが一番なんだけど……

そっだ！！料理とかなら

「お二人さん、ひとまず俺とエリオの部屋に来て」

「なんで？」

「エリオと一緒に食べようと作っておいたお菓子があるんだ」

「あずさが作ったの？」

フェイト姉が意外そうに聞いてくる

酷いな、これでも翠屋の人気商品？2、？3を作り出したこともあるんだけどな

まあ、いくらやっても？1の商品にはならなかったけど

俺がフェイト姉の発言に落ち込んでいると俺が今思ったことをなのはお姉ちゃんがフェイト姉に話していた。なのはお姉ちゃんは優しいなあ。でも怒りと一番怖いのはなのはお姉ちゃんただけどね。困らせるが一番心配してくれるのはフェイト姉。隙を見せるとすぐにだましてくるのはやて姉ちゃん。なんだよなあ。みんないい人で俺には申し訳ないくらいんだけど何で彼氏をみんなつくらないんだろう？

きつと探せばいい人がたくさんいると思うのに。なのはお姉ちゃんにはユー兄がいるのかな？でもなんか、ユー兄はなのはお姉ちゃんのこと意識しているけどなのはお姉ちゃんはなんかユー兄に向けている感情は愛ではないような気がするんだよね。フェイト姉は？はやて姉ちゃんは？うーんわからないなあ

「何やってんのあずさ君？」

「ん、フェイト姉って今好きな人いるの？」

「……へっな、なななな何言ってるのあずさ!？」

「いるの?」

「なんであずさ君はそんなこと聞いているの?」

「それは、なのはお姉ちゃんにはユー兄がいるけどフェイト姉にはそんな人いなさそうだな」って

「?ユーノ君はお友達だよ?」

「……うん、そういうと思ったよ」

「わ、私にもいないよ」

「そうなんだ……つまらない」

「なんで?」

「そんなの弱点帳のために決まってるじゃん」

「「はっ?」」

「それに俺は恋愛に関しては結構知っているから少しでも手伝えると思うよ」

「それはあずさ君にも恋人がいるってことでいいんかいな?」

はやて姉ちゃんがやってきた。

何で来たんだろう？

「はやてちゃんどうしたの？」

「仕事が一段落したからフェイトちゃんとあずさ君の模擬戦でもみよかなあ〜と思って」

「残念、もう終わっちゃったよ」

「結構速く終わったなあ〜どっちが勝ったん？」

「俺だけど」

「あずさの術ってあんまり見たことなかったから油断しちゃった」

「フェイト姉負け惜しみ？」

「ち、ちがうよ！！」

「で、あずさ君には恋人がいるん？」

「ちっ豆狸め忘れていればいいものを（ぼそっ」

「何か言った？」

「言っていないよはやて姉ちゃん。俺にはまだ一回もそうゆうことはないけどよく相談に乗っていたんだ」

「で、何人をくつつけたの？」

「聞いて驚くなよなのはお姉ちゃん。始めてから5年で16人中14人くつつけた」

「それはすごいね。あずさ、もしかしてただでやっているの？」

「いや違うよ。条件は俺に包み隠さず結果を言うことと俺のゆうことを聴くこと。失敗した場合、くつついた場合でも半年間のアフターサービス付きでやっているよ」

「アフターサービス？」

「簡単に言うと相談に乗るってことだよ」

「……そういえば聞いたことある。管理局に人をくつつけることの上手な人がいるって」

「私もやなのはちゃん。確かその人はある一部の人しか知らないけど本当に上手くて破たんしそうになったカップルをまたくつつけたとか」

「私知らなかった」

「ねえそろそろ俺の部屋に行かない？はやて姉ちゃんも来ていいよ」

「それはおおきに」

「はやて姉ちゃんにもあとでマッサージしてあげる」

「あずさ君のマッサージ受けたときには痛いけどなんか気持ちいいんだよ」

「へえ」

「じゃあ行こうか」

♪

「あ、兄さんお帰り」

「ただいまエリオ。キャロも来てたのか」

「うん」

「キャロ、負けちゃったよ」

「え、フェイトさんが負けたんですか？」

「簡単な技にかかってね」

「じゃあちよつと人数が多いけどおやつにしようか」

「兄さん今日のおやつは何？」

「ガトーショコラだよ」

と言って机にガトーショコラを置く
大きさは普通のケーキの3倍はある
エリオがものすごく食べるからなあ
もしかしたらもっと欲しいかもしれないけどそうすると俺の給料が
なくなってしまうからな

みんなの分を切り分けていく
エリオは半分を丸ごとだ

「さぁみんなで食べましょう」

「こ、これ全部あずさ君が作ったんか？」

「そうだけど？」

「こな大きいのよく作れたなあ」

「俺のキッチンルームにはさすがにこれだけの大きさは作れないから、食堂に特別な機会を置かしてもらって朝早く作ってんだよ」

「へえ」

「もちろん置かしてもらっているからたまに差し入れしているけどね」

「ねえ兄さん早く食べよう」

「ああ、じゃあ食べましょう」

「いただきます」

「.....」

「どっ」

「おいしい！.....」

みんなが叫んで一心不乱に食べる

エリオなんていつも食べているのにこんなに叫ばなくても
まあうれしいけど

「おいキャラ、お前クリームがついてるぞ」

「えっどこ？」

「ここ」

左頬についたクリームを自分に置き換えて指差す
キャラは探してはいるがなかなかクリームは取れない

「ちょっと動くな」

「ん」

「よし、とれた。（ペロッ）」

手についたクリームをなめとる
甘い

「で、姉さん方は疲れはどんな感じですか？」

「うん、すっかりとれた。ありがとうあずさ君」

「あずさ、ありがとう」

「ありがとう〜」

これで一応一段落かな？

ほっと息をなでおろす

ちなみに、エリオの訓練に付き合っ為に模擬戦をフェイト姉とやる
ことになったのはまた今度

リマ「身も蓋もない話だったね」

あずさ「ああ」

リマ「恋愛相談の場所は私が本当にやって成功した数と失敗した数です」

あずさ「マジです」

リマ「感想コゝナゝ、月光閃火さん、ユタさん感想ありがとうございます」

あずさ「ありがとうございます」

リマ「感想待ってます!!」

あずさ「出さないとリマが泣くから出してあげてくれ」

リマ「次回は、あかりのデバイス誕生です」

あずさ「まだ完全に決まっているわけじゃないのでアイディアなどを送ってください」

リマ「ではまた次回」

番外編 私の戦い方見せてあげるお兄ちゃん？ by あかり（前書き）

リマ「……リマです…」

あずさ「……あずさです…」

リマ「……戦闘シーンが苦手です…」

あずさ「……昨日部屋で本の中に生き埋めになりました…」

リマ「……短いです…」

あずさ「……エリオに大爆笑されました…」

リマ「……では見てください…」

あずさ「で、なんで暗くなってるの？」

リマ「ん、？何となく？」

あずさ「なんで疑問形！？」

リマ「じゃあ気分」

あずさ「じゃあってなんだよ！？まあいいか」

番外編 私の戦い方見せてあげるお兄ちゃん？ byあかり

がちゃがちゃ

「ここをこうしてつと、これでいいですか？シャーリーさん」

「そうそうって私よりもうまいんじゃない？」

「そんなことないですよ。俺なんてまだまだです」

「でも楽器の形のデバイスなんて私作れないよ」

「練習すれば作れますよ」

「早くにあかりちゃんに渡して来たら？」

「そうですね。行ってきます」

デバイスルームから出ていく

あかりのデバイスを片手に

デバイスの待機中の姿は俺と同じリングの形をしている

しばらく歩いているとあかりがほかのFW陣達と話しているのが見えた

「あかり」

「あ、お兄ちゃんどうしたの？」

「お前のデバイスができたから持ってきたんだよ」

「ほんとっ!!」

デバイスをあかりにわたす

「これにはまだ名前がないから自分でつけてやれ」

するとデバイスが話し出した

（私はデバイス。名前はまだない）

「何かのパクリ!？」

「あかり名前を付ける」

「うん、名前は……じゃあ『ヴォルテ』」

「ヴォルテ？」

「うん、なんとなく」

「さっさと起動させろ」

「あ、うん。ヴォルテ、セットアップ!!」

起動させるとヴォルテがヴァイオリンの姿になった
バリアジャケットは俺のと似ている

「すっくい」

「これ、あんたが作ったの？」

「すごいよ。お兄ちゃん」

「あかりさんがヴァイオリンを使えるなんて」

「うっん、まあ小さいころからやっているからねエリオ君」

「そのバリアジャケットはあずさのに似ているわね」

「まあなこれは結構動きやすくなっているしな。ティア」

「ほぼ俺のを似せたし……ていうか俺ってパターンしか作れないんだよな」

「あと氷の補正も付けたからやりやすいと思うぞ」

「ほんと？じゃあえつとアクセルシューター」

スフィアを40個出す

いやいややりすぎだろっ

いくらなんでも無理だ

「お前無理しすぎだろっ」

「え、大丈夫だけど」

「いや、無理だろっ」

「だいじょうぶだって！」

「無理だって言っているだろう！」

「大丈夫!!」

「無理!!」

「大丈夫!!!」

「無理!!!」

「大じょ……………」

「ちょっとストップ!!」

なんだよティア

俺が無理って言うてるからあかりには無理なのに!!

「あんたシスコンすぎ!!少しは見てみなさいよ!!あかりちゃん
のスフィアは一つ一つの魔力量が空気みたいに少ないからいくらで
も出せるわよ」

「えっ？」

本当だ。よく見ると形を魔力で作っただけだった
これなら魔力は全然いらな

「わかった?お兄ちゃん!!」

「おう、ごめんな。でも実践ではどうするんだ。そんなの使えない

だろ」

「そんなの私の戦い方知らないから言えるんだよ。お兄ちゃん、戦ってみる？」

「いいな。デバイスがどんな感じかみたいし」

「じゃあ今からやろう!!」

「おう!!」

♪

ここは訓練場

この前フェイト姉と戦った場所だ

俺とあかり以外の六課の人たちがなにごとかと見に来る
なぜか知らないがはやて姉ちゃんまでいた

「フルーテやるからには負けないぞ」

（そうですね。お兄さんとしていいところを見せましょう）

「ヴォルテ、私の力わかってるよね」

（はい、大丈夫です）

「じゃあやるか」

「うん」

「審判はなのはお姉ちゃんにお願いしたから」

ルールはこの前のフェイト姉と同じだ

「フルーテ（ヴォルテ）セットアップ！」

「へえ、あかりさんのデバイスは薙刀にもなるんだ」

キヤロが呟いている

あかりは昔から護身術として薙刀を使っていたから入れてみたんだ
った

あかりがスフィアを出す

俺もスフィアを15個出した

まずは様子見た

「アクセセルシュート」

「こんなの普通によけられる！」

軽くかわしていく

避けられないものは俺のスフィアで相殺する

「お兄ちゃんそろそろきつくなってきたんじゃない？」

「さ、さすがにこれだけの量をよけていたらな……くっシールド。
これは！」

耐え切れなくなりシールドをとっさに張るが防いだスフィアには魔
力がなかった

とっさにあかりのいるほうを見るともうあかりはいなくなっている

「このスフィアははったりか？ いや、しっかり魔力が入っているのもある。わかりにくいな」

よけていくがよけられないのはシールドで防ぐ

このままだといくらこっちが魔力があっても先になくなってしまふ

「これははったり……ぐはっ。はったりじゃない？ いや、はったりの裏にあつたのか」

うざい。やりにくい。このままだとあかりに負けてしまふしょうがない接近戦で戦うか

でもあかりの場所がわからないことには意味がない

さっきから探そうとするが全部途中で落とされてしまふ

……だったら

「フルーテ、ブレードシステム解除」

（わかりました）

「……いくぞ、武闘曲2番 荒れ狂う波」

俺を軸として水を発生させ、スフィアを飲み込む

「これ待っていたんだお兄ちゃん」

「あかり！？」

「ヴォルテいくよ！！フリーズスター」

突如あかりが物陰から出てきて波に向かって氷を放つ
当たったところから凍り始め星の形を作り始める
できたものから俺に向かって飛んでくる

「くそっ」

「お兄ちゃんの水はすべて私のものになる！！これで決める、流星
群！！」

星が一気に俺に向かって飛んでくる
俺もシールドを張るが徐々に押され始める
……強いなでもまだだ、あかりは魔法を精密には操れていない。なら

「ウォーターシールド」

「お兄ちゃんってバカ？……え？きゃあああ」

俺のシールドをまた凍らせて俺に向かって作り始める
それを放ってくるが俺が軽くかわす
そのまま一直線に氷が飛んでいく
飛んで行った先にはあかりが……
まあこれで俺の勝ちになるだろう
助けに行くか

「これで俺の勝ち、だ？……え？バインド？」

「かかったねお兄ちゃん」

「ま、まで！！卑怯だぞ！！うわーーーー」

俺が助けに行つたところに設置型のバインドが仕掛けられていた
そのため俺は防ぐことも攻撃することもできない
だから食らってしまうしかない

何とか顔に当たりそうなのはよけるがよけきれずにかすって血が出る

「これで私の勝ちかな？」

「何言つてんだよあかり。誰が負けたといった？」

「え？でもこのままじゃお兄ちゃんぼろぼろになるよ？」

「一つ言つとくとなあ俺の魔力変換資質は水、だから俺は液体を操
るのが得意なんだ」

「だから？」

「俺からは血が出ている。この血をお前の後ろに仕掛けておいた」

「え？ほ、ほんとだ！！アクセルシューター！！」

あかりがスファイアで落とす

そのおかげで俺のバインドが解けた

「これで俺の勝ちだな」

「まだまだ！！アクセル！！」

「ちっ！！」

スフィアをかわす

何？ここにも罠が！？今度は爆弾か？俺のよける場所がわかってる？
だったら今度は場所がわかってるから接近戦で行くか

「行くぜフルーテ！！武闘曲1番 津波！！」

俺の後ろから波が大量に出る

それに乗るようにして体をあかりのほうへと行く

「な、なにこれ？私のトラップが効かない！？」

「これでもまだやる？」

あかりの首に魔法刃を突きつける

あかりも負けを認めた

♪

「まさかあかりがトラップ使いたったとは」

「それは私には魔力がないし、細かい制御もできないから最初から
設置しておこうと思って」

「あかりちゃんってすごいんだね」

「私とスバルともあまり魔力量はあまり変わらないのにね」

「そんなことないですよー私なんてティアナさんみたいに射撃上手
じゃありませんしスバルさんみたいに接近戦が強いわけじゃないで
すから」

「なんでさっきのあずさの水を凍らせなかったの？」

「それはあそこで凍らせていたらお兄ちゃんの思うつぼだからですよ」

「どうゆうことよ？」

「それはな、俺の水が凍らされたらそのまま滑ってあかりのところまで行けばいいからだよ」

「そんな理由！？」

「俺たちの家訓は『なにことも簡単が一番』だからな」

「うん」

「……意味わからない」「……」

「エリオとキャロまで！？いつも訓練の時に言ってるのに！！」

「意味が分からないんだよお兄ちゃん」

まあどうでもいいか

姉ちゃんが勝手に作った家訓だし、それほど考えていないしこれであかりの強さもわかったしデバイスには異常がないからいいか

番外編 私の戦い方見せてあげるお兄ちゃん？ byあかり（後書き）

リマ「いきなり感想コナ」

あずさ「ユタさん、月光閃火さん、マーボーさん感想ありがとうございます」

リマ「ありがとうございます」

あずさ「次回は？」

リマ「アグスタ編へいこうと思います」

あずさ「やつとか」

リマ「べ、別に次も見てほしいとか思ってたんかいなんだからね
！！」

あずさ「またツンデレ！？」

リマ「違います！私にはデレは1%もありません！！」

あずさ「まさかのツンだけ！？」

リマ「でも、次も見てくれるとうれしいな」

あずさ「デレはないんじゃないの？」

リマ「デレじゃなくてお願いだからいいんだもん！！」

あずさ「……もうしらね!!」

リマ「ではまた次回なんだからね!!」

あずさ「また次回お会いしましょう」

第十二話 私だけ……

b y ティアナ（前書き）

リマ「今回も短い!!」

あずさ「短すぎだわ!!」

リマ「あかりちゃんができません!!」

あずさ「あいつは番外編だけでいいわ!!」

リマ「まだロリコン疑惑が晴れないから怒るあずさ!!」

あずさ「それが!？」

リマ「新技が出ます!!」

あずさ「マジか!？」

リマ「ではどうぞ!!」

あずさ「テンション高すぎだわ!!」

第十二話 私だけ……

b y ティアナ

「ホテルアグスタか？」

「そう、そこでオークションが開かれるらしいのよ」

なんでもロストログアがあるかもしれないらしい
その中にレリックがあるかもしれないらしい

「それで俺はどうすればいいんだ？あかりは？」

「F W 陣で外の警護。あかりちゃんはロングアーチでサポート」

あかりは頭がいいからな

まあ戦いに直接出ないなら安心だな

それよりもティアの方が気になる

なんか様子がおかしい

一度聞いてみたが何でもないといわれてしまった

「おいティア。お前やっぱり変だぞ」

「何でもないって言っているでしょー!!」

（あずさにはわからない。この中で私だけが凡人だっていうことを……
……そういえばあいつ訓練校にいたときはそんなでもなかったよう
な……いやあのときから高かったか）

「そんなことよりさっさと配置につくわよー!!」

「あ、ああ。……（大丈夫じゃないだろう。一応気にかけておくか）」

まあ何もないといいんだが

……そういえばあかりは大丈夫か？まだ慣れていないから一応心配だな

……この思考がシスコンといわれる理由かも。いや、でも、そんなことはないな。うん。

「みんな来るわよ！！気を引き締めて！！」

「「はい」「」」

「……わかったよ。くれぐれもみんな無理するなよ」

ティアに向かって言うておく
みんなってことにして

（フルーテ準備OK？）

（無理です）

（……………）

（……………）

（……………え？）

（だから無理です）

（嘘だよな？）

（マジで嘘ですー！！）

（意味わかんないからー！！）

（まああずさんの命令だから一応準備しますよ）

（お前、あかりに引っ張りまわされてから反抗的だな）

（決してあずさんがロリコンだとかシスコンなのに自分では認めないからではありませんよ）

（……………）

（……………）

（……………早くセツトアップしろ）

（……………）

（……………早くー！！）

（……………わかりました）

そんなやり取りをしているとキャラ口から連絡があった

「遠隔召喚来ますー！！」

「フルーテ行くぞ……………交響曲第42番 泥沼地獄」

静かな音色が奏でられる
あたりが泥沼化とする

「ちょっとあずさ！！動きづらいじゃない！！」

「お前はあまり動かないだろ。スバルには自分で道を作ればいいし
エリオはスピードがあるから大丈夫だろ」

「だからってガジェットは飛べるのよ！！」

「……え？」

「だから飛べるの！！」

「それは飛行型だけだろ」

「そういう意味じゃなくて浮いてるって言ったほうがいい？」

「そうだった……じゃあ意味ない？」

「逆に不利になったじゃない！！戻しなさい」

「戻せねえよ。改善策は……武闘曲 疾風迅雷」

テンポの速い曲を奏でる

「動きを早くしとけばまあ大丈夫だろ」

「そうだけど……（何でもアリね。やっぱりこいつは凡人じゃない）

」

とにかく奏でまくる

これは結構魔力を使うから集中しなくてはならない
吹いている間は動けない

「きゃあああああああああ！！！！！！」

吹いていると悲鳴が聞こえた

あわてて目を開くとティアの放った魔力弾がスバルへと向かって行
っている

これはまずい

スバルもいきなりで動けない
だったら

（フルーテ、あのシステムを使うぞ）

（大丈夫ですか？）

（急いで！！）

（OK。……システム）

あずさのバリアジャケットが一瞬で黒く染まる
手には何も持っていない
みんなあずさのことなど見ていない

「フルーテ……スバルを助けるからあれをしろ」

（わかりました。シャドーウォーター）

あずさの後ろから膨大な量の水が出てものすごいスピードでスバルのところへ行く

ぎりぎり間に合う!!

「まにあった……かな？」

ずどんっ!!

あずさの背中に魔力弾が当たる

あずさがシステムを切り替えてからここまでの時間わずか2.9秒

よける暇もシールドを張る時間もなくもろ身体に当たる

……しかもバリアジャケットがない状態で

俺は落ちて行った

第十二話 私だけ……

b y ティアナ（後書き）

リマ「死んでしまったあずさ！どうなるのか！！」

あずさ「俺死んだの！？ねえ！？」

リマ「あずさが死んでしまったので今回は新主人公のあかりちゃんにきてもらいました！」

あずさ「今新主人公でいったよ！？なんで！？本当に死んだの！？」

あかり「ここでは始めまして、新主人公の柊 あかりです」

あずさ「俺のこと無視！？」

リマ「あかりちゃんのプロフィール教えてよ」

あかり「プロフィールですか？どうぞ」

紙を渡す

名前

柊

朱理^{あかり}

魔力量

B

魔力光

白（白銀）

デバイス

ヴォルテ

役職

新主人公

以上

リマ「ありがとうあかりちゃん」

あかり「いえいえ別にいいですよ」

あずさ「何このプロフィール！？容姿無いじゃん！？それに役職って！？新主人公って！？」

リマ「では感想コナ」

あかり「わっぱちぱち」

あずさ「こいつ今拍手を口で言っただよ！？」

リマ「ユタさん、月光閃火さん、マーボーさん、三浦一平さんありがとうございました！！」

あかり「ありがとうございました！！」

リマ「今回は、死んだあずさがどうなったかのお話です」

あずさ「死んだら死んだで終わりだろ！？」

あかり「楽しみです」

リマ「ではさようなら」

あずな「軽っ!」

第十三話 それは間違っている!! by あずさ(前書き)

リマ「更新遅くなってすみません」

あずさ「何で遅れたんだよ!!」

リマ「いやゝモン。ンを友達に勧められて買ってはまってました!!」

あずさ「何その最低な理屈!!」

リマ「べ、別にク。ペッコに苦戦していたんじゃないんだからね!!」

あずさ「弱!!お前弱!!」

リマ「じゃゝじゃあどつぞ〜」

それは間違っている！！ byあずさ

怖い――――隠れなきや――――お母さん！？――――

そつだこれを渡せば――お父さん！！！！？？？――

「……うわああああ！……お、お父さん！？大丈夫！？……ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい！」

[illegible]

いごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
いごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
いごめんなさいごめんなさいごめんなさい

誰かがずっとあやまっている

ああ、あれは昔の僕だ

あんなに謝っていたんだな

あの後姉ちゃんが来てくれなかったらもう僕は壊れていたな

場面が変わった

「あずさ、あずさ、大丈夫!？」

……大丈夫だ、よフェイト姉

「ごめんね、ごめんねあずさ!！」

……そんなに謝らない、で

「あずさ?あずさ?あずさあああ!！」

……大丈夫だ、って、ば…あれ、なんかフェイト姉が遠い…よ

また場面が変わる

僕が一人佇んでいる。手に持ったデバイスはぼろぼろに壊れている
あたりが血で染まって

周りに倒れている人は全員ミイラのようなようだった

僕は突然笑い出した

[illegible]

その顔には一粒の涙がしたる
しかし表情は笑顔だった

狂ったように

「あははははははははははははははははは」

（そうだ、あの時から僕は壊れた。魔力が少ないのを呪った。そして心に決めたんだ。大切な人を守ると）

（だから戻らないと。みんなのいる場所へ）

（私のせいであずさがあずさが！！）

ティアナは医務室であずさを看病していた
あずさが撃ち落されてから一命を取り留めたものの植物状態になっ
ても仕方がない状態だった

(このまま起きなかつたらどうしよう)

（もし容体が悪化して死んでしまったら）

「あは、あははははははははははは」

(! ?)

いきなりあずさが狂ったように笑い出した
目もあけていないのに

「あはははははははははははははははは」

「じゃ、シャマル先生！！あずさが」

「わかってるわ。ちよつとどいて」

あずさの前に立つ

あずさの目をこじ開けて光で当てる

「瞳孔が開いてる……ん？あれ、元に戻った」

「あれ？シャーちゃんどうしたの？ティアモ」

(シャーちゃん?)

「あずさ君大丈夫？」

「大丈夫だよシャーちゃん僕はいつも通り」

「あんたが大丈夫ならいいわ。私は訓練にいつてくるわね」

医務室をティアが出ていく

「何で来たんだあいつ？」

「あずさ君のことが心配なのよ」

「まあいいや」

「ふふっ」

シャルがいきなり笑う

「何？シャーちゃん」

「そのシャーちゃんって懐かしいわね」

「あ、そうか」

いままで呼んだことはない
子供のころ呼んだだけだ

「あと一週間はここで寝ててね」

「はい」

- - - - -

この後キャラやエリオが来たりして一悶着あったがそれはまた今度

「そつといえば今日は模擬戦の日か」

「そうだね。行ってらっしゃい」

「ありがとうシャーちゃん」

「それでも無理をしちゃだめよ」

「わかってる」

すぐに訓練場に行く

あ、もうティアたちがはじめちゃってる
フェイト姉のところにも行くか

「フェイト姉」

「あ、あずさ。もう大丈夫なの？」

「大丈夫だよ。あれ？なんか動きおかしくない」

「そうだよな。確かに二人の動きがおかしいよな」

「ヴィーちゃんも思った？なんかなのはお姉ちゃんも気づいてはい
ると思うけど」

「あ、なのはお姉ちゃんが切られてる……ってなにB」といてんの
！？」

「切れてるんじゃない」

「！？あれは危ない！！なんか間違ってるよその教え方」

(フルーテ、間に入るぞ)

(はい)

なのはの砲撃に割って入る

「何やってんのかなあずさ君？」

「それは間違っているよ!!」

「うるさい!!どいて!!」

「なんで?なんでそんな力をぶつけるやり方なのさ!!」

「だって言っても仕方がないでしょだったら力づくでしか!!」

「くそっ」

なのはがアクセルシューターを放ってくる

僕はシールドを張らずにうける

後ろに行かないように

「だからダメだって!!頭冷やせよ」

「冷えてるよ!!」

「冷えてないってば!!」

「あずさ君もわかってくれないなんて!!だったら」

なのはがディバインバスターをはなつ
とつさにシールドを張るがすぐに消える

「あずさ大丈夫!!」

「……………」

フェイトがとつさに叫ぶがあずさからの返事はない

「おいフェイト」

「あれ？クロノ？」

「僕にも見せてくれよ」

「模擬戦？」

「ああ、フェイトたちの生徒がどうなっているのか見てみたくな」

「あゝでも今結構ヤバいんだよね……………」

「え？」

クロノが見るとまだ煙が晴れていない場所を見る

「いま、あずさがなのはに……………」

「うたれたのか？」

「なのはがなんか壊れちゃって」

「こ、こわいな。世界で二番目に」

「二番目？」

「一番はあずさの……」

「……フルーテ、アサシンシステム」

「えっ!!」

煙が晴れて現れたのは黒く全身を包んだあずさだった

「あ、あああ、あれは」

「あれってあずさの新モード？」

「そんなのんきに言っている場合か。あれは、あれは」

「「あれは？」」

「あずさの最悪なモードだ」

「え？」

「はつきし言つとあずさの壊れていた時期のモードだ」

「壊れていた？」

「ああ、あれは止めないとなのはが最悪死ぬぞ」

「「「えっ！！」」」

「あずさが人を殺すときに使ったシステム。あれは本当に危険だ」

クロノがそこまで言ったところであずさが動き出した

第十三話 それは間違っている！！ by あずさ（後書き）

リマ「と、いうことで感想コナ。ユタさん、三浦一平さん、イツキさんありがとございま〜す（早口で）」

あずさ「どういうことだよ！！」

リマ「……最初のあれ鬱だったね」

あずさ「し、仕方がないだろ！！」

リマ「本当にあんなに言っただの？」

あずさ「悪いかよ」

リマ「ふ〜ん」

あずさ「何そのどうでもいいような態度！！」

リマ「だってどうでもいいも〜ん」

あずさ「お前この頃ひどくねえ！？」

リマ「役を取られた時からかな？？」

あずさ「まだ根に持っていたの！？」

リマ「とにかく次回予告」

あずさ「お前うざっ!!」

リマ「あずさの新モードによりどうなるのは!!そしてあずさは壊れてしまったのか!?そして全米が泣いた!!あずさの悲劇カミングスーン!!」

あずさ「何その映画の言い方!!全米泣いてねえし!!」

リマ「ではまた次回!!」

あずさ「え〜!!?」

第十四話 私の出番…… by あかり（前書き）

リマ「この頃更新遅れてすいません!!」

あずさ「学校始まったんだろ」

リマ「とっくにね」

あずさ「何かいきず待っていることがあるとか……」

リマ「……べ、別に勉強についていけないなんてことはないんだからね」

あずさ「……ついていけないんだ」

リマ「う、うるさいうるさい!!」

あずさ「大丈夫か？」

リマ「あずさになんか心配されたくない!!」

あずさ「し、心配なんてしてねえよ」

リマ「うそつけ」

あずさ「ふざけてなんかねえよ!!」

リマ「じょ、女子に向かってひどい!!」

あずさ「お前を女と思ったことは一度もない!!」

リマ「ひ、ひどい」

ぽかぽか、えい、やあ!!この〜!!

や、やたっなあ〜!!がすがす、とりや!!ぐりぐり

あかり「二人がけんかを始めちゃったので本編どうぞ」

リマ&あずさ「役とられた〜!!」

第十四話 私の出番…… by あかり

「……フルーテ、アサシンシステム」

俺は病み上がりの身体でなのはお姉ちゃんから攻撃を受けた
なのお姉ちゃんの間違いを正そうと思って説得してただけなの
に……

アクセルシューターなら何とか防げたのにあるうことかなのはお姉
ちゃんはディバインバスターを使ってきた
さすがの俺もあの魔力には耐えきれない

魔力を食らった時俺の中で何かが切れる音がした

――――

「ね、ねえクロノ。あずさがなのはを殺すなんてありえないよ」

「あの時のあずさは正気がないから……」

「え？」

「だからあずさを止めなくちゃいけないんだ。僕たちの力で」

「どうやるんですか？」

「まずは君たちFW陣で攪乱してくれそして僕たちが……」

その瞬間あずさが動き始めた

「……ソニックムーブ」

魔力の光があずさの後ろについていく
そのスピードはフェイトの非ではない

「速すぎる!!」

「あの姿私見たことがあります!!」

「……高町なのは……お前、殺すよ……!!」

ものすごい殺気があずさから吹き出す

直後物陰に隠れる

そして声を発する

「あずさ君?どうしたのかなあ?なんでデイベインバスターを食らったのに立っていられるの?あずさ君の魔力じゃ止められないはずなのに!!まだ私たちに隠していることがあるんでしょう!!」

「高町なのは19歳性別、女、一時期大けがを負って前線から離脱……現在は教導隊から機動六課へと勤務。優しく相手にあつた教育をしていくが自分の意思に合わない行動をした場合武力をもって構成させようとする」

「何である事件を!?……しょ、しょうがないでしょ。聞いてくれないんだから!!」

「……そんなことはまあいいや。とにかく僕には関係ない……今は

あんたを殺すだけだ」

「できるの？あずさ君みたいな凡人に！！」

「凡人？……それはあんたみたいのより上の存在だと思うけど。あんたみたいなバカよりは！！」

「ど、どういうこと！！」

「……いったとおりだ、よ」

物陰から飛出しなのはにダガー状のものを投げる
なのはもとつさにシールドを張るがシールドを貫通して脇腹をえぐる

「！！質量兵器？」

「違法だよ！！」

「フェイトあいつは昔から許可を取っているから違法ではないんだ」

「だからってシールドを壊すほどの威力があるなんて」

「あれは周りは鉄いや……それ以上の強度だが中は空洞だ」

「え？」

「あれは隠れている間にとても濃い魔力を練りに練ってとても強度にした魔力を中に込めているんだ……その威力は約S-」

「そ、そんなに！！」

「あれは結構時間がかかるけどその代りにとてつもない威力だ」

「あ、危なくない？」

「だから止めなくちゃいけないんだ」

「でもあんなに速いあずさをどうやって……」

「そこが問題なんだよな」

あずさがまた動き出す

なのはの前に出てきて忍者刀を二刀流にして切りかかる

「っ!!」

「……死ね!!」

「危ない!!」

フェイトが割って入るがその攻撃を受け止めることができなかった
いや、攻撃がなかった

「え!!??」

「……幻想行進曲8番 うつしみ 現身」

周りにソニクムーブで移動している5人あずさの姿が出てきた

「幻？」

「……フェイト姉も邪魔するの？」

「うっん。そんなんじゃない！！ただあずさがなのはを殺すのは間違っている！！」

「……え？間違ってる？なにが？たたかうことが？だったらこれは戦いじゃない。これは一方的な殺人だ！！」

「あずさの守りたいものはわ、わたしたちじゃないの！？だったらなんで記憶を消したの？ねえ！！」

「……あつそ。記憶を消したのは気まぐれ。守りたいのは毎回変わるそれにもう終わりだ！」

「あ、ああああああ」

「な、なのは！？」

なのはの切られたところから血が噴き出すさつきまで魔力で止血していたはずなのに

「僕は水を操る。その過程ですべての液体を操れるようになった。だったら人の血液も操れる。」

「そんなことありえない！！一人ひとり血液は違う！！」

「だから血液をさつきとつたんだよ」

いつの間にか一人になった

あずさの手にはダガーが握られている
さっきなのはをえぐったものが

「お兄ちゃんやめて!!」

「やめてよ兄さん!!」

「……エリオ、キャロ」

「「やめて!!」」

あずさの顔がゆがむ

「いまだ!!」

クロノが後ろからあずさを打った
あずさは何やら笑顔になって意識を失った

第十四話 私の出番…… by あかり（後書き）

とあるモニタールーム

リマ「えゝただ今あずさが切れましたああああ!!」

あかり「お兄ちゃんが隠れます!!」

リマ「なのはさん手が出ない!!」

あかり「フェイトさんたちもたじたじです!!」

リマ「おおつとあずさダガーを取り出した――!!」

あかり「いままでずっと魔力を練っていたようです!!」

リマ「地味だ!!地味すぎる!!アサシンにありまじき行為!!」

あかり「アサシンって言ったら即座に殺さなきゃダメだね」

リマ「この攻撃はs - はあるでしょうか!!なのはさんのシールドも貫通したあ!!」

あかり「これは痛そうだ!!お兄ちゃんも容赦ない!!」

リマ「切れてるからねえ」

あかり「切れてますからねえ」

リマ「あずさがまた攻撃しに行く!!」

あかり「おおっとフェイトさん乱入!!」

リマ「なにごとか訴えています!!」

あかり「お兄ちゃんがなんか気取っています!!」

リマ「変なの」

あかり「なのはさんの血液が!!」

リマ「何やってんのあずさのばかは」

あかり「お兄ちゃんはバカじゃない!!」

リマ「……ごめんあかりちゃん」

あかり「い、いえ」

リマ「あ、あずさが撃ち落された」

あかり「お、お兄ちゃん」

リマ「さておわったから感想コナ。イツキさん、三浦一平さん、マーボーさん感想ありがとうございます」

あずさ「三浦一平さんからは一騎特性ケーキをいただきました!!」

あかり「お兄ちゃんいつの間に!!……もぐもぐ」

あずさ「ついさっきだけど……って何食べてんだよ!」

リマ「勝手に来ないでほしいよね……もぐもぐ」

あかり「まったくだね……もぐもぐ」

あずさ「二人で勝手に食うなあ……!……ってもう半分も!」

リマ「まあまあ落ち着いて。次回予告です。……今回はなし!」

あずさ&あかり「はあ……!」

リマ「うそですうそです。今回は少し遅いけどヴァレンタインデーのお話です。まあ番外編ってことです」

あずさ「なんか流暢だなおい!」

あかり「ていうかヴァレンタインデーでいいんじゃない?」

リマ「いやいやヴァレンタインデーでしょ」

あかり「ヴァレンタインデーだよ」

あずさ「どっち?」

リマ「わからなくなってきた」

あかり「私も」

リマ「まあいいや。あずさ、はい」

あずさ「ん？チヨコ？」

リマ「まあ私は次でないから」

あずさ「さ、サンキュー」

リマ「一応手作りだよ」

あずさ「なんか怖いな…」

リマ「大丈夫だって。味見したし。あ、あと本命じゃないから」

あずさ「そ、そんなはつきし言わなくてもわかってるっての！！でもいつもみたいにツンデレで渡してほしかったり…」

あかり「おゝにゝいゝちゃん！！」

あずさ「う、嘘だよ！！」

リマ「あんたなんか本命は渡さないっての！！ではまた次回」

あかり「次回は私が活躍します！！」

あずさ「この頃出てきてないし今回の題名も……な」

あかり「……う、うえーーーーん！！」

番外編 やつと私のターン b y あかり（前書き）

リマ「遅くなってすみません!!では本編どうぞ!!」

あずさ「はやっ」

番外編 やつと私のターン by あかり

ふふふん っふん

「明日はバレンタインデー っお兄ちゃんにチョコあげる っ」

「お、あかりちゃんもチョコ作ってんの？」

「あ、食堂のおばさん。はい、明日はバレンタインデーなので」

「ほどほどにしときなさいよ。もう夜遅いんだから」

「はい」

ふふふん っふん

「あ、ティアナさん」

「あら、あかりちゃんじゃない。どうしたの？」

「お兄ちゃんにチョコ作ってみたんですがおいしいかわからなくて
…」

「私に毒見させようっていうことね」

「そういつつもりでは…」

「まあいいわ。どれを食べればいいの？」

「えっと…これを」

私は手に持ったチョコの入った箱をティアナさんに渡す

「こ、こんなに!？」

「はい!…どれが一番おいしいのかわからないので」

箱の中には様々な味のチョコが入っている

ビターにミルクにストロベリー、ミント…etc

「さすがにこんなには私も食べられないわ」

「じゃあスバルさんをお願いします」

「それは無理ね。あいつは味なんて気にせず食べちゃうから」

「そ、そんな」

じゃあダレにお願いしよう…エリオ君にはあげるから駄目だし…どうしよう

「私とキャラで食べるわ」

「あ、それはダメです」

「なんで?」

だって私とキャラちゃんで作ったものだから

「これ、私とキャラちゃんの共同作なんです」

「わかったわよ…一人で食べるわ」

…計画通り（にやり

「あかりちゃんなんか言わなかった？」

「何も言っていないですよ（にぱ」

この中の一つに睡眠薬が入っているなんていわないもん

「そういえばティアナさんは誰かにあげる予定はないんですか？」

「そうねえ、やっぱり義理だけとあんたの兄さんにあげるくらいかね」

やっぱりお兄ちゃんにあげるんだ…
そんなことはさせない！！

…あ、言っとくけど私は決してブラコンじゃありません！！お兄ちゃんが大好きなだけです！！

「……これは、イチゴね。うんこれもおいしいわよ」

「ほんとですか？だったらうれしいです」

「あかりちゃん、料理上手いじゃない」

「いえいえ、私はお菓子だけですよ。ご飯はお兄ちゃんとお姉ちゃん
んが作っちゃって私につくらせてくれなかったの」

「へえ、あいつが料理ねえ……あのへんなチーズ牛乳というのしか
知らないからてつきり下手なのかと思っっていたわ」

「……あれですね……私もあれだけはわかりません……でもなぜか
キヤロちゃんは好きなんですよね」

「あれは、いろいろと事情があるみたいよ」

「なんか濃厚すぎてのどに引っかかるんですよね」

「うんうん。わかるわ……る」

あ、そろそろ効いてきたかな

お兄ちゃんに義理と言って本命を上げようとする人にはお兄ちゃん
は渡さない！！

「ごめん、あかりちゃんなんか眠くなつてきちゃったわ。ごめんな
さいあとで食べるからここに置いておいてくれるかしら」

「あ、すみませんもう夜中でもんね。手伝っていただいてありが
とうございました。あとは自分で決めますから大丈夫です」

「そう……じゃあおやすみ……」

「おやすみなさ……い」

これで一人

あとは……スバルさんはあげるより貰うほうだから大丈夫でしょ
キヤロちゃんはお兄ちゃんのこと好きだけど恋愛ってわけじゃないから別にいいでしょ

はやてさんたちは……ねらうか、フェイトさんとなのはさん、守護騎士？さんたちも

ふふふん♪ふん♪

「どこかなあゝ皆さんは」

「あれ？あかりじゃないか」

「お、お兄ちゃん！！どしたの？」

「何テンパっているんだ？ちょっとした自主練してたんだよ」

「……お疲れ様です」

「ん、でどうしたんだ？」

「い、いや何でもない」

「そうか、だったら久しぶりにヴァイオリンとフルートであわさな
いか？」

「ふえ！？いやいやいや、いいよ！！私今からお風呂に入るから」

「そうか、あからさまに否定されると泣けてくるんだけど……」

「べ、別に嫌いってわけじゃないからね！！むしろ私はお兄ちゃんのこと大好きだし」

「……お風呂入ってこい。おやすみ」

「流された！！私泣いちゃうよ！！もう涙で作ったお風呂に入っちゃうから」

「なんだよそれ」

「ふん、お休み！！」

「お、おう」

お兄ちゃんなんて知らないもん！！もうお風呂じゃなくてシャワーでいいや！！

「ってなんでお兄ちゃんもついてくるの！！」

「いやシャワー浴びようと思って。お前こそなんでこっちに来るんだよ。風呂は自分の部屋だろ女子寮に行けよ」

「シャワーで済ましちゃうおうと思って。悪い！！」

あ、つい声あらあげちゃった

「別に悪いなんて言ってないよ」

「じゃあここで、じゃあね！！」

「あ、ああ」

シャワー室でわかる

あゝあお兄ちゃんについて怒っちゃった

明日バレンタインデーなのにどうしよう

ま、いいか。なにことも簡単が一番だもんね。朝適当に渡しちやえ
ばいつか

ふふふん っ ふふん っ

なんか忘れてる気がするけど…… まあいいや
よし、今から渡しに行くぞー！！

どこかなゝお兄ちゃんは

あ、チョコはお兄ちゃんの好きなチーズ味にしました！！

みつけたゝお兄ちゃん食堂で朝ご飯を食べている途中みたい

「あれ？何であんなに包みが？……あー！！」

わすれてたー……………

はやてさんたちのことわすれてた……………！！！！！！！！！！

ま、まあいいや。わたしもあげにいく

「お、お兄ちゃん？」

「もぐもぐ……ん？あかりか。おはよう」

「おはよう。これ、昨日はごめんね」

「別に気にしてないから……これってチョコか？」

「うん！！お兄ちゃんの好きなチーズ味にしてみました」

「ふうんありがとう」

「ところで他に誰からもらったのかな？かな？」

「ん？あ、ああ、姉ちゃん、Sからとヴィーちゃんとか前の部隊の人たちからかな」

「で、本命はあるのかな？かな？」

「あ、あかり？なんか目が怖いぞ…本命なんてねえよ」

「……本当に？」

「じゃあなんで手紙まで着いたハート形のチョコがあるのかなあ
それに大好きですって言われてさっき渡されてなかった？」

「ほ、本当に」

「嘘だっ！！」

「いや、そのネタは……」

「はやてさんは黙ってて!!どっからわいたんですか!!」

「人をゴキブリみたいに言うなや!!」

「……ゴキブリっていうより狸ですけどね」

「うつさいわ!!それにあずさ君半泣きやで」

「……え?」

あ、なんか食堂のすみで小さくなって震えてる
これだったらバッグの中に入れられそうだけど

「あかり、俺がいない間に何があったんだ……前はとてもかわいかったのに(ぶつぶつ)」

なんかかわいそうになってきたな

「ご、ごめんお兄ちゃん。私が悪かったよ」

「ぶるぶる」

「じゃ、じゃあ私行くね!!」

さっさと帰ろう

ふふふん♪ふふん♪

「あゝかりゝちゃん？」

「あれ？なんですかティアナさん」

「どうしてくれんのよあのチョコに睡眠薬入れたでしょう」

「？何のことですか？」

「私今の今まで眠ちやつたじゃない」

「私やっていないですよ」

「おかげで夜中の鍛錬ができなかったでしょ！！」

え、そっち？バレンタインデーじゃなくて？

「鍛錬ですか？」

「そうよ、一昨日に続き昨日も寝ちやつて起きたら明け方だし！」

「うゝ、ごめんなさい」

こ、これは本気の目だ

ごめんなさい、私が間違っていたわ

お兄ちゃんより鍛錬だなんて

「まあいいわ。この頃疲れてたかもしれないし」

「そ、そうですね」

「じゃあね」

「はい」

まあお兄ちゃんに渡せたからいつか

番外編 やつと私のターン by あかり（後書き）

リマ「すみません感想コゝナ」

あずさ「意味わからない!!」

リマ「このごろテスト勉強で……イツキさん、月光閃火さん、三浦一平さん、マーボーさん感想ありがとうございます」

あずさ「次回は本編だよな!!」

リマ「はい。そうです」

あかり「あ、私はヤンデレじゃありませんから」

リマ「今度は早くにかけると思いますのでよろしくお願いします!!」

第十五話

え？短い？……すみません

byリマ

「あれ……また気を失ったのか……」

あずさが目が覚めますとそこは医務室だった

「お兄ちゃん！？目を覚ましたの？」

「あかりか？」

「それ以外に誰がいるの？お兄ちゃんのこと好きな妹だよ」

……それは聞かなくてもよかった

「あれ？お兄ちゃん何渋い顔しているの？女性みたいな顔で渋い顔しても似合わないよ」

「女顔っていうな！！」

「え？なんで？」

「……いいよ。あかりには負けました」

昔からあかりとの口論では勝てない。

何でも自分が悪いとはわかっていないらしい

俺のしつけが悪かったのか？

「今何日だった？」

「そんなにたつてないよ。お兄ちゃんが切れてから3時間しかたつてないもん」

「切れてからって俺は切れてないけど」

「いや、切れてたでしょ。今日、いや、あの後目が覚めてから全部」

……なんでわかったんだ……

俺は確かに切れてた。誰かが気づくとは思っていたけどまさか妹に気づかれるとは思わなかった

俺が切れていたかどうかを確かめるのは簡単だ。自分でもわかるほどに

俺は切れていると口調が僕に変わる

「もしかして気づいていたのか？俺の一人称の変わりように」

「？なあにそれ？お兄ちゃんって切れると一人称変わるの？」

「はあ？知らないのか？だったらなんで俺が切れてるってわかったんだよ」

「まずお兄ちゃんめったに一人称使っていなかったし。それにそんなの見てればわかるよ」

そいつってあかりは俺のことを抱きしめてきた

……あれ？懐かしいなこの感覚。そういえば昔泣き虫だったあかりによくこうやって抱きしめていたんだっけ

「まてまて、あかり。ここにはシャルさんたちもいるんだから」

「今はいないよ。みんな私にお兄ちゃんを任してティアナさんたちのほうを見ているから」

そういつて俺のほうを見てくる。とても真剣な目だ

「お兄ちゃん」

「なんだ？」

「なんで起きた時から怒っていたの？夢で昔の思い出でも見ていたの？」

「……それは……って、ちょっと待てなんでお前が俺が起きたときのことを知っている？」

「それは、お兄ちゃんを看病していたら眠っちゃってシャルさんがお兄ちゃんの隣に寝かせてくれて、目が覚めたらお兄ちゃんが狂って笑っていたから」

「俺、狂ったように笑っていたのか……」

「で、お兄ちゃん」

「なんだ？」

「私に教えてくれない？どうして両親が死んだのか」

両親が死んだこと。それはあかりは知らない。まだ小さかったから

そして教えたくはないこと。俺にとって…

でも、家族の中で一人だけ知らないのはおかしい。だから、聞かれ
たら答えようと姉さんと決めていた

しかし、あかりが聞いてくることは一度もなかった。それに一度も
不満をもらさなかった

いつからか俺はあかりが勝手にわかっているものだと思っていた。
勝手に

「お兄ちゃん、私ね、今までお兄ちゃんが私の前でニコニコしてか
まっていたくれたから聞かなかったの。でもどうして聞かなかつ
たのかって思うでしょ。それはね、小さいころ毎年お兄ちゃんたち
と両親のお墓参りに行ってたよね。そのとき毎回お姉ちゃんが私の
手を引いて先にレストランに行っていたよね」

「ああ」

「私ね、なんで毎回お兄ちゃん一人だけにして先に昼食場所に行く
んだろうと思っていたの。でね、あるときお兄ちゃんにお手洗いに
行くといって両親のお墓のところまで戻ってきたことがあったの」

おれはハッ、とする。

そんな俺の姿を見ながらあかりは続ける

「私が見たのはお兄ちゃんが泣きながら謝っているところだった。
そのころから私は両親のことを聞くとお兄ちゃんが悲しむと思った
から聞かないようにしたんだ」

「そんなことが…」

「それからお兄ちゃんは私に対してめったに起こらなかったよね。」

でもお姉ちゃんに対しては怒ったような声を上げていた」

確かにあかりにはあまり怒ったことがない。生活に必要なマナーや本当にダメなときにしか

あかりにはそんな約束を破ることはなくめったに怒らなかったけど

「でね、私はお姉ちゃんに嫉妬していたんだ。お姉ちゃんは本当のお兄ちゃんとお話しているでも私は本当のお兄ちゃんとは話せない」

「いや、確かに姉ちゃんの時の姿とお前の時との姿は違うがどちらも本当の姿だぞ」

「ねえでも私はお兄ちゃんの事、そして両親の事を知りたい。教えて!」

「.....わかった」

第十六話 俺の過去です・・・・・・・・ byあずさ(前書き)

リマ「感想こゝな〜!!」

あずさ「まだ前書きなんだけど!？」

リマ「月光閃火さん、イツキさん、鮮血の刻印さん、三浦一平さん、マールーさん感想ありがとございました〜!!前回かけなかったのでここでやらせていただきました!!」

あずさ「なるほど」

リマ「ではどうぞ〜」

第十六話 俺の過去です．．．．． by あずさ

「昔、俺がまだ小さかった頃…いや、正確にはあかりが生まれた直後だといっておこう。」

俺はあのころは他の人と同じような生活をしていた。違う所があるとする、父親の職業があまりいない職業だったことだけだ。父親の職業はSPだった。それを俺は誇りに思っていたし、職業はすごい父親だったがそれ以外は他にいる一般的な父親と変わらなかっただろう。よく俺や姉ちゃんとも遊んでくれていたし。まあ遊びには手を抜くことはなかったけど。父親は職業柄、たくさんの人から恨みを持っていた。しかし父親の強さは異常だった。

あとで聞いてみた話によると土郎さんとも戦ったことがあり勝ったこともあるらしい。そのころから土郎さんは俺たちのことは知っていたとも言っていたが…話を戻すとあかりが産まれた。そのときにちよつと母親が弱っちゃってな、父親も付きっ切りで看病していたから弱っていたんだ。そして、恨みを持っている人たちが家に来たんだ。きつと誰かが情報を手に入れ売ったんだろう。

その時姉ちゃんはまだ学校でいなかったんだ。あの人はあのころから強かったからあの人がいれば二人は死ななかったかもしれない…いや、俺が弱かったのがいけなかったか。まあ最初俺はいち早く気が付いた父親に言われて物置に隠れていたんだ。母親と一緒に。父親は強かった。弱つていても普通の人たちでは敵わなかったんだけど相手が悪すぎたんだ。相手は、一種の殺し屋でその時の父親よりも強かった。父親も頑張っではいたが、相手の持ったナイフで出来た切り傷が増えていくばかりで出血多量で今にも死にそうだったんだ。だから俺はどうにかして父親を助けようと思ったんだ。俺が隠れていた場所は物置だったから父親が使っていた武器があった。剣、ライフル、小刀…etc だから俺はその中であつたライフルを使つて相手を倒そうとしたんだ。幸

いなことに母親も同じ気持ちだったらしく設定の仕方とか教えてくれたんだ。俺は狙った。敵を。でも初めてだったんだよ俺。それに小さかったから。だから手が震えていたんだ。でも打った。そしたら相手に当たった。」

「だったら両親は助かったんじゃない？それに父親、母親って…他に呼び方無いの？」

「助からなかった。それに父親、母親って呼ぶのは一種のけじめみたいなものなんだ。ごめん。で、まあ打ったんだよ。でも、当たった場所は心臓でも頭でも足でも無かった。背中だったんだよ。相手は一瞬うめいたけど打ったことによって相手に俺と母親の居場所がバレちゃったんだよ。父親は、一瞬のすきに相手を倒そうとしたんだろう。それに気が付いた俺は中から父親がいつも持っていく刀を一つ投げたんだよ。それを取ったんだよ。相手が。気づいたんだろうな。だからうめきながらも父親を蹴ってその隙にとったんだよ。短剣ならまだしも刀になると一撃一撃が致命傷だから父親も刺されてそれで……………」

「死んじやったんだ…」

「ああ」

「でもお母さんはその時助かったんだよね？」

「最初に言っただろ。かあさん…母親は弱っていたんだよ。だから動けなかった。小さなあかりを俺に託して先に逃げろって。俺もそのことはよく知っていたからあかりを連れて逃げた。そのあとちかくの公園で2時間ほど待っていたんだ。母さんが来るかもしれないと。ずっとあやまり続けて。」

「……ごめんなさいって？」

「…そ、うごめん、な、さいって……うつう……ごめんなさいごめん
なさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめん
なさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめん
なさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめん
なさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめん
なさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

あずさが狂ったように謝りだす。

「お、お兄ちゃん落ち着いて！！」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

あずさに言うが全くとまる気配がない。

あかりは何か考えるようになした後……

（今我を失っているし、何を言っても届かないかあ。でも抱きつけば．．．．それじゃあ弱いよね）

あずさにキスをした！！

第十六話 俺の過去です．．．．． by あずさ（後書き）

リマ「このキスはほっぺではなく口にです！！」

あかり「マウストウマウスだね！！」

リマ「時間が無いので手短に次回予告！！あかりちゃんお願い」

あかり「人任せな！？しょうがない．．．次回も私が出てくるよ！
！以上！！！！！！」

リマ「簡単すぎる！！まあいいや。ここで『緊急告知』！！！！！！」

あずさ「いいのかよ！！」

リマ「新作開始しました！！題名は私の二重生活（変える予定 大
）です。ぜひぜひ読んで見てください！！そして感想を送ってく
ださい！！」

あずさ「こっちにもな」

第十七話

魔力がなくても知恵でカバー

by あずさ

何が起こっているんだ？

息ができない！！

目の前にはあかりの顔が…

「うわあああああ」

何やっているんだあかりは！！
勢いで飛びのいてしまったけどホントに何やっているんだ

「お兄ちゃん落ち着いた？」

「お、おおおお落ち着けるか！！」

「え？でも落ち着いて…」

あかりが言いかけたところで突如アラートが鳴り響いた。

「あかり、ごめん俺行かなきゃ」

「あ、まつ…」

ガチャ ヒュー ゴンッ！！

「痛…！！！！」

ドアが開いたところでいきなりたらいが落ちてきた！！
何！？この古典的な罠！！

罠をかける奴といえはあかりしかない

「あーかーりー！！」

「ふえ！？だから言っ たんじゃない！！」

それよりもなんでトラップが仕掛けられているんだよ！！

しかもここ医務室なんだけど

けがした人がさらにけがするよ！！

「何で仕掛けているんだよ！！」

「お兄ちゃんが逃げ出さないように」

「他の人が来たらどうするんだよ！！」

「だから来ないって。 みんなお仕事中。 …… まあ私が至る所にトラップを仕掛けたからだけど（ボソッ）」

ん？何か聞こえたような？

まあ気のせいだと思っておこう

「とにかく俺は行かなきゃいけないんだ！！じゃないとじゃないと
……」

「じゃないと？」

じゃないとじゃないとっ!!

「魔王にお話しされる!!!!!!」

「そっち!? 俺が行かなきゃ大変なことになるとかじゃなくて!?!」

「当たり前だろ!!! いくらなのはお姉ちゃんに大怪我負わせたから
ってあの後シャルさんとお前で直しただろうし」

「そうだけどよくわかったね。あと、シャーちゃんって呼ばないんだ」

「お前の瞬間凍結で傷をふさぎくっつけそれでシャルさんの医療
技術で直せばすぐじゃないか」

「なるほど」

「それにシャーちゃんって呼ぶのは……行かなきゃ!!」

こんな事話している場合じゃない!!

さっさと行かなくては!!

俺は医務室から出ていく

「教えてよっっていうか待って私も行く!!」

集合場所に行くまで俺は一体いくつのトラップに引っかかったのだ
ろっ……orz

「あ、お兄ちゃん!!」

「お、おおキャラか」

「大丈夫？」

「魔力は何か…」

ぼろぼろになったおれを出迎えてくれたキャラは俺を見て驚いていた。

お、スバルもティアも無事だな。安心安心。なにか嫌な予感がするけど

「あずさ君は空戦経験あるよね」

「なのはお姉ちゃん…ごめん」

お、怒っていない？いや、でも一応あやまっておくか

「今はそんなこといいから…ね？あるの無いの？」

あれ？やっぱり怒っているのかなあ？

「ありますっ!!」

「じゃああずさ君も乗って」

「はい」

「……ふざけないで。これは実戦だよ？死んでもおかしくないんだ

よ
」

言っとくけどなのはお姉ちゃんより俺のほづが死戦をくぐってきたから。

言わないけど

「FW陣は出動待機でいよう」

ほ、ティアには何もなしか。でもあいつまだ疲れたまっついていそうだな

「ティアナは出動待機から外れとこうか」

その言葉を聞いた時FWの全員は驚愕した俺も

「その方がいいな。そうしとけ」

「今夜は体調も魔力もベストじゃないし、あずさ君と違って疲れも溜まってたみたいだから」

「言うこと聞かないヤツは使えないって事ですか・・・」

「自分で言っけてわからない？当たり前のことだよ。それ」

「現場での指示や命令は聞いてます。教導だってサボらずやってます。それ以外の場所での努力だって、教えられたとすりじゃないとダメなんですか？」

ああ〜なんかいやな感じ。

「アタシはなのはさん達みたいにエリートじゃないし、スバルやエリオ、あずさのような強さも、キヤロみたいな稀少^{レアスキル}能力もない。少しくらい無茶して死ぬ気でやらなきゃ強くなてなれないじゃないですか！」

待て待て待て本気で言ってるのかよー！

ちよつと、いや、かなり怒ったかも

あ、切れてはいないから

「ティア、お前本気か？」

声を押し殺して言う

「なによ、本当のことでしょー！！」

「だったらお前サイテーだな。ティードに対して最悪なこと言ったぞー！！」

「な！？あんたは兄のことなんて知らないでしょー！！」

「知ってるさー！無茶して死ぬ気でやらなきゃ強くなれないだあ！？ティードがいつそんなことしていたよー！そんなんで強くなつたっていずれは体が悲鳴を上げる。気づかなかつたのかよ。お前がアグスタで行ったミスショット。あれはお前ができると思ってやった結果あんなったんだ。そんな練習方法よりもなのはお姉ちゃんの教導のほうが強くなれるー！！」

「でも、それじゃあほかの人より強くなれないでしょー！！それに兄のこと知ったような口きかないでー！！」

バチン！！

シグナムさんがいきなりティアの頬をぶった

「心配するな。加減はした。ダダをこねるだけのバカはなまじ付き合ってやるからつけあがる。ヴァイス！もう出られるな！！」

「乗りこんでいただけりやすぐにでも！」

そして俺たちはへりに乗り込んだ。

なのお姉ちゃんが顔を出してティアに言った

「ティアナ、思いつめちゃってるみたいだけど、戻ってきたら話そ
！」

「お姉ちゃん！！」

へりから身を投げ出してティアに何か言うなのお姉ちゃんを止める

ティード、ごめんな

約束守れなくてごめん。約束を破ったのこれで二回目だ
でも、まだ俺頑張るから。何とかしても最後の約束は守るから

「みんな、今回の討伐は俺一人でやらせて」

「え？」

「相手は同じところにいるんだろ。だったら俺の技でつぶすから」

「できるの?。」

「まず、なのはお姉ちゃんはまだ駄目でしょう。俺から受けた攻撃治ったわけじゃないでしょう」

「でも、あずさも一人じゃ…治ったわけじゃないし…」

「これくらいなんともないから。リミッター外せば何とかなるから」

「えっ? A+じゃないの?」

「あまり変わらないけどS-なんだよ」

「Sランクオーバー!?!」

「ね、だから俺一人で大丈夫だからフェイト姉……一発で終わらせる、ヴァイス!!」

「おうっ。行つて来いあずさ!!」

「あずさ言つな!!」

ヴァイスに行つてドアをあけてもらう

「じゃあいつてつきまーす」

「あ、あずさ!?!」

俺はストームレイダーから飛び降り展開を始める

（フルーテ）

（わかりました）

バリアジャケットを展開

「攻撃はしてこないのか？」

（そうみたいですな）

「だったら……即興曲イの二 ビッグバン（円）」

さっきまでガジェットがいたところに大きな爆発が起こる

（これってランクA Aなんだよなあ）

（爆発だけ考えていたらどんだけの威力なんだって感じですよ）

（あ、頭を使わなきゃ。なにことも）

（悪知恵しか働きませんが）

（るっせえ！！）

そんなことをフルーテと話しながら俺は戻った

- - - - -

「くくくく、あんな一発で私のガジェットを壊すとは……」

とある研究室で笑うひとりの男性

「柊あずさと言ったかな？あの子のデータが管理局で見つからないのには何か理由が？」

近くには六課の人のデータがおいである

「一から見つけて行くのも楽しいしな・・・なあ『水竜の悪魔』くん」

第十八話 殺人を犯した主人公… by リマ（前書き）

あずさ「違うから!!」

リマ「え？」

あずさ「題名!!あってるけどあってない!!」

リマ「イミワカラナイ」

あずさ「なぜ片言!？」

リマ「まあ本編読めばわかることだから…ね」

あずさ「なにその、『わかって』みたいな瞳!!」

リマ「ではどうぞ!!」

第十八話 殺人を犯した主人公… byリマ

「あんたに兄のことなんて語ってほしくない!!」

「だ〜から〜……なんでこうなった!!??」

「あんたはなのはさんと違って知りもしないのに兄を傷つけた!!」

「兄、兄、うるせえなあ…お前昔お兄ちゃんって言ってなかった？」

「な、何で知っているのよ変態!!」

「変態!?!なぜ!?!だからティードのことは知っているって言うてんだろ!!…いい加減むかつくぞ」

「とにかく私の練習やお兄ちゃんについて口出さないで!!」

俺は今、ティアナと向かい合っている…訓練場で

………なんで?こうなった?

- - - - -

ガジェット討伐が終わった後俺は質問攻めにあっていた

「ねえねえあずさ!!あの威力は何!!」

「いや、威力はそれほどでもないんだけど…」

「あずさ君って強かったんだね」

「いや、少なくともなのはお姉ちゃんよりは弱いよ……あの魔王モードにはかなわない」

「……あずさ君は私に勝ったんだけどなあ」

「ん？なのはお姉ちゃんなんか言った？」

「ねえねえあずさ！！あの威力は何！！」

「フエイト姉！！それ、さっきも聞いた！！」

「早く教えてよ」

「……あれ自体は実際弱いんだよ……あれはある空間の外側にある魔力をかき集めて球体の中の気圧をめちゃくちゃ上昇させているんだよ。それでガジェットを圧縮して壊したってわけ。結局物理的なダメージなんだよなあれて。だからAMFは効かないんだ」

「それであんな威力に？」

「いや、それだけだと俺の場合半円になっちゃうからちょっと魔力を増加させて円にさせているけど。でも、これは生命体には効かないんだよ」

「なんで？」

「わからんけどなんか防がれちゃうんだよ」

「じゃあ？」

「……じゃあつて？」

「それに対する対抗策あるんでしょ？」

「ああ、それはひ・み・つ」

指を振って笑顔で答える

『え！？……か、可愛い……』

「あれ？みんなどうしたの？」

「え、えつとあずさ君。さっきティアナのお兄ちゃんがどうしたと
か言っていたけど……」

「あれ？みんな知らない？じゃあ……」

おれはティアのお兄さんティードについて語る

「……そんなことが」

「でもあずさは何で知っているの？」

「それは………」

少し間を置く。このことはあまり言いたくない。でも、言わなくち
やいけない

この人たちにはもう何も隠したくはないから……

「ティード・ランスターが死ぬまでの間、俺と二人でコンビを組んでいたから…」

「えっ？」

「それって…」

「……これはフォワード陣には言わないでくれるかな。みんな知っていることだと思うけど『管理局上層部殺害事件』ってわかる？」

「え！？犯人不明っていう？」

「ある上層部が一夜にして全員ミイラになったっていう？」

「そう、その犯人俺なんだ…」

『ええ~~~~~!!!!!!』

まあ驚くよな…こんな犯罪者が身近にいたら

「しゅ、出頭しないの？」

「するきないしまずしなくてOK」

「な、なんで？」

「あいつらには全部悪事と呼ばれるものが10件以上ある」

やっぱりみんな俺のこと引いてるな〜

まあわかっていたけど

「だから不問になっっているんだよ。実際知っているのはめっちゃくちや上の連中だけだ」

「えっと…それが何か意味があるの？」

「上層部のせいでティータは死んだ。その上層部は死んだ奴だよ。全員」

「えっ？それって」

「それ以外の奴らは殺さない」

お、そろそろ着くな

「今回はここまでで…」

「う、うん」

俺たちはストームライダーから出る

出た瞬間

「なのはさんごめんなさい…！」

「あれティータ？」

「！！ちよつと何であんたが一番先なの！！」

「ティア、お前自主練やめろよ」

「えっ！？いやよ。私はやめない！！」

「だったらティーダのことを悪く言うな！！」

「言っていないじゃない！！」

「だゝかゝらゝお前が無理することがティーダを悪くいつていることになんだよ！！」

「意味わからない！！」

「ティーダは決して無茶をしなかった！！それでもあれだけ強かっただろ！！」

「でもっ！！私は練習しなくちゃうまくならないもの！！」

「お前は強いけどな…」

「そ、そんなこといきなり言われたって…」

「少なくとも俺にはないものを持っているじゃないか」

「な、何よそれ！！」

「人を信じること」

「え？」

「いや、信じることだな」

「意味わかんないし！！」

俺は信じることはできても信じきれない。なぜなら…

「そんなの強さじゃない！！」

「いや、強さだよ」

「五月蠅いうるさいうるさい！！」

「ネタ古くね」

「黙れシスコン＆ロリコン！！」

「んなっ！？おいティア……表に出ろ——！！！！！！」

「私もそう思っていたところよ！！」

- - - - -

以上長い回想終わり

……俺のせいでもあるんじゃないか
まあいいや軽く勝つか

それにティードのこと結構侮辱していたからな…

（フルーテ今回はあのシステムで行くぞ）

（ええ、あれ好きじゃないんですけど）

（ああ、俺もだ）

（だったらやめましょうよ）

（でも、あれが一番一対一には向いているだろ）

（確かに初期システムは支援系、ブレードシステムは多対一、アサシンシステムは隠密・潜入特化、このシステムはトリッキー・一対一・多対一、ラストシステムは戦闘は弱すぎですからね）

（ああ、ブレードシステムでも一対一にできるけど最悪殺しちゃうし今回はティア自身の強さとティードに対する間違いを認めさせるためだからな）

「あずさ！…さっさとしなさい！！」

「ああ、フルーテ、SET UP」

俺の身体がバリアジャケットに包まれる
姿は…

『ぶっ！…！』

「笑うな!!」

俺の姿は半分泣いているような顔と怒っているような顔のついた仮面をつけた道化師だ

確かに服装は笑える…皆さんが思っぴエロの姿を思い浮かべてください

俺からは言いたくありません

「あずさ…本気なの?…ぷっ」

「これでもお前には勝てるからな。あと笑うな!!そこの見学者たちも!!」

「じゃあ殺るわよ!!」

「字い違う!!」

俺とティアが戦うことになった…

第十八話 殺人を犯した主人公… by リマ（後書き）

リマ「まずお詫びを申し上げます」

あずさ「俺に？」

リマ「ちがうわよ！！この頃前書き、後書きかけなくてすみません」

あずさ「次回予告とか感想コゝナゝとかなかったしな」

リマ「言い訳を言わせて貰うと書いてないときは毎回計画停電になる2、3分前だったりしていたので…」

あずさ「確かにいいわけだ！！」

リマ「で、では感想コゝナゝ、三浦一平さん、マーボーさん、イツキさんありがとうございました！！」

あずさ「ありがとうございます」

リマ「これで一言…」

あずさ「？」

リマ「感想ください！！！！！！！！！！こっちでももう一つの小説でも

⋮
⌊

あずさ「本気で泣きながら言っている!？」

リマ「あ、あともう一つ!」

あずさ「早く次回予告しようぜ」

リマ「放射能には……ワカメが良いそうです！！！！ワカメが！！！！
！っ　　いうか海藻が！！！」

あずさ「小説に関係なかった!!!」

リマ「で、では次回予告……あずさのなったシステムの名前が明らかに……あずさの戦い方とは……！」

あずさ「それだけ！？それにシステム名って書き忘れたただけだろ……！」

リマ「あずさ……それはいつちゃあいけねえよぉ」

あずさ「女なのにハードボイルド！？なんか違う気がするけど……」

リマ「では次回もよろしく願いします……！」

あずさ「感想あげてください……」

第十九話 新システム登場!!（前書き）

リマ「新システム登場!!」

あずさ「その名も」わああああ——!!——!!——!!」

リマ「言っちゃダメでしょ!!」

あずさ「だったら……ではどうぞで、よくない?」

リマ「そうだね。ではどうぞ」

第十九話 新システム登場！！

「とにかくティアには負ける気ないから」

「私だつてないわよ！！」

「じゃあ……行きますか」

「ふん！！」

「ジャグリングスフィア… s e t」

俺から仕掛けることにする。

手に八個のスフィアを用意

それを次々上に投げジャグリングする

そして一発ずつティアに向かって投げつける

スピード、威力を変えて

「くつやりにくい技を！！」

ティアがすべてを撃ち落す

「まだ終わらせる気はないから撃ち落せなかったらどうしようかと思っただぜ」

「あんた何様のつもり！？」

「陸士訓練校の先輩。ついでに言えばお前が入れなかった士官学校

の首席」

「うつ。何であんたがそんなことを!!」

「お前が言っただろ。少しは覚えとけ……そろそろ黙らないと舌噛むぜ」

「うつさい!!」

ティアが俺に向かってカートリッジを一発使って撃ってくる

「あゝあもうカートリッジ使っちゃうのかよ。」

身体を傾けることでそれをかわすが追尾式らしく追ってくる
それをシールドを張って防御する
俺は腰から一冊の本を抜き出す

「…コピー…高町なのは『アクセルシューター』（ぼそ）」

「えっ？」

一瞬あずさが何を言ったのかわからなかった
そして現れたものを見て驚愕する

色こそ違えど出てきたものはのはのものと変わらなかった
あずさの周りにスフィアが22こ現れる

「シュート!!」

一斉にティアに向かって全弾が発射される

「ちょー！クロスミラージュー！」

「……アクセル」

ティアが防御する瞬間スピードを上げる
ティアは急いでその場から立ち去る

「あ、そうそう。俺はここから動く気はないから」

「なに？ハンデのつもり！？」

「動かなくても勝てるっていうことだよ」

挑発をしまくる

しかしティアの精神はまだ落ち着いている
だったら動揺させてやる
また本を開く

「いまから面白いものをみせてやるよ。コピー……ティアナ・ランス
ター『ファントムミラージュー』（ぼそっ）」

「えっ！？」

俺の姿がそこから消える。

そしてティアの後ろに俺が現れる

「あ、あんたついさっき移動しないっていったばっかじゃない！！」

「……」

ティアが俺に向かって撃ってくるがびつくりして適当に撃ちまくる
弾なんかよけるのはたやすい
今度は自分から切りかかってきた
あれだけのことがあったのにまだそれを使うんだ
ティアが乱れ始めたのを確認してする
これくらいでいいか。
今から説教タイムだ

「…お前がティードから教わったのはそんなことか？」

「そ、そんなわけないじゃない!!」

「ティードは人を疑うことはなかったがお前はどうか？」

「……っ」

「ティードはいつも冷静に物事を判断していた。今のお前は？」

「っ」

ティアが唇をかみしめる

「あいつは一度だって無駄な弾は撃たないようにしていた。魔力はおまえよりあるのにだ」

「そ、そんなことわかってる!!」

「じゃあ今お前はどつするんだ？」

「……………」

ティアが考え始める

これで少しはティードの思いがわかるかな？

「クロスミラージュ……シユート」

ティアが撃った方向は俺が今いる方向ではなく先程までいた場所にあった

そこには消えていた俺の実態があった

「わかったわよ！！あんたの魔法の仕組み」

「よくわかったな……で？」

「あんたのは私と同じような幻術ね」

「ちょっと違うな。俺のは幻術だがお前と同じようなではなくて同じだ」

「え？それって」

「俺のこのシステムは『コピーシステム』一度見た技をできるだけ似せて使う技だ」

「な！？じゃあさっきのなのはさんに似た技も」

「ああ、そうだよ」

「そう」

「模擬戦は続けるか？」

「いや。もういいわ」

「そうか」

「聞きたいことがあるの」

「なんだよ」

「お兄ちゃんのこととは？何で知っているの？」

「それは……」

今から話すことにしよう

第十九話 新システム登場！！（後書き）

リマ「感想コゝナゝ鮮血の刻印様、三浦一平様、イツキ様、マーボ
ー様、感想ありがとうございます！！」

あずさ「いきなり！？」

リマ「今回は重大な事実が発表されます！！」

あずさ「それって…」

リマ「そう！！まだ一度もナンバーズが出てきていません！！」

あずさ「どうするんだ？ほかの作品だともう出てきておかしくない
と思うが…」

リマ「じ、次回予告！！次はティードとの過去が明らかに！！」

あずさ「それだけ？」

リマ「ではまた」

第20話？ みじかつ！？（前書き）

リマ「遅れてすみません！！」

あずさ「それに1000文字言っていないという悲しさ」

リマ「本当にごめんなさい！！受験生に慣れるまで待ってください
！！！」

あずさ「お詫びにリマが新属性発足！！」

リマ「し、知らない！！」

第20話？ みじかつ！？

もつと強く。強く。強くならなきゃ！！

じゃないとまたお姉ちゃんたちやあかりを悲しませちゃう

「ハあ…ハあ…ハあ」

僕が管理局にある訓練室で支給用のデバイスで魔法を放ち続けていた

ぴとっ

頬に何か冷たいものがあてられた

「ひゃふん！？」

「はいよっ。おいおいなんて声出すんだ。それと変質者みたいだったぞさっきの声」

後ろにはティード・ランスターがいた

「んだよティード」

飲み物を受け取りながら答える

「少し休め」

「いやだ」

「同じ妹を持つ身として言わせてもらうが身体を壊すぞ」

「あんたはシスコン。僕は何でもないから!!」

「るっせえ!! ティアは可愛いんだぞ!! お前も前あったらろっ」

「僕と年齢大して変わらなかったし」

「狙うなよ!!」

「狙わねえよ!!」

「そっかお前にはあのお姉さんズがいるしな」

「お、お姉ちゃん達とはそんなんじゃないよ!!」

真っ赤になっていう

たくっお姉ちゃん達とはそんな関係じゃないっての

……確かにみんな可愛いし大好きだけど向こうは僕のことを弟程度にしか思っていないだろうし

「あ、そうそうこの前来た時からティアがまたお前に会いたいつてうるさいんだよ……どう落とし前つけてくれる？」

そんなこと僕に言われても僕にはお姉ちゃんがいる……ていうか知られたら殺されるし……

ティードとは現在の仕事上でのパートナーである。
お姉ちゃん達のことは知っているがお姉ちゃん達はティードのこと

を知らない

それほどまでにお姉ちゃん達は有名なのだ

「つけるなよ。で、なんのようなの？」

「新しい任務だ」

「内容は？」

「夢と希望を妹にプレゼントする旅」

「行くか！？」

「冗談だ」

あんたが言うつと冗談に聞こえないんだよ

この前だって妹に指アあげるために危険度Sのところについて来るとか言い出すし

「で、本当の要件は？」

「管理外区域での違法研究所と思われる場所の調査と破壊」

「危険度は？」

「A」

「つらくね？」

「俺とお前ならできるだろ。お前今Aだろ」

「そうだけど」

「でも、練習のし過ぎは気を付けろよ」

「ああ。で、いつ行くの？」

いまか？それとも明日？今はきついな……魔力ほとんど残っていないし

と、なると剣術だけで勝たないといけないか。Aだったら余裕かな？

「今だ」

「やっぱり」

「じゃあ行くぞ」

「おい、デバイス忘れてる」

「……あ」

おいおい大丈夫か？

第20話？ みじかつ！？（後書き）

リマ「ってことでみじかくて済みませんなのによ」

あずさ「猫？」

リマ「いま友達に勧められたメイプルストーリーにはまっているのによ」

あずさ「だから更新が遅くなったのか？」

リマ「それはないのによ」あ、もしこれ見ている人でメイプルストーリーやっている人がいたらぜひ語り合おうなのによ」ちなみに私は『かえで』のWHのfarikaっていう名前だによ」

あずさ「宣伝してるんじゃないええ！！」

リマ「っていうことで今度からはもう少し早く更新するようにするのによ」

あずさ「お前のそういうことって毎回なんなんだよ！！」

リマ「次回予告はないのによ」

あずさ「最悪だ！！」

リマ「では次も呼んでなのによ」

第二十一話 水の世界

おい！！おいおいおい！！

「さあ行くぞ！！」

「何でここ！？」

今いる場所、そこは一面海だった

「蒼いな…」

「青いな」

どこに研究所があるんだよ！！
まさか海の中か？海の中なのか！？

「無くね？」

「こんな場所だからあるんじゃないか？あまり目につかないし」

「なる。で、どうやって行くの？」

「お前の水を操る能力が使えるんじゃないのか？」

「だから任務が回ってきたのか」

ということは相手も水を操るのがうまいのか
そうすると僕にはきついかな？まだなりたてだし

まあティードがいるから大丈夫だと思うけど

「うお!!」

突如、水が俺たちのところに跳んできた

何とか避けたけどこれは…鋭い!!

「分が悪いな」

「どういうことだ？あずさ」

「きつとこの水は魔法で作ったものだ。僕と同じ変換資質で作ったものだ。だからあっちが動かすのがうまいんだ」

「ということはこの世界すべてが敵の魔法ってことか」

「みたいだよ」

きつとこの量の水を発生させたのはたくさんの月日が必要だろう
それだけ相手はここに隠したいものがあるということ
先程の攻撃から僕たちが来ていることはばれているってことだから簡単には行かせてくれないだろう

「ねえティードちょっといい？」

「なんだ？いい案でも見つかったのか？」

「うん。あのね…」

僕は静かに話し始めた…

「フルーテ」

『はい。あずさん。システムは？』

「殺気の作戦効いていただろう。初期システムでいいよ」

『OKです』

フルートの形になったフルーテが俺の手に入る

「ティーダ行くよ！！」

「おう……っていつか俺のほぅが年上なんだが……」

ティーダが水の中に突っ込む

僕もそれに続いて中に入るがたくさんの水による槍が飛んできてなかなか進めない

「フルーテ――独奏曲1『女神の涙（^{トレース}解析）』」

この技は相手の技を解析する技だ。別に相手の技でもなくても物なら何でも解析できる。

解析する時間は約30分

フルーテに静かに唇をつけ息を吐き出す

静かに、そして悲しく……あの時のことを思い出すように……お姉ちゃん達はもう覚えていないから……

目頭が熱くなる。そして涙が頬を伝う。この技を使うと毎回泣いてしまう。

皆との楽しい日々を思い出して…

その涙がこの魔法の力となる

涙が水の中に入り解ける

「ティーダ！！中に入るよ！！」

「ああ！！そろそろ入らないと俺の魔力が持たない！！」

息継ぎと同時にティーダに指示を出す。

先程までティーダは自分と僕のガードを担当してくれていた

僕は並行処理を駆使して真下に大量の水を打ち込む

そしてそこから自分の水を使いトンネルを作っていく

「今！！」

中に入ると当然相手の攻撃も激しくなる

魔力の少ない僕の水魔法よりも相手のほうの威力のほうが強いためトンネルも貫通される

そんな危険地帯の中で僕はずっと吹き続ける。防御は全てティーダを信用して

「あつたぞ！！」

「…ふ…ふ…こっちも終わった！！」

「このまま右に直進だ!!」

「さすがに建物は水でおおわれていないか」

建物は空気の膜みたいなもので覆われていた
僕たちは急いで中に入る

建物の中に入ると何かの生体ポットと難しそうな機械がたくさんあった

そして、周りにはところどころ血と思われるものがあつた

変な臭いもする

「この奥に魔力反応を感じる」

「ありがとティーダ」

一つの大きな扉の前に立ち開ける

そこは何もない白い部屋。しかしその中の白色に紛れて白衣を着た男が立っていた

「次元犯罪者、ハーデル・プレン。お前を殺害および管轄世界の違法行為により拘束する」

「くつくつく!!きたか!!私と同じ水使いよ!!」

「それがどうした?」

「簡単に捕まってはいけないのでな。私にはまだ目的がある。」

「こっちは二人です!!」

「人数なんて大した差じゃないさ。それにこうすれば!!」

パチン!!

ハーデルが指を鳴らす

突如ものすごい量の水が中に入ってくる

すぐにティードに空気の膜を作る

僕は水の中の空気をうまく自分のところにおけるから必要ない
向こうもそうみたいだ

「これで動けるのは私と君。その銃使い君は足手まといでしかないね」

「つく!!」

「ティードは待つて。僕が倒す」

「ははははは!!!!!!この水はすべて私のだよ!?君が操れないのも魔力が少ないのもわかっている。どうやるというのかね?」

「それはこうするのさ!!」

僕は右手を前にかざした

第二十一話 水の世界（後書き）

すいません！！今回は何もしないで！！

感想お待ちしています！！

第二十二話 ティーダの死と壊れた日…もういやだ b y あずさ(前書き)

リマ「こんかいはg d g dです!!」

この頃感想がたくさん来てすぐに更新しなきゃと思っています!!
レビューを書いてくださった方もいたので頑張っていこうと思います
おねがいします」

あずさ「長いよ!!それにもう始めるの!?!」

リマ「うん!!」

あかり「私この頃空気」

第二十二話 ティーダの死と壊れた日…もういやだ byあずさ

同族同士の戦い

同じような力を持った者同士の戦いは能力の強さ、経験、準備、仲間で勝敗が決まる

と、なると今いるここは僕にとって最悪な場所だろう。

能力の強さは水の量からして向こうが上

経験も入って一年くらいの僕なんかよりも上

準備も向こうは待っているだけでこちらは向かったから向こうのほうができる

仲間は…… ティーダはここでは役に立たない。むしろ足手まとい

『これヤバくね?』

『いえいえ、少なくともあちらよりもデバイスは上です』

フルーテと念話をかわす

確かに向こうは簡易型の杖を模したストレージデバイスだけど…

『確実に何か隠しているな。水使いだし』

『それを言うならあなたもでしょ。少なくとも準備は向こうよりもあなたのほうができてますよ』

『だね!!』

水使いはなぜか共通の特徴として隠し事をするのがうまい。だからか相手を信用するのも遅い

相手の手の内はまだ未知数ってことだ

「で、どうするんだね？」

僕は、右手を前に掲げたまま言う

「ブレードシステム。水系作成」

ブレードシステムに変え自分の魔力を使い糸を形成する。好きな時に切れて好きな時につなげる優れものだ。それを見てハーデルは嘲笑した

「そんな糸で私を絡み付かせようとでも？それに水を使えるってことは水圧を変えられるってことだ。そんなことは君でも知っているだろう」

「ずいぶんおしゃべりなんだね。科学者って…」

徐々に自分の周りの水圧が強くなってきたのがわかる
水圧は体全体に働いているため全体が痛くなる

「砲撃なんか使ったって水圧で方向を変えられる……でも……—そんな水圧をなくすことができるってすれば？」
《・・・・・・・・・・・・・・・・》
「・・・・・・・・」

ハーデルの顔が驚愕の色に染まる

「なん……だと。まさか！！いや、君みたいな小さい子にはまだで
きるわけがない！！」

また笑顔に戻る

相手の魔力で作った水を操るのは普通の水を操るよりも難しい。それは、人々によって魔力の質は違い構成も違うからだ。

そんな風に笑っていられるのは今のうちだ。だって本当なのだから

「……穿て、石を。包め、流水の如く。すべての物は水の意味より生死が決まる……ウォーターバスター!!」

水と魔力による純粋な砲撃魔法だ。まあほかの砲撃魔法と違うところは切れ味が高いのと少しだけ追尾機能があるだけだ

「ふん!! 苦し紛れを!! 水よ!!」

ハーデルも水で障壁を作る

「ごめん!! 僕が得意なのは水だけじゃないんだ」

水圧を後ろだけ強くして一気に加速しフルーテで切る!!

僕が得意なのは魔法よりも恭也さん達に教えてもらった剣道かもしれない。他のと違って次元が違うけど…

「ぐっ!!」

何とか杖でガードをしているがこっちは二刀流だ。

もう一つのほうで横なぎにする

白衣もろとも切られるハーデル。とっさによけたのか傷は浅く内臓まで届いている様子はなかった

よろよろと水中で体勢を立て直すがそこに先ほどまで空気だったテ

イーダのバインドが入る
これでもう動けないだろう

「なぜ君が私の水を操れるんだ!!」

「僕は解析したんだよ。入る前にね」

「そんな時間はなかったはずだたださえ私が攻撃し続けたっていうのに」

「そんなのティードにまかしたさ。こっちには仲間がいるんだよ」

「くっ」

捕縛して水上へ移動しているところで聞いてきたので答えといた

「……あ、そうそう。水使いは隠し事が上手だってことを忘れてないかい？」

「え？」

いきなり薄ら笑みを浮かべたハーデルが言い放つ

「先ほどまでは時間がなくてできなかったが……これが私の最大魔法!!黒の海に眠る悪魔よ今もう一度我に力を!!」ヘル・ウォータル・デーモン・ブレイカー』!!」

突如として水が暴れだす。

そこから噴き出てきた黒い水をとっさに受け止めるが威力が先ほどまでとまるで違う

ティードも頑張つて守ってくれるが時間の問題だろう

やがてパリンと小さな音がなり障壁が破られ僕にくらいついてきた

「……ティードは上に!!」

「お、おう」

管理局では仲間を信じるのが大事だ。

僕のことを信じたティードは上に上がっていく

「しゃくない。あの技使ってみるか」

『そうですね。これに対抗するのはあの技でしかないでしょう』

あの技。それは現時点で一番強い技でありこれからもそうなるような僕の奥義だ

まだ使いこなせてないけど

このまま黒い水に食われるよりはいい

「水を司どる竜よ、今我に力となり現れよ……お願い頼む!!レイ
アム降臨!!」

水龍召喚

唯一できる僕の召喚魔法

この龍は僕と契約している。ある意味使い魔のようなものだ。

まあ気分が乗らないときは出てきてくれないけど…

出てきたときはすごい力を発揮する。それこそなのはお姉ちゃんの
スターライトブレイカー以上に

出てきた！！

翼のない蛇のような水色の鱗をまとった龍がくる

「お願い！！レイラム」

「・・・わかった。あずさよ。」

人語を理解し話せるなんてすごいと思うがこいつがレイラムだ

そして僕を包む黒い水を一瞬で浄化する

「う、うわあああああ！！！」

ハーデルへと標的を変えていくレイラムを見て恐怖の表情を浮かべ逃げようとするがバインドがかかっているため逃げれず締められていく

ハーデルが気を失ったところで

「任務完了。ありがとうレイラム」

「・・・あずさは私を倒したたった一人のものだ。従うのは当然だろう」

そういつてまた水の奥深くに帰っていく

「あ、そうそう。この水も消さなきゃね」

もともとはこの水はなかったものだから消してしまっていていいだろう。

「よし。これでいい……よ……ね」

ばかり

「あずさ!？」

あれ?力が入らないや…魔力使いすぎたかな?レイラムまで召喚したし…血も出てるや…さっきの攻撃かあ

薄くなる意識の中僕はそう思っていた。

僕が目を覚ましたのは5日後

症状は魔力の枯渇と出血多量とのことだった。

そしてあの事件の容疑者ハーデルは上層部の連中と関係があるとわかった

- - ティーダが残した置手紙で

そしてティーダは僕が寝ている間にその上層部の連中からの任務で

……死んだ

僕はもちろん暴れた。

ティーダの葬式にももちろん行った。同じチームだったから

そこで、ティアナに殴られた。

こういわれて…

「何で!？何でお兄ちゃんは死んじゃったの!？なんであんたは生きてるのよ!？あんたが眠っていたからお兄ちゃんは死んじゃった

んだ！！全部あんたのせいだ！！」

涙を浮かべていうティアナはそのあと僕と顔を一切合せなかったきつとティアナも僕のせいじゃないと心ではわかっていたはずだでも、何かを吐き出さないと自分が壊れるから、だから僕に当たり散らしたのだと思う

僕がティーダの遺体に手を当てているとき後ろから声が聞こえた

「しつかり捕まえられなかったらしいな」

「それで名誉の死とでも言いたいのですかね？」

「ただのバカの死の間違いだろ」

カチンときた

誰が言っているのか急いで振り返ってみるとそこにはティーダを貶めた上層部の連中がいた
そしてその面々には覚えがあつた。

お姉ちゃん達に無理な任務ばかり与えている奴らだ！！

ティアナのほうを見ると唇をかねで震えている

僕は静かに自分のところへ戻ろうと腰を浮かすと向こうがこちらに歩いてきていった

「死んでたのはお前だったのかもしれないぞ？ま、あいつのほうが無能だったのかもしれないがな」

「……上層部の方たちにお話があります。あとでお伺いしてもよろしいですか？」

「ふんっいいだろう。一人になったやつに何ができる。期待を背負ってすぐに怪我した新人君」

「ただの凡人が頭に乗るなよ」

僕に向かって悪態をつきながら行く面々にしっかりと約束は取り付けた。

もうこの怒りは抑えきれない。僕だけを貶めるならまだしもティーダを貶めた。

それに姉さんたちの疲労の現況

何かが壊れた

それに反応するようにフルーテが光る

『感情スキャン。新システムアサシンシステム登録完了』

やけに機械音じみた音で

その後僕は上層部を殺した。フルーテが約80%破損という結果とともに

そして裏の世界から言われるようになった二つ名

『水竜の悪魔』と…

第二十二話 ティーダの死と壊れた日…もういやだ byあずさ（後書き）

リマ「いやゝgggdだったね」

あずさ「うつゝシクシク…」

リマ「まあdm!!」

あずさ「……ねえ前書きから気になってたんだけどそのチャット文字なに？」

リマ「友達に教えてもらったから使ってみたよ」

あずさ「星きめえ…」

リマ「……一遍死んでみる？」

あずさ「次回予告次回予告!!」

リマ「その前に感想でしょ」

あずさ「この頃ないからまたないのかと」

リマ「前までは時間がなかったのよ!!今回はあるから…」

あずさ「あつそ」

リマ「ではでは久しぶりの感想コゝナゝだぞ ミ 感想コゝナゝ三浦一平様、イツキ様、月光閃火様、鮮血の刻印様、プワゾンクロウ

様感想ありがとうございます」

あずさ「いや、だからきもいって」

リマ「主人公をあかりちゃんに変えちゃうぞ（にっこり）」

あずさ「マジすみませんでした!!」

p r r r p r r r

リマ「あ、電話だ」

あずさ「いきなり!？」

リマ「あ、あかりちゃん? うんうんOK わかった」

あずさ「しかもあかりから!？」

リマ「では、電話がつながりました次回予告のあかりちゃんにお願いしたいと思いまゝす。あかりちゃんお願いしますねゝ」

あずさ「ニュース!？」

あかり「はいはい。わかりましたよゝ次回の物語は番外編!! お兄ちゃんのロリコン疑惑確定に!! お父さんになった日、故郷ドタバタ記の三本です」

あずさ「え!？なにそれ!？しかもサ エさん!？」

リマ「ではまた次回ゝ」

番外編 お父様に会いに行くよ!! b y ルウ（前書き）

リマ「ねえねえ更新スピード早くない!!」

あずさ「いや、遅いだろう」

リマ「前よりだよ!!」

あずさ「まあそりゃあな。でもほかの作者の人は一週間に一話ぐらいの間に打っているし」

リマ「もういいよ!!このロリコン!!」

あずさ「んなつ!!」

リマ「ではどうぞ」

番外編 お父様に会いに行くよ！！ byルウ

○柊あずさのロリコン確定！！（私のお父様）

お父様がないよ～

ねえお父様どこ？

少し前からなんかきどろつか？ってところに配属されたいけど……

あれ以来、おうちに帰るのが少なくなってきた

もとから帰ってくるのは少なかったけどまだ今までは帰ってきてくれた

でも今回は一度も帰ってきてくれてない

そうだ、きどろつか？に行けばいいんだ！！

そしてお父様に話を聞こう！！

もしかしたら悪い虫がお父様についているのかもしれないしね！！

たしかお姉さん？だっけ？お父様が言っていた人たち。

あの人たちのせいなんだろう！！

絶対に許さない

少女は自分の家から小さなリスの人形と少女と男性が写っている写真を持って肩掛け鞆とともに飛び出した

*

ここかな？ここだよね？ユーノちゃんに聞いてきたし

無限書庫で地図も借りてきたからあっていると思うんだけど……

「それにしても大きいな。ここが隊舎か。」

少女が見上げる先には大きな隊舎があった

「お父様の住んでいるところは……この中ですか。」

中に入ると少女の視界には大きく広いロビーが広がった

少女はきよきよとあたりを見渡し案内板がないかを探す

「案内板がないですね……では……どうしましょう?。」

あたりをうろつくと彷徨う

うろつろ、うろつろ

「……ぐすつ……パパ……どこ?……」

涙がにじむ

少女は自分の呼び方が変わっていることにも気づかないで歩いていく

「あれ?君どうしたの?。」

とそこで前の曲がり角から女性が曲がってきた

「パパがいないの……」

「パパ!? そんな年齢の人この隊にいたっけ? でも、ま、私も探してあげますよ。」

「……ホント？」

女性は考える姿を取るとうなずいて一緒に探してくれるという人見知りの少女であったがなぜかこの女性にはなぜか安心できるどうしてだろう？ パパと同じ匂いがするからかな？

「パパをどんな人なの？」

「とても強くてかつこいいの！！それで優しいの」

「うーん。戦闘系の人かなあ？でも、機動六課の戦闘要員はほぼ女性だからなあ？なのはさんに聞けば分かるかな？」

「なのは！？聞いたことあるです！！お父様をたぶらかす悪い虫の一人です！！」

その言葉に女性は驚愕する

「ええー！？なのはさんが男の人と！？しかも子持ち相手に！？こ、これはフェイトさんにも言わなければ！！……あれ？お父様？」

「フェイト！？そいつも聞いたことあるです！！悪い虫の一人です！！」

さらに驚愕が走る

「ま、待つて待つて。まさか禁断の三角関係！？いや、でも仲がいい二人が一人を巡るって……昼ドラ的展開キターーーーー！！これははやてさんにも伝えなければ！！」

「はやて！？そいつも！！お父様をたぶらかす悪い虫が全員あげられましたです！！」

驚愕が――――

「まさかの四角関係！？」

「？お姉さんどうかしましたか？」

どうしたのだろう？

何やら叫んでいるけど……早くお父様に会いたいなあ

「と、とりあえず訓練場のところへ……」

「わかりました」

てくてく、てくてく

*

「ねえその……お父様？のもっとわかりやすい特徴とかわかる？」

「えつと……あ、魔道士です！！」

いや、魔道士なのはここで戦闘系の人つてところでわかるんだけど……
彼女はため息をつく

「得意な魔法とかわかるかなあ？」

「はい！！お父様は水の変換資質を持っているのです！！」

待つて待つてそれってもしかしてお兄ちゃん！？

「……………ええつともしかしてお父様の名前つて柊あずさだったりする？」

「はい！！その通りです！！なんでしっているのですか？」

ええ～～～お兄ちゃんも子持ち！？あれ？相手は？まだ彼女とか聞いたことなかったけど…それ以上にお兄ちゃん若すぎるでしょ！！

「なんでつて私のお兄ちゃんだよ～～！私は柊あかり。あなたは？」

「お姉さんはお父様の妹？本当ですか！？あ、私はルウ・ヒイラギです」

柊の姓まで！？私やお姉ちゃんには何も言つてなかったのに！！

「ルウちゃんか～ま、まあ早くお兄ちゃんのところに行こうか」

「はい！！」

元気だな～そんなにお兄ちゃんが好きなのか～

そんなことを思っているとき前からFW陣の人たちの姿が見えた。
訓練が終わったのだらう

「お兄ちゃん。小さいお客さんが来ているけど」

「おう、あかりじゃん。どうしたの？お客さん？小さい？あれ？何でみんな少し引いてるの？なのはお姉ちゃんまで……！」

「いや、やっぱりあずさはロリコンなのかなって」

「待って待って俺は違うからね！？ねえフェイト姉も引かないでよ」

「あずさは昔は可愛かったのにいまは犯罪者予備軍かあ」と思つて」

「う、うわああああん！！！！フェイト姉にまで言われたー」

「ねえお兄ちゃんお客様が……」

お兄ちゃん泣いちゃってるし……あれ近くにいたルウちゃんがない

「おと~~~~さま~~~~!!!!!!」

「うおっ！！あれ？ルウ？何で！？」

ルウちゃんがお兄ちゃんに抱きついた。それと同時に、お兄ちゃんがルウちゃんを抱きあげた。

「兄さん……」

「私もやってほしいな（ぼそっ」

「キヤロ！？わ、私がやってあげるから！！」

「フエイトちゃんも変わらないね」で、あずさ君、その子だれ？お父様とか呼ばれているけど……」

あれ？なのはさんから黒い気が出ているような……

「なのはお姉ちゃんから黒い気が……いや、ルウは俺の娘ですけど」

「あ、血はつながっているわけじゃないので……」

「うん。私とお父様はつながってませんよ。悪い虫一号」

あ、悪い虫っていった！！なのはさんの黒い気がさらに黒くなった気が……

「ちよつ！？ルウ！？何言っちゃってんの！？」

「ふん！！お父様は渡しませんからね！！」

「いや……何を言っているのかわからないかな？かな？」

ひ
い
い
い
い
い
い
い
!
!
!
!

なのはさん怖い！！怖いよ！！

「な、
なのは？」

「なにフェイトちゃん？」

「相手はまだ子供なんだからそんなに怒らなくても……ルウちゃん？
何であんなこと言ったの？」

「話しかけないでください!!悪い虫二号!!」

「二号!?!」

フェイトさんが驚いてる

あゝあ、この事態どうするんだろう

「あれゝみんな何しとるんや?こんなところで」

はやてさん登場!!

これまたタイミング悪い

「あ、悪い虫三号です!!」

「いきなりなんや!?!この幼女!!」

ピンポンパンポーン

ここで問題です

Qこの後あずさはどのように決着をつけるでしょうか?

もつとも答えが近い方にはあずさを勝手に使用する権利がついてきます!!

正解はまた次回!!

番外編 パパと私 by ルウ（前書き）

リマ「さあさあ問題出したまんま2、3か月たってしまいました！
！」

あずさ「お前傷は大丈夫か？」

リマ「うん。もうばっちり！！遅くなって本当にすみません！！実は事故に巻き込まれてしまい1か月ほど生死を彷徨ってました！！」

あずさ「元気に言うことじゃねえ！！」

リマ「ではどうぞ！！正解は本編で！！」

あずさ「もしかして頭撃った拍子にいかれたか？」

番外編 パパと私 by ルウ

「痛ててて……悪い虫なんて言葉どこで覚えてきたんだ？ルウ」

俺は今部隊長室にいる。……正座で。

隣にいる……正確にはいま俺の膝の上に頭を乗っけているルウに聞く

「えっと……テレビでやってたのを見たの」

ごろごろ

「膝の上でゴロゴロすんなー!!」

ぺしん!!

「あう」

「それはそうとどうやってここまで来たんだ？」

「頭が痛い……ユーノちゃんに聞いてきたの」

「あのユー兄のバカ。あれだけ教えるなっつていったのに……」

「ユーノちゃんは優しいから」

二人で話すのが懐かしいからかルウの機嫌が良い。というか甘えがすごい……

いつもはもう少し人目を考える子なんだけど……

正直、

周りのみんなの目が痛くて泣けてきます

「どうしたの？パパ？」

「えっと……ルウは気にならないのかな？」

「何が？周りに浮いてるホコリをいちいち気にしていたらダメだよ？あ、あかりお姉ちゃんもこっち来て一緒に遊ぼうよ」

ルウはお茶を入れに席を外していたあかりを見つけて近づいていく周りのホコリって皆のこと？

皆の目からあかりが失われていくのが俺でもわかる

「えっえ？いいけど……あ、お兄ちゃん、聞きたいことはみんなのほかに私はあるから……あとで『ぽつきり』教えてね……」

あかりがルウを抱きながら静かにゆっくりという。もちろん目にあかりはない……

妹よ、そこは『ぽつきり』ではなく『じっくり』だと思うぞ
それだと俺の骨が怖い事になる……

「……ほな。ルウちゃんはおかりちゃんが見ておるから話を聞かせてもらおか？あずさ」

ちなみにこの部屋に来るまではみんな怖かった。

だって、はやて姉ちゃんが額に青筋浮かべながら笑顔で「話は部屋で聞こか」といってからみんな黙ったままじつと俺のこと観てくるんだもん

「えっと、何を話せば？」

「まずはあの子についてや」

あの子とはルウのことだろう

「あいつはルウ・ヒイラギ。5歳で僕の養子の一人です」

「養子の一人ってことは他にもいるの？私みたいに」

と、フェイト姉が聞いてくる。そしてもう一人、

「てことはほかにも柊の姓を与えている子がいるってこと！？」

「まあ、何人かは。ほかにも養子にはしていないけど援助している子ならたくさんいるよ。あと、柊の姓を与えているのはルウだけだ。そんなに取り乱すなあかり」

「いつからや？」

「え？何が？」

「いつからルウちゃんと住んでるのや」

「2年前からだけど…」

「いきさつは？」

なんだろうはやて姉ちゃんがとても怖い。それはもうなのはお姉ち

やんの悪魔モードと同じくらい

でもこのことはあまり言いたくないことなんだよね

それはもう、みんなのキオクを消していたことと同じくらいだから、

「落ちていたこいつを拾いました」

ごまかす!!

「誘拐やないか!!」

「あずさ君がそんなことは思わなかったよ……お姉ちゃん悲しい!!」

「うつわ、あんたサイテーよ。いくらロリコンだからって」

「お兄ちゃんそれはちょっと……」

「兄さん……」

「そっか。拾ったんだ」

「スバルさんその反応はどうかと」

みんなの目が痛い。さらに評価が下がったような……
他の言い訳を考えなくちゃ

「嘘だよ嘘嘘。実は家に侵入したときにこいつがいたから貰ってきました」

・
・
・
『完璧な誘拐じゃないか!!!!!!』

あれ？また、間違えた…

「本当は昔の恋人との間にできた子なんです」

「もういいわ。なのはちゃんやっていいで」

「うん。わかったはやてちゃん」

なのはお姉ちゃんが俺の前に来る
そして…

ドスッドスッ

…大きな石の塊を俺の膝の上に召喚させた…：キャロに

俺は今石を優しくひざまくらしています…（詩的表現）

「って痛！！大昔の拷問じゃないか！！キャロも参加しないでよ！
」

「なのは教官の言うことは絶対だから、ね」

「だったらホントのことを話したらどうや」

自分の死と白状。どっちがいいか……

「ルウ。この人たちは大丈夫だから話してもいいよな」

「パパの死とは変えられないからね」

と、近寄ってきて石に手を触れ消した

「消失した!？」

そう。ルウにはあるレアスキルがある。物体消失という…
それに関係しているのがルウとの出会いだ

「これはルウのレアスキルです。このスキルの名は『物体消失』文字通り物を焼失させる能力です。
まあ制限はありますが」

「制限は意外と多いから多用はできません」

ルウが補足する

制限は多いというか難しいのが本当だが

「で、ルウと出会ったのはこのスキルのせいでもあるんです。ある任務で行った違法研究所でいいようにつかわれていたんです。まだ小さいルウが。そこで、研究体も含めすべて救い出したのがきっかけです」

「で、私をパパの子供にしてくれたんです」

「そこに関しては自分でもあまりよく知らないのですがきつと昔の自分に表情が似ていたんだと思います。親を亡くして無理して頑張ってた時の自分と」

女装とかさせられたりしながらもがんばっていた自分と……
姉さんのせいで…

なのはお姉ちゃん達に助けられるまでだけと

「それで柊の姓まで与えたと」

「一緒に住むんだから当たり前だろ」

「私たちに何の相談もなかったし」

「いやフェイト姉たちのキオク封じてたから」

なんかあかりは柊の姓にこだわっているけど何かあったのか？

「パパ〱お腹空いた」

いきなり抱きついてきたルウを条件反射で抱き上げる

「そろそろ昼だな。じゃあご飯でも食べに行くか。よっと」

「久しぶりにパパの手料理を食べたい」

「だったら部屋に行くか。エリオ〱キャロ〱お前たちも来るか？」

「う、うん」

「行く」

このまま扉へいければ

ルウを抱き上げたまま立ち上がり出口に向かう

ふと、窓のほうを見ると雨がぽつぽつと降っていた

そう、俺がルウと家族になった日もこんな日だった……

「話はまだ終わってらんで」

ガシッガシッガシッ（なのは、はやて、フェイトに肩をつかまれる音）

「痛たたたた！？なに！？せつかく回想に入ろうとしていたのに！
！」

「一番聞きたいことが残ってるんだ」

「『悪い虫』ってどういうことなのかな？」

「じっくり教えてもらおうか？」

ホントに肩がちぎれそうですよ

俺だって何の事だかわからないのに……

「ルウ。何であんなこと言ったんだい？お父さんに言ってみなさい」

「へ？当たり前じゃない。お父様があの人たちの話をする時の顔は私のことを見ていない」

あ、お父様に戻った

「お父様は私がいればいい。あと、あかりお姉ちゃんのことを」

「いやいや、戦うときはあかりと一緒に良いのはわかるけどお前は戦えないしなあ……」

俺が言葉を発した瞬間ルウが顔を真っ赤にした

「お父様はいつもいつも戦う話ばかり！！なのに私が練習しようとする」「まだはやい」の一言でやらせてくれない！！お父様が帰ってきてくれた時は言わなかったけど戦いの話とあの人たちの話をしているお父様はキライ！！！！大っ嫌い！！」

キライ？イマナンティッタ？へ？

ルウは俺の腕から飛び出して部屋を出て行ってしまった
皆も突然のことで啞然としている

ただわかったことはルウがさびしい思いをしていたということだ

「あずさ？」

「お兄ちゃん！！ルウちゃんのことを追いかけないと」

キライ。キライ。ダイツキライ。

頭が真っ白だ。何も聞こえない感じない

「お兄ちゃん！！……な、なのはさん？」

パシンッ

「……………ふえ？」

何をされたのかわからなかった

じんわり痛む頬から俺はなのはお姉ちゃんから殴られたことに気が付いた

「あずさ君！！あなた親なんでしょう！！キライの一言で真っ白になつてどうするの！！もしここが戦いだつたらどうするの！！守りたいものはすべてなくなってるよ！！目が覚めたんだつたらさっさと迎えに行く！！」

「う、うん」

ダッ

急いで見つけるためにも魔法を使う

エリアサーチをしながらも昔のことを思う

いつも落ち込んでいる俺を励ましてくれたのはなのはお姉ちゃんだった

「見つけた！！」

場所は外、中庭の真ん中にルウはいた
あ…あの時と同じように静かに座って

「ルウ！！」

「……………お父様」

ルウがこちらを振り向く

「ごめんな。さみしい思いさせてること知らなくて。そうだよな、まだルウは5歳だもんな

ルウがあまりにいい子だから忘れちゃったよ。これからは家にも戻るしルウともっと遊ぶから……許してくれないか？」

「うん！！お父様ごめんなさい！！」

走り寄ってきて抱きついてくるルウ

「謝るのは俺のほうさ。これからはわがままもしっかり言っただぞ。じゃないと俺もわからないから」

「うん。うん」

「……そういえばあの時もこんなだったか」

「あの時……？」

「いや、無視してくれ」

「うん。……お父様、お腹空いた」

「そうだったな。じゃあごはん一緒に作ろうか。みんなも呼んで」

「私の料理スキル見せてあげる……それで皆さんに謝る」

うん。やっぱりルウはいい子だ。家事も一人でこなせてしまう

だからたまに何歳か忘れてしまう
まだとても小さい子だということを……

二人で歩きながらやはり考えてしまう
家族になった日を……

ルウはわからなかったかもしれないけどあの出来事で俺は救われた
んだ。

あれからいつも暖かいお前がいたから壊れることも少なくなった
まあルウには言わないけど

番外編 パパと私 byルウ（後書き）

リマ「正解は……あれ？何かしたっけ？」

あずさ「……謝ったわ！！もちろん」

リマ「じゃあ正解は謝る？になります。近いのでイツキさんどうぞ」

あずさ「俺マジで行くの？」

リマ「いや、返品される可能性高いからね〜向こうの人次第だよ〜」

あずさ「感想くれた中にはお前の出張券と間違えている人もいたが……」

リマ「まあ行ってもいいんだけどね〜」

あずさ「こいつやつぱり頭撃ったんじゃない？」

リマ「撃ってないわよ！！次回予告するわよ！！別にやらなくてもいいんだけどね！！」

あずさ「いや、やってくださいお願いします」

リマ「あんたのためにやるんじゃないんだから！！次回はまあ毎度おなじみ過去話と昼ごはん騒動です」

あずさ「なにそれ気になる！！」

リマ「なるべく早く書きます。あんたのためじゃないから!!」

あずさ「もうなにがなんだかわからないよ」

リマ「では感想待ってます!!まじで」

あずさ「俺も待ってます!!どんどんくるとうれしいです」

リマ「べ、別に欲しすぎるわけじゃないんだから!!」

あずさ「でわでわ」

リマ「また次回」

番外編　またまた過去話（前書き）

リマ「これにて番外編お・し・ま・い!!」

あずさ「いろいろおかしいぞ!？」

リマ「私の作品しつかり一語一句漏らさずに読んでね？」

あずさ「やっぱり前回から壊れてる!？」

リマ「でわ〜ど〜ぞ〜」

番外編　またまた過去話

○またまた過去のお話

朝起きると家の中がきれいになっていた・・・

「だあ~~~~!!!!またやりやがったなルウの奴!!ルウ~~~~」
「!!!!!!」

俺は叫ぶ

なぜならばきれいになっていた代わりに大切な写真が数枚一緒に捨てられていたからだ

せつかくの姉ちゃん達の等身大ポスター（管理局限定1万円!!）が!!

隠しておいたはずのものまでなくなってしまっていた

——そう、このころの俺はかなりのシスコンだった（肉親じゃあないが）

「なんですか？」

「なんですか？じゃねえ!!あれほど勝手に物を捨てるなど言っているのになんてことしてくれるんだ」

「それは……ルウを見てくれないからです（ぼそっ）」

「?何て言っただよ!!しっかり聞こえる用にいえ!!まったくやっぱり養子にするんじゃないかった」

こいつと暮らし始めて1週間俺は一瞬の気の迷いで家族にしま
ったのを後悔し始めた
どんどん俺の宝物が捨てられていつている

「……………あう」

「……………っち」

またこの顔だ。昔の俺と同じ悲しみを無理してこらえている顔
この顔を助けたときに見せられたせいで家族にしようだなんて……

「もういいよ。朝食、勝手に作るけど何でもいいか？」

「……………はい（にこっ）」

「急がないと任務の時間に遅れるじゃないか（ぼそっ）」

「え！！今日は遅くなるのですか？」

「んあ？……………ああ。もしかしたら長くなるかもしれない」

確か管理局内の異分子排除だったかな
何人いるのか見当もつかねえ

「もしかして裏のお仕事ですか？」

表と裏、俺の仕事には二種類ある
表では武装隊
裏では暗殺隊

裏の仕事ではミスは許されない
また同業の者の任務を邪魔してはならない。というおきてがある
しかし俺は一度だけ破った。

高町なのは暗殺事件に

他の奴がその受けた任務え俺は知って邪魔をした
……結局助けられずにガジェットによってなのはお姉ちゃんは重傷
を負ってしまったけど

「ああ……それがなんだっていうんだ」

「……いえ、なんでもありません」

この頃ルウの様子がおかしい
掃除という名の排除を行う日が多くなってきた
それに何か話そうとしてるのに離さない態度も多い
それが俺をいらいらさせる

「あつそ。じゃあ作り始める」

さつさとこんなむかつくところからはいなくなろう

「まだ私を家族とは見てくれないのですねお父様……」

だから歩き去った後にルウが言った言葉は俺は知らない

「今日も終わったか。意外と楽だったな」

だって依頼者の都合のいい奴だけ殺せばいいんだもん
しかも殺した奴は任務中に消失ってことになっているし
血さえ抜いちゃえば楽勝だぜ

「お疲れ様でした」

「ちっ……まだ寝てなかったのかよ」

「……………ちっ」

「……………え？」

イライラで返した返答に舌打ちするルウ
それに対して俺は茫然した

「こつちが仲良くなりたからサイテー限の我慢はしてるってのに
どういうことだよ？」

いつまで記憶を消した姉や自分から捨てた家族に寄りすがってんだ
よ！！自分から捨てたって？捨てきれてねえのはどつちだよ！！ル
ウはあなたの支えになりたいから家族になることによるこんだ。で
もあなたは私に心を開かない！！」

「ちよっ……何言って」

「私は仲良くしたいの……ううん。あなたと一緒に暮らしたい！！
思い出を作りたい！！あなたが過去に寄りすぎらなくてもいいよう
に……たくさんの思い出を作りたいの！！あなたの支えになりたい
の……」

突然のルウの思いに対して俺は戸惑いが隠し切れない
こんなことを思っていたなんてしらなかった

……どうでもいいが途中から口調変わっていないか？
ついでにこの状態のルウをこれからブラックルウと名付けた

これを機に俺とルウは本当の家族になったのだった……

「……………それはいいけど俺はまだお前が捨てたポスターたちのこと
忘れてないからな」

「あつ……これからも捨てていきます」

「なんだって!!」

○お昼ごはん騒動

「これ鍋に入れて」

「はい」

とんとんとん

「これも」

「はい」

「あ、二回に分けて入れるなんてよく考えたな」

「食感が変わるから」

「俺がない間どれだけ料理作ったかわかるな」

なでなで

「はふ」

「あ、鍋できたな。あとはデザート作るから持って行ってくれ」

「はい」

「じゃあガトーショコラでも作るか。簡単だし」

ガトーショコラは質より量の奴ら（スバルとエリオ）がいるから混ぜるだけのほうにする

材料を混ぜるだけっ！！

いやゝ簡単だ

ってことで混ぜてオーブンで焼く
じゃあ俺も食べに行くか

「つてもうほとんどねーじゃん!..」

「いやーおいしいなあ」

「ほんとほんとルウちゃん料理上手いね」

「ありがとうございます。なのはさん」

「ほらっエリオあゝん」

「はむはむ……スバルさんこれもおいしいですよ!..!はぐはぐ」

「うん。こっちもいけるよエリオ」

「ズーン……食べることはっか…」

「フエイトさん私が食べますから」

「スバル食べ散らかしすぎ…」

「おいしいのです〜」

「ヴィータちゃん私のも食べてください」

「いやだよ。シャマルのを食べる腹壊すしあずさの奴のほづがうまい」

「同感だ」

「うむ」

「シグナムとザフィーラまで!？」

「あ!!お兄ちゃん。おいしいよ」

皆がくつろいでた。いつの間にかルウとも仲良くなってるし俺の存在に気が付くのあかりだけだし…

影薄くなったか？俺？

ここは俺が出てきてみんなから褒められるはずだったのに…
まあルウがみんなと仲良くなったからいいか

番外編　またまた過去話（後書き）

リマ「最後ちよつと駆け足になっちゃったけどみんななら別に許してくれるよね？」

あずさ「おいおいおい！？ほんとにどうしちゃったんだよ！？」

リマ「ところで……私に感想……くれるよね？」

あずさ「もしかしてツンデレならぬヤンデレ化！？」

リマ「感想くれないと……くすっわかってるよね？」

あずさ「やめろおおおお！！！！！！」

ぐさっ

あずさ「……ぐふっ」

リマ「ほぐら。早くくれないからあずさが大変なことになっちゃった」

あずさ「に……げ、ろ（ぐはっ）」

リマ「え？くれるの？うんうん。やっぱりみんなはそうじゃないや
！！待ってるからね？」

すみませんで

した

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5076n/>

魔法少女リリカルなのはStrikerS～凡人と呼ばれた男の日常～

2011年9月22日07時53分発行